百萬遍

もと賀茂の神宮寺といひ天台宗に屬して居た。法然上人、道場を建てゝ淨土宗となし釋迦堂と號し今出川にあつた。其後第二世源智上人が法然の影像を祀り智恩寺と改めた。元弘年間疫病流行の際第八世空圓の百萬遍念佛修法に因つて之が終熄を見たので、後醍醐天皇から百萬遍の號を賜はつた。足利義滿が相國寺を建立するに當つて本寺を一條の北、油小路に移した。嘉吉三年淨土宗第一として勅に因つて長老大譽上人に香衣を着して參内することを許されたといふ。寛文年間更に現在の地に移つた。寺僧の言に因れば現在の開山堂は設計を始めてから九十餘年を費やして成つたといふ。

什寶

顏輝筆蝦蟇鐵拐仙人像雙幅（國寶）の外顏輝・秋月等の印記ある畫其他の書畫等頗る多い。

鳥居元忠墓

三河武士の典型、關が原の戰前德川家康の命を受けて伏見城を守り、僅かな軍兵を以つて大阪方の大軍を引き受け奮戰利あらずして戰死、こゝに葬つた。（二二七頁養源院血天井參照）

京都帝國大學　熊野神社前停留場北凡七百米

市の東北、賀茂川以東を一區域となし、此處に京都帝國大學を始め第三高等學校・高等工藝學校・美術工藝

學校・繪畫專門學校等がある。京都帝國大學は明治三十六年六月の設置で、九月に理工科大學の開設あり、現今では法學・醫學・文學・理學・工學の五部がある。文學部には古文書・古代の遺物・標本等が陳列され、歷史地理・考古學者の參考に資して居る。

此の外維新前後國事に盡した人々の遺品・遺墨及其他の資料を陳列したる尊攘堂がある。之は品川彌次郎氏が其師吉田松蔭の遺志を繼いで建設したものである。

吉田神社　熊野神社前停留場北東凡そ千五百米

——社格、官幣中社——祭神、天兒屋根命・武甕槌命・經津主命・姫大神——

春日神社の分身

貞觀年中（凡一〇五〇年前）藤原山蔭が大和の春日神を勸請したもので、此の地は藤原山蔭の邸宅のあつた處である。一條天皇の皇后が此の家から出られたので永延元年に官祭に列せられることになつた。後土御門天皇の文明十六年に同社の神職吉田兼倶が出て、社殿・祭場等の增築を行ひ、朝野の尊信をあつめた。

兼倶は唯一宗源神道を唱導した當代の偉人であつた。本殿は今の第三高等學校敷地内にあつたのを文明年中（約四五〇年前）今の處へ移したものである。

特別保護建造物

齋場所　本社の北にあり、京都室町吉田家邸内にあつたのを文明年中遷したものである。此周圍に内外兩宮及延喜撰格の神三千一百三十二社を奉祀し、吉田神社とは獨立の一社になつて居る。慶長六年の建造で八角形をなし、屋根の上部は唯一神明造の構造である。

陽成天皇（第五十七代）**神樂岡東陵**（カグラヲカノヒガシノミサヽキ）　上京區淨土寺町、眞如堂前

天暦三年崩御、神樂岡の東の地に葬り奉る。陵は小圓墳で外圍は八角形、周圍八十五間。

天皇は清和天皇の第一皇子、平素から御病身で、當時から昏狂日に甚しく、攝政藤原基經之をうれへて廢立を議し、御在位八年、光孝天皇に讓らせ給ふた。壽八十二。

後一條天皇（第六十八代）**菩提樹院陵**（ボダイジユヰンノミサヽキ）　上京區吉田町、陽成帝陵西の辻北凡そ百米

御骨は火葬後しばらく淨土寺に置かれ、後菩提樹院の三昧堂に移された。即ち今の陵で圓墳であるが、後冷泉天皇中宮の菩提樹院も同域内にある。

天皇は一條天皇の第二皇子、御年九才にて御即位、御在位二十年、外祖道長力をほしいまゝにし、天長元年崩御、壽二十九。

眞如堂　熊野神社前停留場北東凡一粁

——宗派、天台宗——本尊、阿彌陀如來——

永觀二年（約九五〇年前）一條天皇の母后藤原詮子（アキ）の建立、一條天皇の勅願所。寺は今よりもつと北東にあつた東三條院離宮を移さられたものである。後醍醐・後村上兩天皇の御歸依（キエ）を蒙つて居たが、應仁以後幾度かの火災に遭ふて、現在の建物は寛永二年の再建である。

十一月六日から十日間の法要を眞如堂十夜と稱して參詣者が遠近から群集する。

黑谷　平安神宮の東二百米、熊野神社前停留場北東凡六百米

——宗派、淨土宗本山——本尊、阿彌陀如來——

淨土宗最初の道場

金戒光明寺と云ふ。法然上人が比叡山西塔の黑谷から出て來て、草庵を結んだのが始まりで、當時は之を新黑谷といつた、淨土宗最初の道場として世の中に重んぜられて居る。後白河天皇以來歷代皇室の尊崇厚く後小松天皇は「淨土眞宗最初門」の宸筆勅額を賜はつた。應仁以後幾度かの火災に遭ふて現在の建物は天明

三年に再建したものである。

維新の際會津藩主松平容保（カタモリ）の本營であつたので、薩州兵のために度々砲擊を受けたが、幸にして燒失を免かれて現存して居る。

鎧懸松　熊谷直實、法然上人に就き剃髮の時、鎧を此の松にかけたと傳へてをる。

墓　本堂の東方山腹にある。

圓光大師納骨塔　熊谷堂の東五輪塔の上方にあり、勢至堂といつてをる。

熊谷直實、平敦盛供養塔、五輪塔二基

山崎闇齋墓　文珠堂の北にあり、江戸時代の漢學者にして神道の鼓吹者、勤王家であつた。

熊谷堂　三門の東にあり、直實剃髮後此所に住せしと傳へ、法然・直實・敦盛の像を安置してをる。

什寶

一枚起請文は當寺隨一の寶物で、法然上人が一枚の紙に念佛の要旨を記したもの（國寶）、山越の彌陀圖・地獄極樂圖屏風、ともに惠心僧都筆と傳へられ何れも國寶である。

聖護院（セウゴヰン）　市電熊野神社前停留所場北東三百米

――宗派、天台宗大本山――本尊、不動明王――

智證大師圓珍の開基で園城寺（三井寺）に屬し、常光院と號し愛宕郡長谷村にあつた。寛治年間三井寺の聖護院增譽僧正の入寺に因つて今の名に改められた。今の寺は後水尾天皇の延寶年間に移建されたものである。天明七年と嘉永七年と兩度に皇居炎上の際行在所に充てられた。

修驗道

役小角を元祖として深山、幽谷に難行苦行する佛敎の一派で、山伏又は修驗道と云ふ。眞言宗醍醐三寶院に屬するものを當山派又は醍醐派と云ひ、天台宗聖護院に屬するものを本山派又は聖護院派といつてをる。

聖護院大根

今は周圍が人家に覆はれて見ることは出來ぬが、昔は寺の附近一帶は聖護院蘿蔔（ダイコン）の名所であつた。

聖護院八つ橋

菓子の一種で京都名物の一である。短册形に壓縮した褐色の澱粉製のものである。

（五）中央南部――東寺から二條離宮まで――

順路

東福寺停留場――東寺――興正寺――西本願寺――本圀寺――東本願寺――佛光

寺――六角堂――二條離宮――革堂――本能寺――三條停留場――（行程約十三粁）

東　寺

奈良電鐵東寺驛西およそ二百米、市電九條東寺道停留場西凡そ千五百米

――宗派、眞言宗本山――本尊、藥師如來――

西寺と東寺

教王護國寺と號し、一名を左寺とも云ふ。桓武天皇延曆十五年大納言藤原伊勢人に命じて、平安京羅城門（ラシヤウモン）の左に建立せられた寺で、其右に建てられた寺を西寺と稱し、左右相對して兩京の鎭護に充てられたが、西寺は早くも荒廢して大内村八條に其礎石を殘すのみとなつた。東寺は弘法大師の德望と皇室の御保護によつて永く密敎の根本道場として保存され盛なる法脈を保つて居る。

天長年間、空海が勅命に因つて東寺の長者に任ぜられたのが始まりで、以後勅旨によつて永く相承けて長者に任ぜられる例になつて居る。後宇多天皇は御讓位の後東寺西院に入りたまひ、三ケ年間御修法を續けられた。後醍醐天皇は此の寺に於て灌頂をお受けあそばされた。斯く皇室の御保護厚く幾度か祝融の災があつても、まもなく再建及修築が加へられて寺門の隆昌が日々加はつて來た。併し應仁・文明の兵火を受けて以來は久しく荒廢してゐたが豐臣秀吉之を修繕し、德川氏亦五重塔を再建し、現在の如き宏壯なる建築を見る

に至つた。

特別保護建造物

金堂　慶長年間秀頼の再建で、南面重層、入母屋造、藥師如來を祀る。

講堂　同年間秀吉の室高臺院の建立、大日如來・五大尊・四天王像を安置。

西院　大師堂で空海の像を安置。

蓮華門　鎌倉の初期文覺上人の建立せる八脚門で、校倉（アゼクラ）とゝもに寺中再古の建物である。

校倉　元々東西の二倉があつたが共に早く燒亡し、現在の建物は、前の蓮華門と同じく文覺上人の建立で、千年以來の寶器や、古文書が容れてある。

五重塔　德川家光の造營で、本邦第一の高塔である。基礎方九米、高さ五十五米、内壁の四方に眞言八祖の像を畫き、四隅の柱には兩界曼陀羅を描いてをる。

觀智院

後宇多法皇の御創建で、僧杲寶（カウ）を開祖とし別格本山の一である。以來五百年當院の住持は東寺の別當職を兼ね、歷代學德の勝れたる人をもつて之に任ぜられた。

東寺御修法

毎年一月八日から十四日まで七日間、寶祚長久、國家安穩の御修法を勤行（ゴンギヤウ）する。之を灌頂院又は眞言院御修法ともいふ。弘法大師在世の時は宮中眞言院に於て執行せられ、それが維新前まで行はれたが、

明治以後東寺灌頂院にて勸行されることになつた。御修法の當日は勅使が派遣せられて御衣を奉持し、頗る莊嚴を極めるといふ。

御影供養

弘法大師が入寂した三月二十一日をもつて行はれ、遠近より當日獻納する繪馬の形を占つて其年の豐凶を豫知するのが例になつて居て、參詣の男女群集し露店や諸興行物境内を埋め、南部京都第一の名物になつて居る。

百合文書（ヒヤクゴウ）

後宇多・後醍醐・後光嚴三天皇御宸翰（國寶）風信帳一卷、眞言七祖像贊七幅（共に國寶）以上は空海眞蹟、傳敎大師筆請來目錄一卷（國寶）を始め多くの古文書がある。

貞享五年加賀藩主前田綱紀この古文書保存のために、古文書櫃一百を寄進した。これを東寺百合文書といつて、我が國史の貴重なる史料である。

附近

六孫王神社　東寺の北東にあつて源氏の祖先六孫王經基を祀る。今、鄕社に列せられてをる。

西寺　東寺と同じく藤原伊勢人が勅を奉じて建立し、弘仁中守敏僧都此處にあり、空海と並び稱せられたが、後衰へて西方寺と云ひ遂に姿を消してしまつた。

羅城門址　東寺の南門より西三百米に在り、平安城の南大門で朱雀大路の南端にあつて、遙に大内裏

の正面應天門に對して居た。

興正寺　七條西洞院停留場西二百米

——宗派、眞宗興正寺派本山——本尊、阿彌陀如來——

佛光寺第十四世經譽の兄、經豪の創立した寺で、文明年間衆徒を率ゐて蓮如に歸依し、佛光寺の舊名を取つて興正寺と名づけたものである。天明年間現地に宏麗な殿堂を營んだが明治三十五年火災に罹つた、現堂宇は其後の改築である。寺はもと山科にあつた。

本派本願寺　西六條停留場西二百米

——宗派、眞宗本願寺派本山——本尊、阿彌陀如來——

西本願寺

宗祖親鸞上人の正統を傳へ宗家として一宗に重きをなして西本願寺と俗稱されて居る。天正十九年第十一世顯如上人、豐臣秀吉の好意によつて寺地を賜はり、大阪の天滿から此所に遷つて來た。境内の大建築物は殆ど保護建造物で、其中でも桃山城及聚樂第の遺構は本願寺ならでは保存し得ぬ立派な建物で、全國に散在

して居る桃山時代建築中最も整つた、最も大規模なものである。

本願寺の建立まで

第八世蓮如の熱烈なる念佛宣傳は、やがて延暦寺衆徒の反感を買ひ其根據を燒かれてしまつたので、山城の山科を本山として此處に居た。ところが山科御堂も亦日蓮衆徒の燒く所となり第十世證如は大阪石山別院を本山とした。第十一世顯如の時織田信長は政策上石山の寺地を讓らんことを求めた。顯如の應ぜざるを見るや信長は大擧して石山を攻擊したが、容易く降すことが出來なかつたので、奏して正親町天皇の勅裁を得て相和し、顯如父子相携へて鷺の森・貝塚・天滿と各方面を轉々して、天正十九年今の處に基を据えた。其後德川家康の時に東本願寺の創立を見てから、現在の如く本願寺が東西相對立することになつた。

特別保護建造物

大師堂　御影堂とも云ふ。單層入母屋造、寛永十三年の建立で、中央の厨子(ヅシ)に親鸞の座像安置。

阿彌陀堂　單層入母屋造、寶曆十年の造營である。阿彌陀の立傳を安置。

唐門(四脚向唐門)　書院・玄關何れも桃山城の遺物で同時代の代表的傑作である。

黑書院　重層四注造で明曆二年の造營である。

飛雲閣　頗る複雜なる屋根と間取を有するにも關はらず、金閣や銀閣に見るやうな氣持の良い表現をもつてゐる。天正十五年秀吉の築いた聚樂第の遺物で、內部には狩野派の名畫家が揃つて名畫を殘して

居り、滴翠園と稱する同寺園中に建つて居る。

什寶

正親町・後奈良兩天皇勅書。織田信長血誓文。信長・秀吉・家康書狀。大阪籠城記等。

本圀寺　島原口停留場東、西本願寺北隣

——宗派、日蓮宗——本尊、題目寶塔——

もと相州鎌倉松葉谷に在つたのを興國六年現地に移したもので、日蓮が建長五年法華堂として創立し後本圀寺と改稱した。上足日朗(ジヤウソク)、日蓮の讓を受け、貞和年中日靜寺地を現所に移した。天文五年法亂に逢つて燒失した。盛時には子院百餘坊もあつたが現在では其三分の一も無い。其でも京都屈指の大寺院である。

寺寶

德川光圀書狀數通、加藤清正の遺品深山(ミヤマ)茶壺は藤堂高虎の寄進てある。塔頭勸持院にある加藤清正像及清正母の像は慶長八年家臣中川壽林の筆と傳へられてをる。

東本願寺　市電東本願寺前停留場

——宗派、眞宗大谷派本山——本尊、阿彌陀如來——

創建は家康の政策

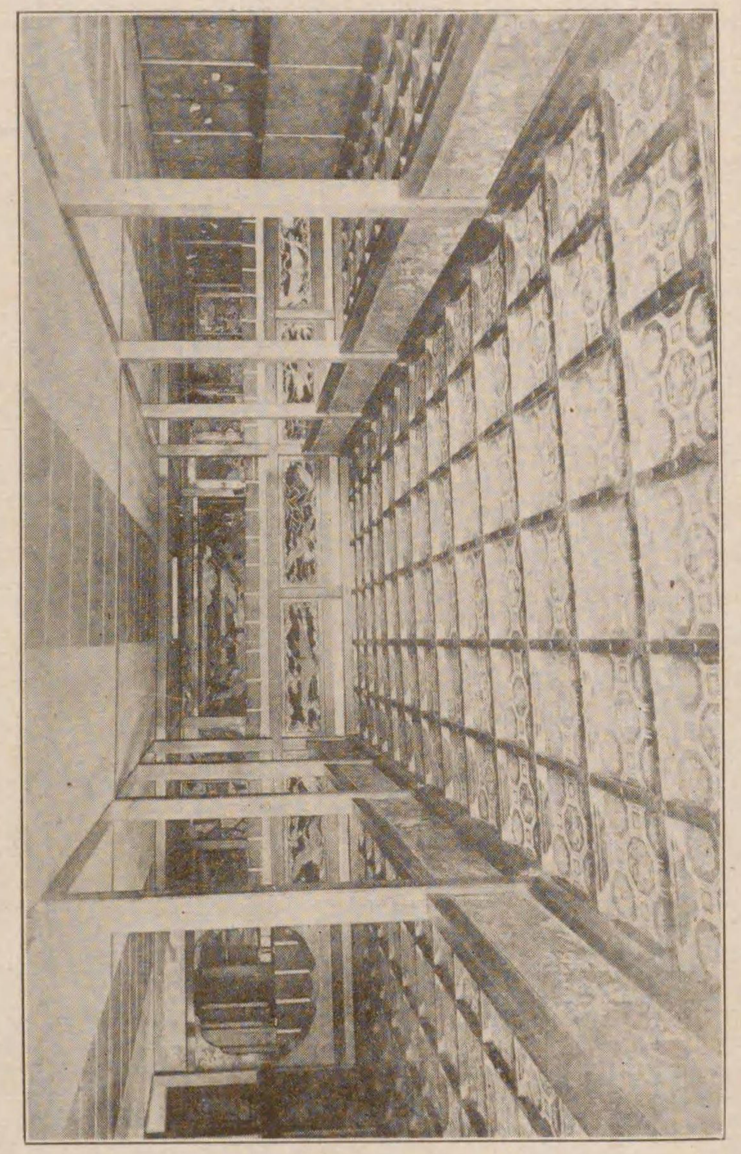
俗に御東さんともいはれ、本願寺十一世顯如上人の長子教如上人の創建である。初め顯如上人は織田信長に對抗して、所謂石山合戰をおこしたが勝敗決せず、遂に和議を結ぶに至つた。性悍剛な教如上人は獨り石山に止つて兵備を修めた。父の上人は之を責めて遂に本願寺を次子の准如上人に讓ることにした。ところが德川家康覇を握るに及んで、本願寺の勢力に鑒(カンガ)み之を二分するため内心平でない教如上人に同情し、「長者本當に嗣ぐべしである」とて寺地數萬歩を與へ、天下の門末に令して之に從はしめた。これ慶長七年（約三百三十年前）で本願寺はこれより後は東西の二つに分れて門末もまた東西に屬し殆ど本支の區別がない。堂宇は壯大華麗で天下の偉觀である。元治年間兵火にかゝつたのを近年再建した。

主なる建築物

本堂は高さ十五間餘、大師堂の内陣の厨子には親鸞上人自作の坐像をおく。大師門と勅使門とはもと德川家康が桃山城の建物を寄せたのであるが、その後幾度も燒けた。その門扉だけは共に舊形を存してゐる。殊に勅使門には菊花の大紋章を付けてゐるので菊の門と稱してゐる。

什寶

應擧筆、蓬萊仙奕圖。見眞大師傳記、惠心僧都來迎佛像、顯如、教如書狀等の古文書が多い。



豐公の豪華を語る——西本願寺鴻の間

佛光寺（ブツクワウジ）　佛光寺通高倉、烏丸佛光寺停留場東約三百米

――宗派、眞宗――本尊、阿彌陀如來――

佛光寺派の本山

建暦二年（凡そ七百二十年前）僧親鸞の開基、もと興正寺といつて山科にあつたが後東山澁谷に移つた。天正十四年豐臣秀吉大佛殿を東山に建立するにあたり、現在の地に移つた。其後數度の火災にあつたが、明治に至つて再興した。

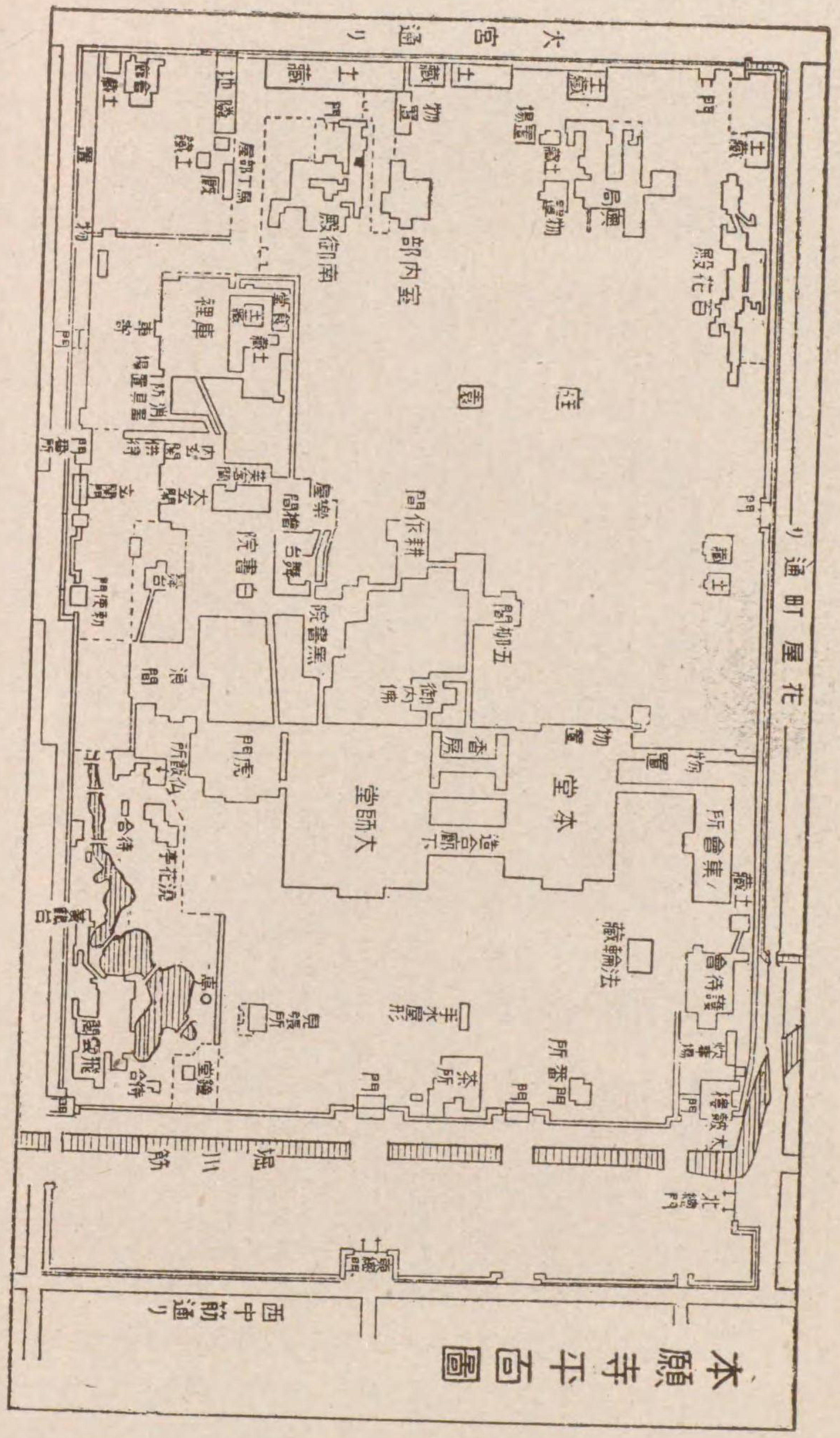
大師堂の中央には宗祖見眞大師（親鸞）の坐像を始め歴代上人の畫影を安んじ、其他阿彌陀堂・方丈・書院等がある。

六角堂　三條烏丸停留場南百米

――宗派、天台宗――本尊、如意輪觀世音――

西國靈場十八番の札所

紫雲山頂法寺と稱し、用明天皇の御宇聖德太子の創建と傳へてゐる。弘仁年間（凡千百年前）嵯峨天皇の勅願所となり、長德二年花山天皇の行幸があつた。京都に創立された古い寺は大抵その位置を替えて居る



本願寺平面圖

が、當寺は創建以來其場所を同ふし然も其が京都市中の最も古い寺であるため、京都の昔を知るのに頗る都合が良い資料になつて居る。

本堂は六角二重屋根で複雑な組み方になつて居て、奈良の南・北圓堂、法隆寺の夢殿と共に特殊なる佛閣建築の原型になつて居る。併し建築年代は極新らしいものである。

寺は西國靈場十八番の札所で、十七番六波羅寺から凡二粁、十九番革堂（カウドウ）へは凡千三百米ある。

わが思ふ心のうちは六の角（カド）　たゞ丸（マロ）かれと祈るなりけり。

池之坊の家元

永觀年中（凡九百五十年前）當寺の住僧專慶、佛供の立花に妙を得てゐた。これが池の坊第十二代で挿花の家元である。廿七世專鎭は東山殿義政に知られ花道家元の稱號を授けられ、相繼いで今日に至り、この道の人達の間に重きをなしてをる。

二條離宮　堀川御池停留場北西二百米

禁裡の守護、監視

もとの二條城で壘壁の整ふたものである。本丸・二の丸の二區に分ち殿閣其中に立つ。德川家康の造營で

彼が上洛の際宿所に充てたもので、慶長八年三月初めて入城した。江戸時代を通じて幕府の代官が居て禁裡を守護、監視した。初二條城代が置かれたが後には在番を置いた。所司代の邸も此附近にあつた。慶應三年十月慶喜が大政を奉還すると共に、太政官代を此所に置かれ、京都府廳も一時此所に在つた。

明治十七年此所を離宮に御治定あそばされた。現在の建物は大部分維新後の建造である。只正殿のみは舊城二の丸の遺物で、我が國現存書院中最も壯大な建物である。

二條離宮正殿

車寄・遠待・大廣間・黑書院　白書院より成り、床・襖・天井等は狩野興意・探幽等の名匠の筆になつた名畫がある。其他の裝飾・金具等能く桃山時代の特徴を表顯して居る。

本能寺　寺町二條停留場南二百米

——宗派、日蓮宗——本尊、題目寶塔——

織田信長が羽柴秀吉の請ひを容れて中國征伐に赴かんとし、天正十年六月當寺に於て逆臣明智光秀のために襲殺されたことは有名な話である。

僧日隆の開基で後小松天皇の應永二十二年五條坊門に創立され、本應寺と號した。其後永亨五年大宮六角

に移つた。信長の討死した當時はまだこゝにあつて堂塔四十餘もあり、寺域も廣かつたが、天正の兵火後今の所に移建して又々元治の兵火を浴び、今は全く舊觀を止めないものになつてしまつた。

織田信長の墓は當寺墓域にある。

什寶

古文書や、古記錄が數多く保存せられて居る中に、一條兼良、同冬良各自筆の書狀、本阿彌光悅筆の屏風等は逸品である。

革堂（行願寺）　寺町丸太町停留場南百米東側

——宗派天台宗——本尊、十一面觀音——

西國順禮十九番の札所

花をみて今はのぞみの革堂の　にはの千草もさかりなるらん。

傳へいふ。開山行圓上人在俗の時遊獵を好み、其鄕里豐後で妊み鹿を射た。其腹が破れて子鹿が生れ出た。牝鹿は身の苦痛をも忘れて子鹿をなめた。上人はこれを凝視して深く感じ、弓をなげうつて佛門に入り、其親鹿の革の裏に千手大悲の陀羅尼を書き、常にこれを着て修業に出た。師は寛弘二年京都に入つたが、これ

ばかりは如何なる時もぬがなかつた。それで其寺をも革堂と呼ぶに至つたと。

（六）中央北部——仙洞御所から本法寺まで——

順路

三條停留場——仙洞御所——大宮御所——御所——蛤御門——護王神社——同志社大學——相國寺——上御靈神社——妙覺寺——妙顯寺——本法寺——三條停留場——（行程約十粁）

仙洞御所

櫻町宮と稱し、後水尾上皇のために德川幕府の造營したもので、其後幾度か火災に罹つたが其都度再建された。併し嘉永七年の火災には遂に再造されることもなく今日に至つた。林泉のみは寛永の昔をそのまゝに今日まで保存され、木石の配合頗る雅趣に富んで居る。

大宮御所

東福門院のため寛永年中德川幕府が造進したものだが、安政の火災以後は舊觀に復せず、常の御殿と一屋

舍のみ再造して今日まで殘つて居る。昔の建物は仙洞と長廊で通じるやうになつて居た。

京都御所

御苑内の中央より稍々北西にあたる。廣さ約東西二百米、南北四百米、墻塀（シヤウヘイ）を繞らし、正門は建禮門で南面してゐる。墻の内は二部に分れて南部は皇居、北部は皇后宮御所、安政三年の建築である。

此の宮殿は大體平安京内裏の制を模し、紫宸殿・清涼殿以下の諸殿があつて、廻廊をめぐらしてある。紫宸殿は御大典を行はせ給ふ所で高御座（タカミクラ）や聖賢障子があり、南階段の左右には左近櫻・右近橘などがある。

當御所はもと大納言藤原邦綱の土御門高倉亭であつた。治承四年高倉上皇がこの亭に遷御されてからは屢屢行幸啓があり一の里内裏となつた。この時分は早や桓武天皇の營まれた大内裏も廢れきつてしまひ、代々の天皇常に里内裏にましました。後醍醐天皇はこの土御門殿で御即位あそばされ、光嚴院もここで御踐祚（センソ）になり、其後は全く天皇の御常住の御殿となつて明治維新に及んだ。

京都御苑

平安京の北東隅にあつて廣さ二十五萬餘坪御苑の地は、天正年間秀吉皇居修理の時、皇族公卿の邸宅を皇居の附近に集めたのが始めで、德川氏も亦これに傚（ナラ）つて公家町といつたが、明治になつて之等の住宅をすつ

かり取拂つて其跡を御苑に擴張した。

仙洞舊院は御所の南東で御苑の東境に接してゐる。東西凡百米、南北凡三百米ばかりの地域でもと上皇の御所であつたが、今は林泉のみとどめてゐる。

祐の井は御所の北で其邊は、舊中山家の址、明治天皇御誕生の地である。破風造りの蓋を堅くしてあるのが御産湯の井で、父帝の命名せられたものである。御産屋は其の西で濃く植込まれた木の間からちかがはれる。

蛤御門は御苑九門の一つでその南西にある。

文久三年八月長州藩主が宮衞を免ぜられたるを憤り、翌元治元年三家老は兵を率ゐて京都へ浸入し、薩摩會津の兵と力戰して擊退された時にとどめた彈丸の痕が今も尙殘つてをる。

護王神社　烏丸下立賣停留場北凡そ二百米、御所蛤御門南西百米

――社格、別格官幣社――祭神、和氣清麿・同廣虫・配神・藤原百川（フジハラノモヽカハ）・路豐永（ミチノトヨナガ）――

清麿は延曆年中高雄山に神願寺を建立した。其後空海神護國祚寺と改め、護法善神社を建てて開創者清麿を祀つたのが本社の起りである。明治七年別格官幣社に列し、明治十九年現所に移されて王城守護神とされ

た。

清麿が惡僧道鏡を退けるために忠節を抽んでだことは有名な話である。廣虫は清麿の姉で、百川と豐永は清麿を助けて其忠義を全ふせしめた人々である。

同志社大學　電車烏丸今出川停留場前東、今出川御門北

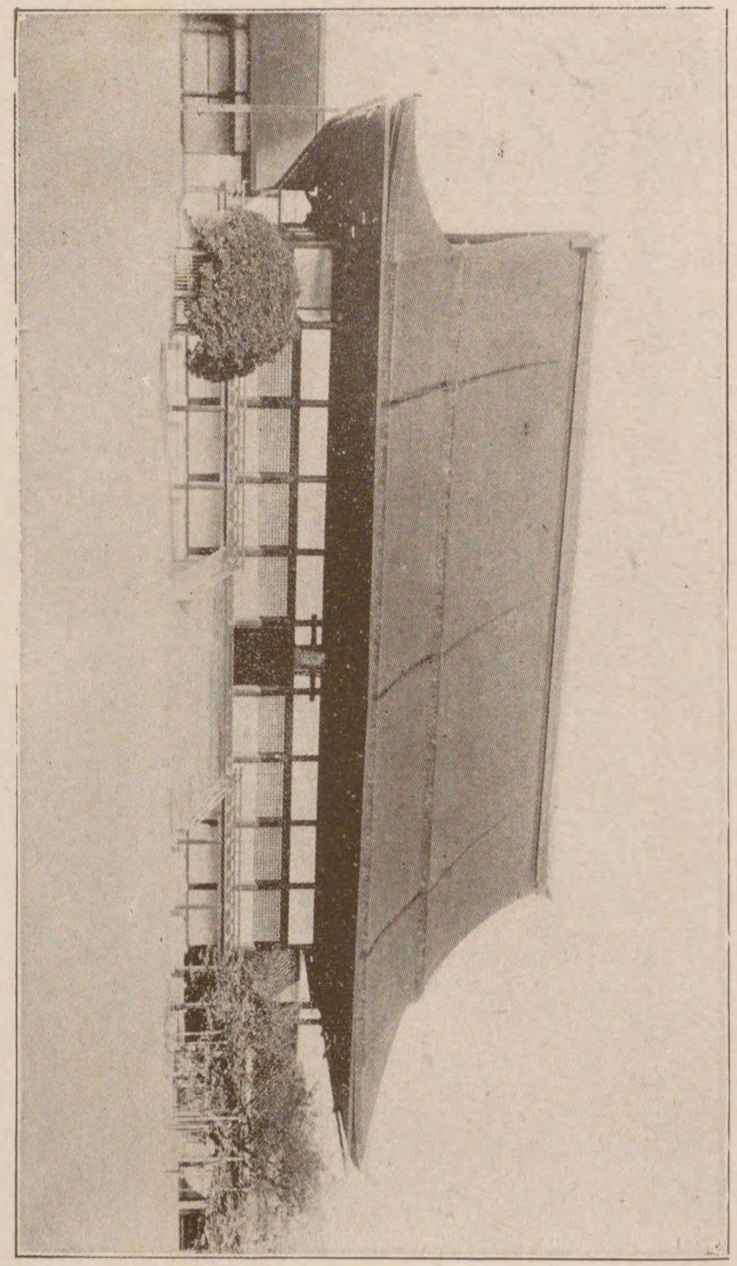
明治八年新島襄・山本覺馬等が基督教々義流布のために創立した學校で、明治四十五年大學を設け外に專門部・中學校・女學校もある。大正九年大學令による適用をうけて、現に法・文二科がある。

相國寺　烏丸今出川停留場東へ三百米より北へ二百米

——宗派、臨濟宗相國寺派本山——本尊、釋迦如來——

義滿段錢を課して建立

永德三年足利義滿の創立で、開山は夢想國師の弟子春屋妙葩（メウハ）である。義滿が諸國に段錢（タンセン）を課して建造したもので高さ三百六十尺の七重の塔を有した程宏壯を極めた伽藍であつたが、創建後十年にして雷火に逢つたのと、應仁の大亂の時東西兩軍の爭奪戰は常に此所を中心として行はれ、一大修羅場を現出し、頽廢久しき



——瑞雲雙鍵——京都御所紫宸殿

に及んだ。豐臣秀頼之を再建したが天明年間の大火に法堂を殘すのみで他の總ては灰になつてしまつた　現在の建物は皆其後のものである。

法堂は桃山時代の立派な形を現存し今特別保護建造物である。

創立當時は堂塔四十を數へたが現在では十分の一になつてしまつた。

室町時代の重要史料たる蔭涼軒目錄六十一册を藏する慈照院には義政の遺骨を葬られ、普廣院は義政の靈屋で、豐光寺は僧承兌(ショウダ)の建立したものである。林光院には朱子學を唱へた學者で參議爲能の子、藤原惺窩の墓がある。

上御靈神社　烏丸今出川停留場北凡一粁、相國寺の北隣

——社格、府社——祭神、崇道天皇・他戸(オサベ)親王・井上(ヰノカミ)大皇后・火雷神(ホノイカヅチノカミ)以下の諸神——

憤死した人々の怨靈

罪なくして憤死した人々の怨靈(オンレウ)を慰むるために祀られたもので、延暦年間の創建である。

本社の後にある畑地は昔御靈林(ゴレウバヤシ)と稱せられた處で、應仁の大亂は實に此所で火蓋が切られ、畠山政長は同

族義就のために破られた。

他戸親王　光仁天皇の第四の皇子で寶龜二年正月皇太子になられたが、母后井上（井ノカミ）大后の犠牲となられ、廢太子、庶人、幽囚の果敢なき運命に沈まれ、同六年四月遂に大和國宇智郡役宦の宅に薨去遊ばされた。

崇道天皇　光仁天皇の皇子で早良（サハラ）親王と申し上げた。天應元年四月皇太子となられ、私怨のため藤原種繼を殺されたことから、天皇の怨に觸れ廢太子となり、乙訓寺に幽せらるゝや絶食日を重ねるも効なく後淡路に遷されられて悶死された。

妙覺寺　今出川新町停留場北一粁、妙顯寺の北隣

——宗派、日蓮宗本山——本尊、題目寶塔——

天正十年明智光秀反意を抱いて京都に上るや先づ信長の宿舍本能寺を襲ふて之を弑し、更らに部下を分つて當寺にあつた信長の長子信忠を圍んで之を死に至らしめた。其時の寺は室町の西二條の南にあつたが、豐臣秀吉寺地を此處に與へて移轉せしめた。開山を日寶と云ひ、中興の祖を日奥と云ふ。日奥は不受不施の法を主張して過激派と見なされ對馬に配流された。

境内には狩野元信以下狩野家累代の墓がある外、信長・秀吉に仕へて右筆となつて居た楠木正虎の墓がある。正虎は永祿二年正親町天皇から朝敵赦免狀を拜戴し、楠氏の裔と自稱した人である。正虎以後の血統は明になつて居るが、その以前の系譜に疑はしい點があるので一般には認められて居ない。

妙顯寺　今出川新町停留場北六百米

——宗派、日蓮宗本山——本尊、題目寶塔——

宗祖日蓮其弟子日像に命じて京都に於ける、日蓮宗弘通のために設けた道場である。後醍醐天皇の勅願寺となり其後屢々寺地を變じたが、天正十二年秀吉命じて現地に移らしめた。

什寶

日像・日朗等の書狀の外貴重なる古文書類を保存し、光悅裝禎の法華經は技巧を極めたものである。

尾形光琳（オガタコウリン）の墓（ハカ）

光琳の墓は本堂東墓域にある。光琳は江戸時代の畫匠で光琳模樣・光琳蒔繪と云へば今日では全世界に貴重され、裝飾藝術をもつて世界に誇る佛蘭西でさへ、其の意匠を光琳に學んで居る處が少くないと云はれて居る。

本法寺　妙顯寺西

——宗派、日蓮宗——本尊、題目寶塔——

大佛鐘銘の眞本

永享八年僧日觀の創立で、現在の堂宇は明治十四年の再建である。

清韓長老自筆の方廣寺大佛鐘銘眞本と傳へられるものがある。豐臣秀吉書狀一幅、松永貞德畫像亦見るべきものである。

英雄豪傑六曲に集る

戰國時代から江戸時代にかけての、英雄豪傑の筆跡を網羅したと思へる程、たくさんの古文書を貼り交ぜにした六曲二雙がある。氣宇世界を呑む秀吉の書もあり、英雄を頤で使ひこなした信長の筆跡、細心にして用心深い家康の文字を始め、「豐國大明神」と幼い筆に表はした涙ぐましい秀頼八歳の書もある。

（七ノ一）北部郊外——加茂から建勳神社まで——

順路

市電出町橋——賀茂御祖神社——修學院離宮——賀茂別雷神社——大德寺——

建勳神社——金閣寺——平野神社——北野神社——市電北野——（行程約十六粁）

賀茂御祖神社　出町停留場より北東凡そ一粁

——社格、官幣大社——祭神、玉依姫命。賀茂健角身命——

糾の森の下加茂神社

上賀茂にある賀茂別雷神社に對して俗に下加茂神社といふ。平安奠都以前より祀られ、奠都後は王城鎭護の神として朝廷の尊崇厚く、公私の寄進した神領は昔から數十箇所に達して居る。江戸時代には五百四十石の神領があつた。行幸も祭禮も上下共同時に行はれて一社と同じである。毎年五月十五日に行はれる葵祭は昔のやうに盛大ではないが、最も優雅な祭禮である。社殿は二十一年目に改修される慣例であつたが、現今の社殿は寛永五年の建造で、其以後改築されて居ない。

本殿以下各殿・樓門・廻廊等全部特別保護建造物となつてをる。

境内賀茂・高野二川の合流點にある森を**糾の森**といひ、吉野朝廷時代の古戰場である。

修學院離宮　電車出町停留場より北約四粁、叡山電車修學院停留場東一二〇〇米

近畿の二大名園

後水尾天皇の勅命に依つて、承應年中德川家綱が造營進獻したもので、其設計は全部天皇の御考案になり桂離宮と共に近畿の二大名園である。

離宮は僅なる間隔を作つて上、中、下三所に分れてをる。上離宮には隣雲亭（リンウンテイ）・窮邃軒（キウスヰケン）・千歳橋等があり、中離宮には樂只軒（ラクシケン）・御客殿、下離宮には壽月觀・藏六菴（ゾウロクアン）等がある。中離宮は規模が最も宏大で眺望も亦最も勝れて居る。清楚なる園内を逍遙しつゝ翠黛の丘陵を眺め、碁石を散らしたやうに白く小さく木の間を彩つて居る民屋を俯瞰（フガン）する時は、身も心も人間界を脱け出たやうな心地になる。

後水尾・靈元・光格の三天皇は數々行幸遊ばされ、明治天皇も亦東宮にておはせし時行啓遊ばされた。中の離宮は明治十八年の造營で、其まで上下の二ケ所に分れて居たといふ。

賀茂別雷神社　市電植物園前停留場北

――社格、官幣大社――祭神、賀茂別雷神（カモワケイカヅチカミ）――

上賀茂神社

賀茂御祖神社に對して上賀茂神社といふ。延喜式の大社で、祭祀其他下賀茂神社と同じにされる。天皇武德殿に臨御し、衞府の騎馬を叡覽あることが恒例になつて居たが、堀河天皇の時から之を上賀茂に移され、

爾後今日に至つてをる。毎年六月五日に行はれる賀茂の競馬と稱するのは之である。

攝社橋本・岩本兩社は古來の和歌の神が祭られてゐる。

本殿以下各殿・樓門・廻廊等全部特別保護建造物に指定されてをる。

賀茂行幸

賀茂行幸は平安奠都の年に始まつたが、殊に圓融天皇以後は男山八幡宮に行幸あるごとに、必ず本社にも行幸せられて、兩社行幸と號してゐる。孝明天皇が文久三年三月、公卿諸侯を從へて行幸の上攘夷の御祈願を行はせられたことは今尙國民の腦裏に新なることである。

祭神

建津身（クケツミ）命は神武天皇が大和の賊を討たれる時に八咫烏となりて先導された戰勝の神である。神武御卽位後山城賀茂に遷られ、其子孫世々賀茂縣主となつてゐた。（住吉神社の祭神は神功皇后の三韓御征伐に際し先導をつとめられた戰勝の神で、たゞ陸と海との差あるのみである。）玉依姫命一日小川に衣を洗ふに會々丹塗の矢が河上より流れ來た。持ちかへりてこれを床邊に置きしに麗夫となり男を生んだ。此子三歳の時、外祖建津身命宴を張り杯を持ちて、父と思へる者の前におかしむるに、吾父は天に在りとて屋を穿ちて天に登つた。乃ち外祖の名に因みて賀茂別雷神と名づけたと。

賀茂祭の競馬

神事の一として昔から名高いもので上賀茂社の馬場で行はれる。騎士二十人が裲襠（ウチカケ）に耳蔽附の冠をつ

け左方は赤袍、右方は黒袍をきる。各々神殿の式が了はると埒内に入り、一の鳥居から乘馬して馬場末から馬場本に至り先づ一番をはじめる。左右一匹毎に駈けるのを空走(ソラバシリ)と言ひ、其れから各並び走つて勝負を決する。審判は赤黒の扇で勝負をかかげる。この神事は五穀成就天下安全の御祈禱の爲に行はるるものである。

大德寺

——宗派、臨濟宗大德寺派本山——本尊、釋迦如來——

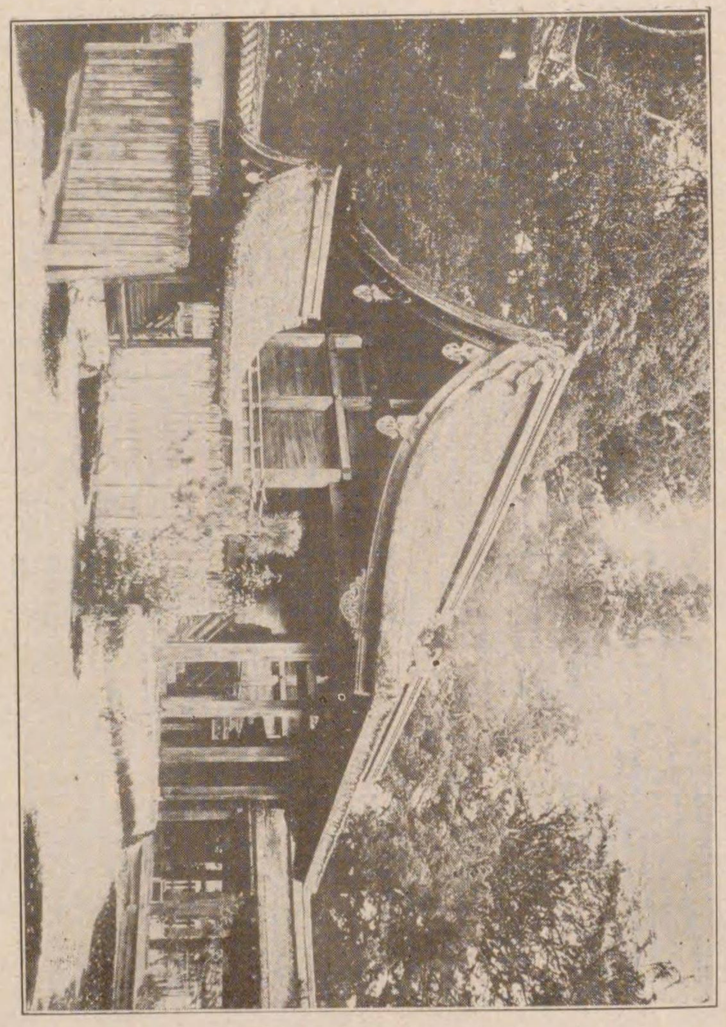
今出川大宮停留場より北千五百米

禪宗の代表的大伽藍

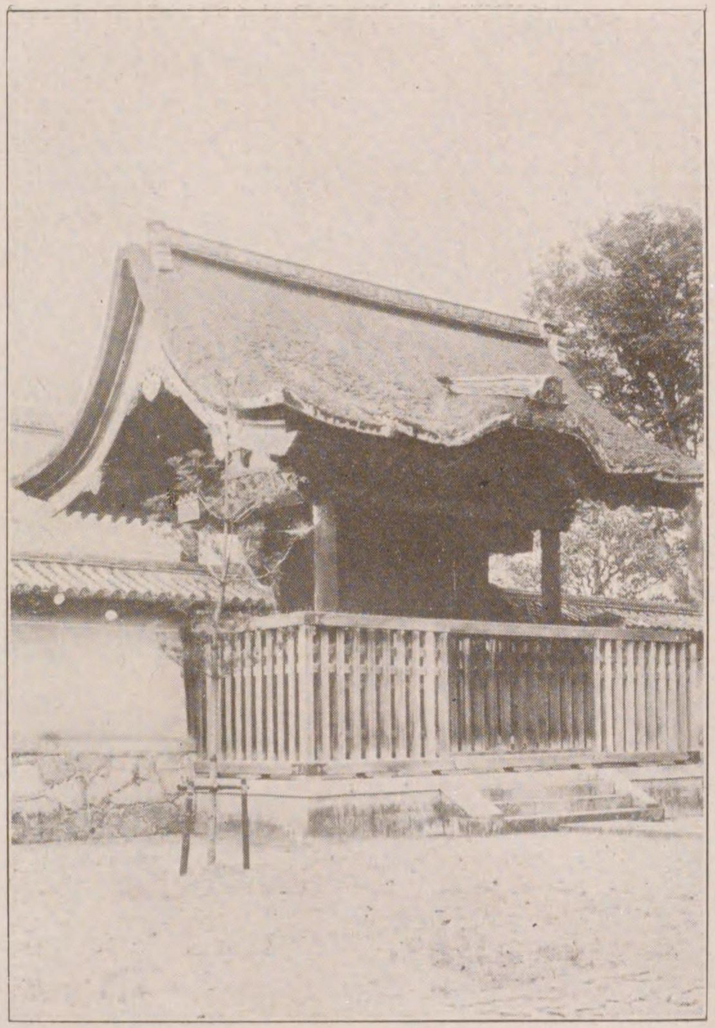
赤松則村がこの紫野に一寺を建てて大燈國師を請じ、ここに居らしめたのが此の寺の起りで、其後附近の地を增賜され、規模を擴めて大德寺と號した。花園・後醍醐兩天皇の勅願所となり、盛觀を極めたが應仁の大亂に兵火を浴びて灰燼に歸し、文明年間一休和尚之を再興して今日に及んだ。當寺は武家・富豪等の歸依者が多かつたので、寺運益々隆盛に趣き三門・勅使門・佛殿・法堂など一直線に配置され、左右均整を保つ禪宗の代表的大伽藍を有するに至つた。

織田信長の葬儀

天正十年十月十一日、豐臣秀吉が自ら祭主となり、勝家以下の豪傑を集めて其主織田信長のために葬儀を



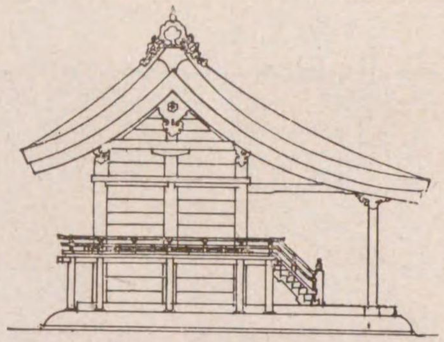
——流れ造——下加茂神社本殿



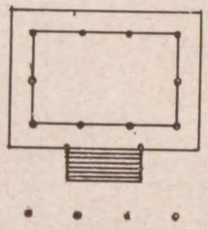
——聚樂第の遺構——大德寺の唐門（桃山時代）

流造

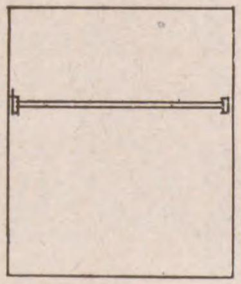
神明造の屋根が前方に流れて、こゝに向拜が加つたもので、屋根の曲線、柱の上の組物、棟飾り等何れも大陸建築の影響であつて春日造と共に廣く行はれてゐる形式である。（五五二頁神明造及び四三四頁春日造參照）



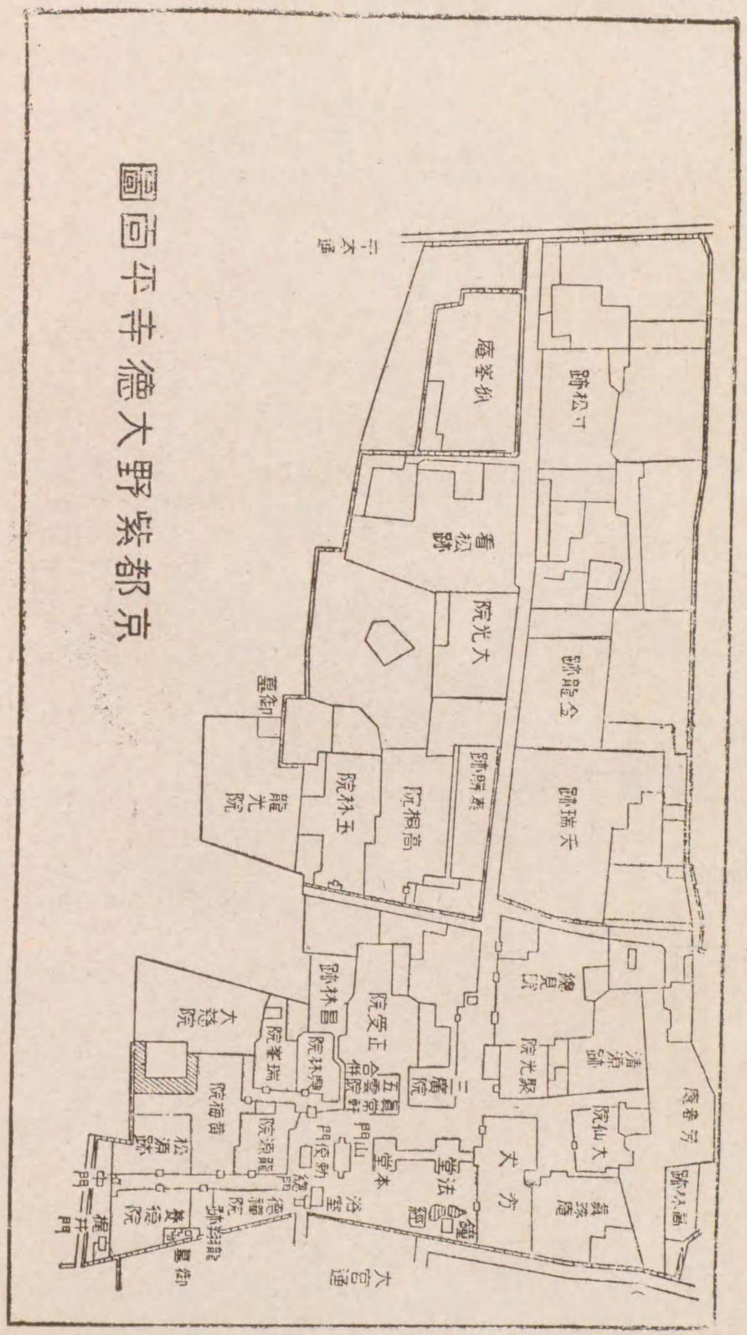
流れ造側面



流れ造平面



流れ造屋根伏



圖面平年德大野案都京

行つたことは史上特に名高い。

「羽柴小一郎秀長、警固の大將として武士一萬騎を率ゐこれを守護せり。其行裝は三千餘人烏帽子著藤衣にて二行に相列する。お輿の前轅は池田輝政、同後轅はお次丸之を舁ぎ、御位牌は公の八男お長丸、お太刀は秀吉之を持つ」（小瀬甫庵太閤記）

特別保護建造物

三門（金毛閣）上層は天正の頃千利休の改營で、樓上の佛や羅漢像は加藤清正が朝鮮から齎らしたものであるといはれてある。三門としては東福寺のより一時代おそい桃山時代のものだが、純粹の禪宗風三門としては最古の遺物である。同時に當代佛敎建築の尤である。傍に利休自作の像がある。利休はこれが爲めに秀吉の怒に觸れて自殺した。

唐門　唐門は聚樂第の唐門を移したもの、左右を切妻とし前後に唐破風をつけた四脚門で、全體釣合極めてよく、細部の手法極めて奇拔、大膽で其表現は頗る豪華である。やはり桃山時代を代表する傑作である。

勅使門（江戸時代）將軍家光の時皇居の南門を賜はつたもので、繪樣彫刻を豐富に施してゐる。

庫裡も特別保護建造物、天文年間、堺の豪商の寄進で、その棟木は明國貿易船の檣であるといふ。此の外方丈・經藏・浴室・鐘樓・本堂・法堂・寢殿・塔頭通僊院方丈・龍光院本堂・盤桓廊・書院・兜門・孤蓬庵なども何れも江戸時代の建造で特別保護建造物である。

什寶

當寺は前記の理由に因つて寶物頗る多く其中でも後醍醐天皇の宸翰と、天皇と大燈國師との御問答二幅の國寶は最も著明なものである

塔頭

眞珠院　本尊は一休和尚の像、もと一休和尚の庵室であつた。

通僊院　方丈が特別保護建造物で名高い。

大仙院　相阿彌の庭で名高い。永正年間六角頼政等の創建である。

聚光院　永祿九年三好義繼が其父のために創立した寺である、

龍光院　慶長十一年黑田長政の創建で、有栖川宮家の菩提所である　保護建造物の多いので名高い。

孤蓬庵　茶室をもつて名高い。

墓

近衞信尋墓　總見堂址にある。

織田信長、信雄の墓　同上、秀吉の建立である。

豐臣秀吉夫人大政所塔　天瑞院にある。

蒲生氏鄕墓　昌林院墓地南西隅にある。

小堀政一墓　孤蓬庵の南東にある。遠州流茶の祖、築庭には特殊の技能を有し秀吉・家康に仕へた。

千利休墓　聚光院にある。堺の人、秀吉に仕へて殊寵を受く、茶道をもつて現はれた。

豐臣秀長墓　大光院に在る。大和大納言と稱し秀吉の弟である。

細川忠興墓　高桐院にある。歌道をもつて名高く、豐臣・德川兩家に仕へた。

片桐且元墓　玉林院にある。

小早川隆景墓　黃梅院にある。

黑田如水墓　龍光院にある。

石田三成墓　三玄院にある。

觀世清次墓　眞珠庵にある。能樂の名家で、義滿に仕へ大に名をなした。

大燈國師と一休和尚

大燈國師、名は妙超、花園・後醍醐兩天皇の御歸信の厚かつた高僧である。

一休和尚、名は宗純・後小松天皇の落胤。幼時出家して大德寺に修行し、才學群を拔き其の性質は磊落驕慢であつたけれどもよく畏敬された。狂歌を能くし、又書畫にも長じてゐた。

（四〇六頁薪一休寺參照）

建勳神社　千本今出川停留場より凡一粁

——社格、別格官幣社——祭神、織田信長——

天正年間豐臣秀吉が主君信長を大德寺へ葬り、次で巨刹を舟岡山に建てゝ菩提を弔ふつもりでその勅許を

得、また天正寺の號まで賜はつて居たが内外多事のために果さなかつた。明治維新になつて朝廷信長の忠誠を思召され、その裔出羽の天龍藩主織田信敏邸へ建織田の神號を賜はつた。後更らに今の社號と社格とを贈られ、京都府へ祠を建つることを命ぜられたので天正の舊によつて社をこの舟岡の地に營み、明治十三年竣成、天龍藩主邸内に鎭座した靈代を遷し、勅使參列して鎭祭の式を行ひ、翌日子信忠の靈をも配祀した。

舟岡山と其史蹟

船形をなした小さい丘であるが、京都市街の北半分を一目に見ることが出來る。昔保元の亂に、上皇方に附いた源爲義の五兒は、清盛の命令で此の山上で哀れな最後を遂げた。其後應仁の亂には西軍が此處を陣所にしてゐた。

金閣寺　北野停留場北凡二粁、乘合自動車がある。

――宗派、臨濟宗――本尊、聖觀世音――

足利義滿の別業

此の地はもと鎌倉時代西園寺山莊のあつた處で、應永四年足利義滿が之を自己の別業としたものである。應永十五年三月後小松天皇の行幸があつた。其盛儀は當時の人目を驚かしたといふ。同年五月義滿が此處で死ぬると、其子義持は遺命によつて之を禪刹とし、義滿の院號を採つて鹿苑寺と名づけた。開山は夢窓國

師で足利家累代の歸依僧である。南北朝を合併し權力を一手に握つた義滿が、諸國に令して珍奇の木石を蒐め高華の限を盡したものであるから其立派さは言ふまでもない。併し應仁・永祿の兩度に火災を蒙り、現在では遺物として只金閣を殘すのみとなつた。

兩度の火災で多くの寶物類を失つたが、猶多くの寶物を藏して居る、其中でも國寶の足利義滿像は室町時代の寫實彫刻として代表的のものである。

金閣

鹿苑園中、鏡湖池畔にたつてゐる。寶形造りの屋根、棟に鍍金の鳳凰がある。三層の中、下層を法水院、中を潮音閣といひ共に佛像を安置する。上を究竟頂といひ後小松天皇宸筆の扁額が掲げられ、天井は樟の一枚板。そして内十八疊は板敷で緣板と共に黑漆を塗つたものだが、今は漆も禿げて地錆が見えてゐる。昔押した金箔は只勾欄に於て金光幽かに見える位である。閣は今特別保護建造物に編入されてゐる。建築としては佛殿と住宅とを結合し、更に庭園と調和せしめた珍らしいもので、全體の恰好は屋根が檜皮葺で勾配の緩いのと木割がすべて纖弱なのとで、輕快瀟洒の表現を有し變化に富んだ一傑作である。寺僧曰く「餘り勾配が緩る過ぎて雨水が逆流するために、木材の腐蝕甚しく之を防ぐために現在では、檜皮の下へ銅を張つてゐる」と。

庭園

鏡湖池を中心として造られたもので、泉水には夜泊・九山・八海等の名勝があり、奇石孤島も多い。(併

し此等の名稱は過半後人の命名である）石に山名石・赤松石等があるのは獻じた大名の名をとつたもので、その他庭内には銀河泉・龍門瀧・白蛇塚・夕佳亭（後水尾帝獻茶御遊の跡で萩の違ひ棚、南天の床柱がある）拱北樓、（義滿の居間）など見るべきものが多い。

平野神社　北野停留場より二百米

——社格・官幣大社——祭神、今木神（イマキ）・久度神（クド）・古關神（フルセキ）・比咩神（ヒメ）——

本社の祭神は桓武天皇の御生母高野皇太后の遠祖に當らせられるので、御尊信の餘大和の一私社に祀つてあつたのを、平安奠都と同時にこゝに御遷し申上げたのである。

今木神は伴信友の考證に因ると高野皇太后の遠祖、百濟の聖明王で始めて我が國に佛敎を傳達した人である。比咩神は天皇の外祖父大枝眞妹（オホエマイモ）の祖神であると傳へられ、久度神は竈の神と傳へられる。古關神は今まで何の解釋もついて居ない。天元四年二月圓融天皇の行幸以來屢々天皇の行幸があつた。

境内は櫻の名所で、夜櫻を賞するために足を運ぶ者が甚だ多い。東に流れるのが紙屋川で、西の方に高いのが衣笠山である。

百濟聖明王——佛敎を日本へ傳へた——

我國へ佛敎を私的に傳へて來たのは、梁の司馬達等（シバタツト）で繼體天皇の朝に來て飛鳥に坂田寺を建てた。公

的に各種の職工や、佛像・經論を獻じたのは百濟の聖明王で欽明天皇の朝である。之が我が國佛敎傳來の始である。

北野神社　北野停留場前

——社格、官幣中社——祭神、菅原道眞——

文學の神天滿宮

菅原道眞は忠誠を抽んで乍ら藤原氏に誤られて、配所にあること三年、延喜三年二月二十五日此處に客死した。道眞の死後天災地變頻に起り、京都の縉紳中に頓死するもの屢々出でしより、官民共に大いに懼れ、朝廷は勅して道眞の官を復し正二位を贈らせられた。天曆元年初めて祠を此處に建て、村上天皇の天德三年右大臣藤原師輔に依つて神殿が造營された。北野行幸は寛弘元年に始まつて歷代其御儀が繼續された。

最初は怨靈鎭撫の目的で祀られたのであつたが、後世は文學の神として上下の尊崇を受け、今日では八幡社と共に全國到る處に天滿宮の社を見るやうになつた。北野祭は毎年八月四日行はれる。

現在の社殿・中門・東門・廻廊・透塀等は慶長十二年豐臣秀賴の建造したもので何れも特別保護建造物に指定されてゐる。

又、北野天神社縁起繪卷（國寶、傳藤原信實筆）鎌倉時代のもので其時代の風俗を知る絶好の資料である。此の外室町時代の土佐光信、江戸時代の土佐光起の北野繪卷がある。何れも全國的に著明である。此の外古記錄及文書等が澤山所藏されて居る。

八ツ棟造（權現造）

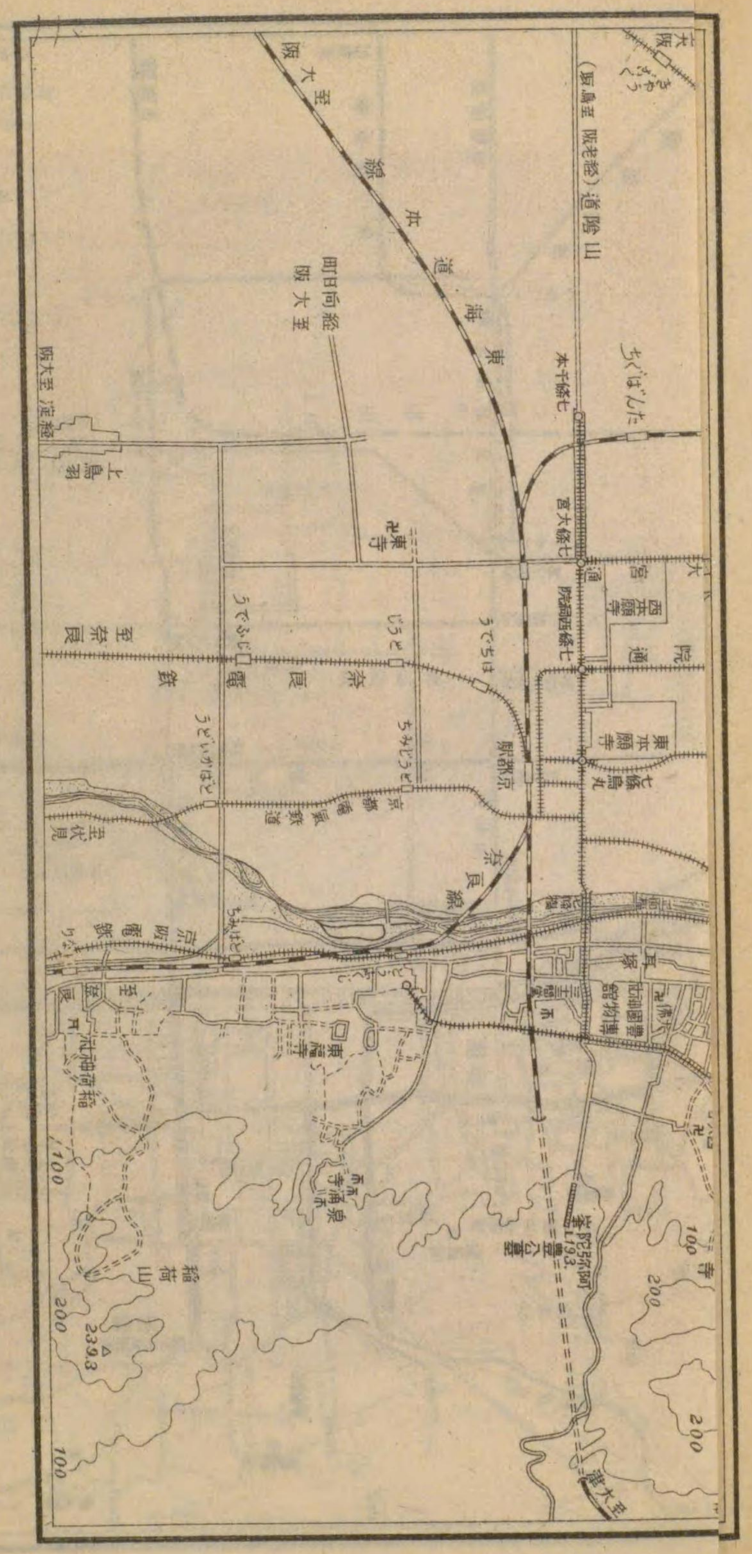
社殿は桃山時代に建築されたもの、屋根が頗る複雜な組合せで之を八ツ棟造又は權現造りといふ。之は本殿と拜殿との中にある合の間及び其の兩側にある樂の間を合はせて幾つかの屋根をもつて結びつけたからこんな複雜な形を生み出したもので、今日では神社建築の一形式になつて居り、當社は實にこの形式の最も發達進化したものである。

三光門

本社の中門で樓門造になつて居る。內部にある蛙又は複雜な彫刻が施されて居る中に日、月、星の三つが現はされて居るので之を三光門といつてゐる。

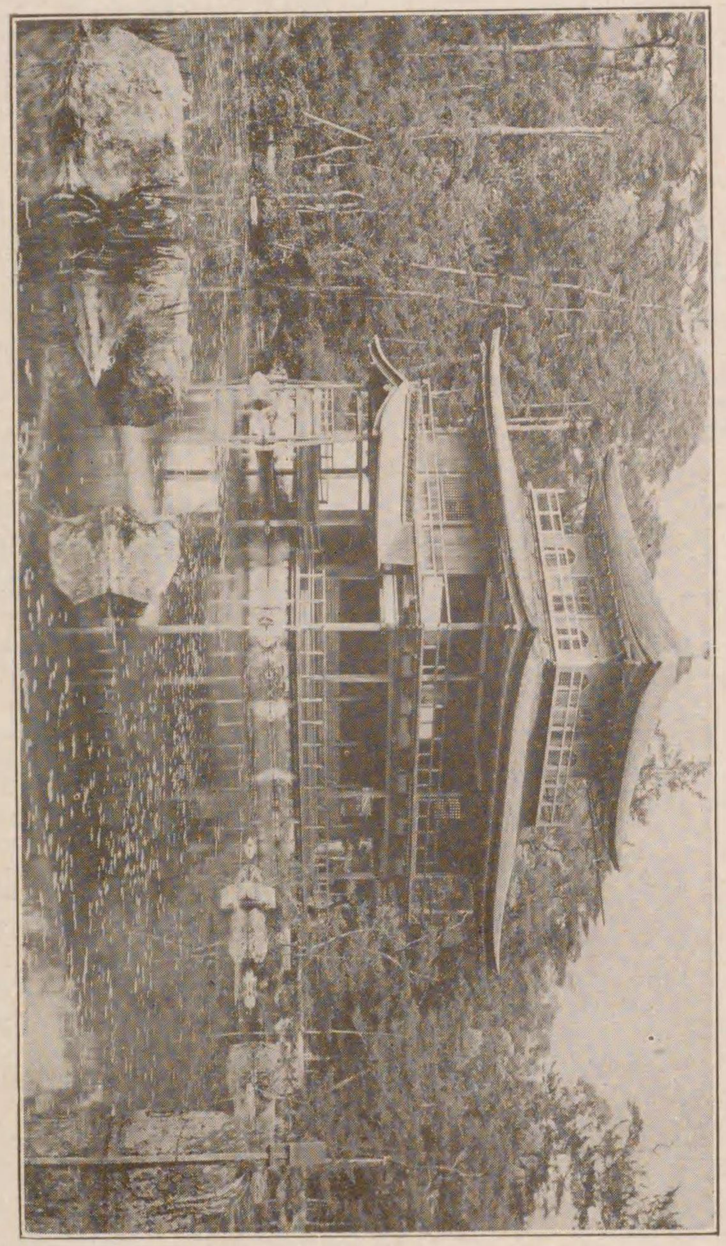
北野大茶の湯

豐臣秀吉は天正十五年十月朔日此境內の松原で、茶の湯の大會を開いて上下の區別なく一日の歡を盡さしめ、其襟度の宏大なことを天下に示した。境內は梅樹多く、東の馬場は、昔の右近の馬場である。「日本五儀は不及申數奇心懸有之ものは唐國までも可罷出候事」「北野大茶の湯記」

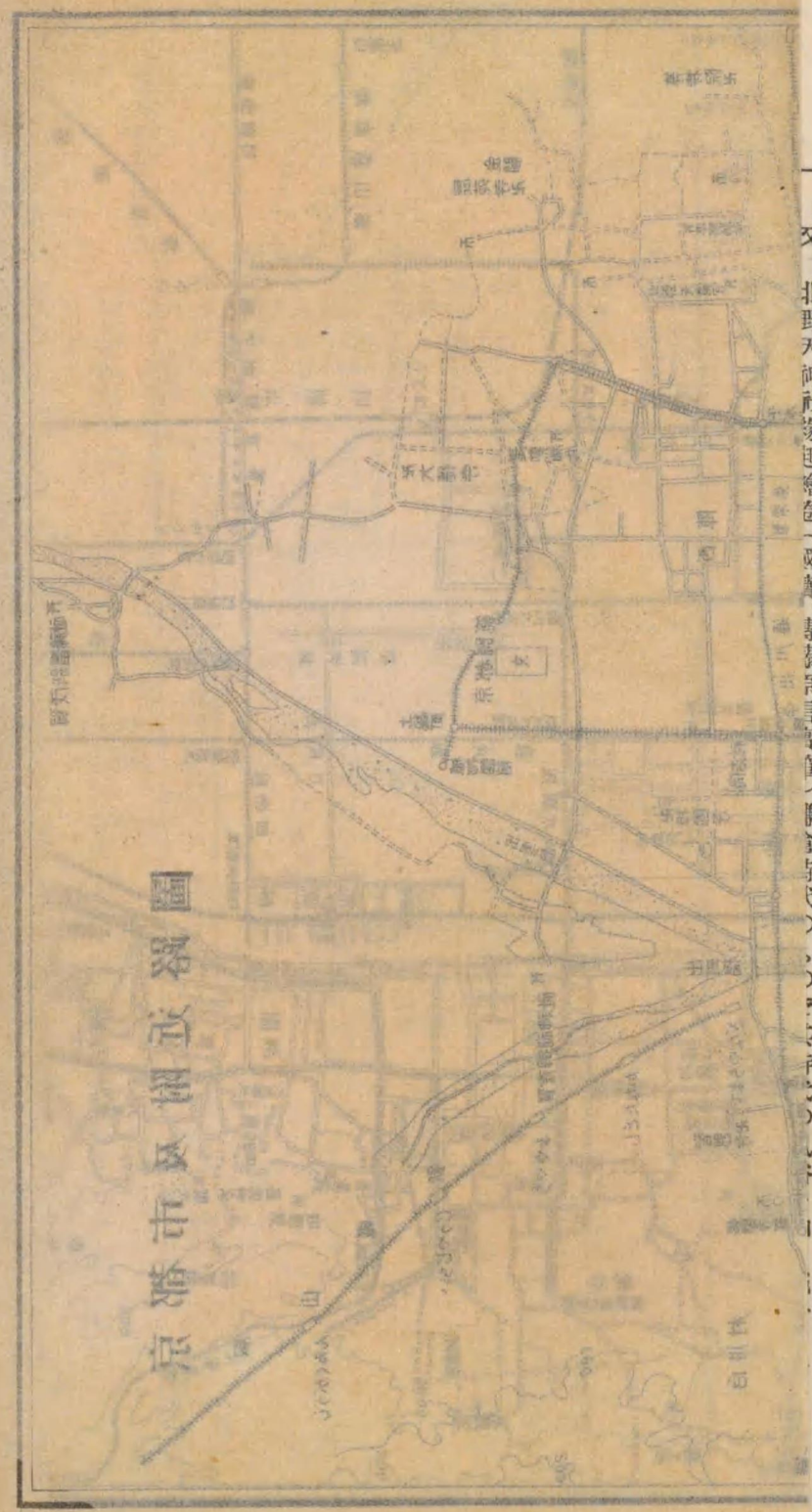


京都市及附近路圖

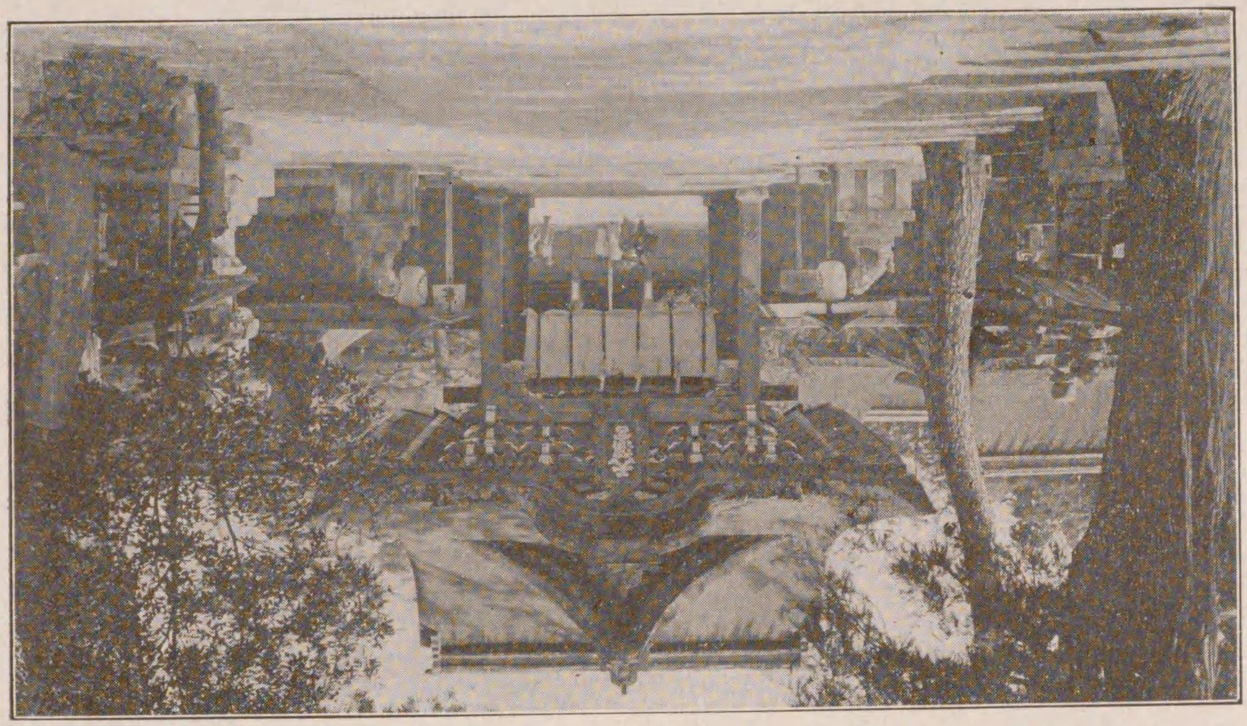
賀茂別雷神社
叡山電鉄
じうやじちい
まややち
賀茂御祖神社
かなたどし
出町橋
植物園前
上終町
出雲橋
京都師範
文
大德寺
建勳神社
鹿苑寺
金閣
北野天滿宮
平野神社
等持院
西陣
相國寺
同志社
智恩寺
銀閣寺道
白川村
銀閣寺
吉田神社
帝國京都大學
高等工業學校
第三高等學校
醫科大學
大學病院
岡崎東天王町
黑谷
鹿ヶ谷
永觀堂
南禪寺
知恩院
長楽寺
東大谷
高臺寺
八坂塔
清水寺
將軍塚
京津電鉄
至大津
阿彌陀峯
豐公墓
稻荷山
稻荷神社
泉涌寺
東福寺
伏見稻荷鉄道
京阪電鉄
至伏見
至奈良
奈良線
京都駅
東寺
奈良電鉄
至奈良
上鳥羽
至大阪
東海道本線
至大阪
山陰道（至鳥取 至老坂）
七條烏丸
東本願寺
西本願寺
七條西洞院
七條大宮
七條千本
西洞院通
大宮
四條西洞院
四條大宮
四條烏丸
四條河原町
四條通
六角通
本能寺址
烏丸通
烏丸丸太町
河原町丸太町
堀川丸太町
千本丸太町
千本通
大德殿址
千本今出川
今出川通
堀川中立賣
烏丸今出川
護王神社
御所
大宮御所
二條離宮
祇園
建仁寺
六波羅
耳塚
大佛
豐國神社
博物館
三條橋
五條橋
新京極
本願寺
東本願寺
嵐山電車線
至嵐山
道街條四
線下地阪京
新京阪線
至大阪
山陰本線
うてに
ちぐばんし
たちばな
きたの
りうあんじみち
どうじゑんみち
こまつばら
至嵯峨
至大津
100
200
△239.3



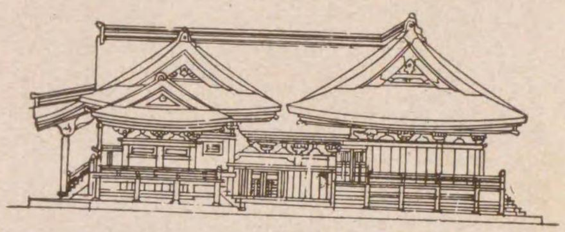
義滿豪奢の名殘——金閣（室町時代）



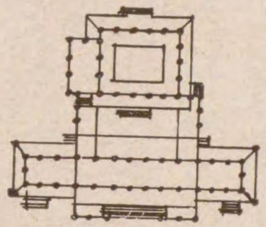
又、北野天神社緣起繪卷（岡寶、專泰寫言寶庫）に、「…」



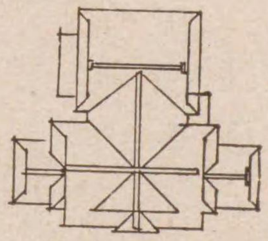
—權現造—北野神社の三光門（桃山時代）



權現造側面



權現造平面



權現造屋根伏

權現造

本殿と拜殿とを石の間で接續したもので、棟數の多い所から八ッ棟造とも呼ばれてゐる。其の創始は豐太閤の豐國廟に發したもので德川時代に流行した。北野神社の社殿は此形式の最も發達進化したもので、本殿拜殿以外に種々の附加物がある。

（七ノ二）北部郊外——花園・お室——

順路

京都市電北野停留場——等持院——龍安寺——仁和寺——妙心寺——廣隆寺——嵐山電車廣隆寺前停留場——（行程約七粁）

等持院　北野停留場西三・五粁　嵐山電車等持院道停留場北二百米

——宗派、臨濟宗——本尊、利運地藏尊（尊氏の守本尊）——

足利十五代の木像安置

足利尊氏から義昭まで十五代の木像と外に德川家康の木像が本堂の西脇に押し合ひして列んでゐる。興國年間、足利尊氏の創立した寺で、開山は夢窓國師。正平十三年尊氏が薨じた時其の諡號等持院を寺號とした。境内に尊氏の墓がある。足利家累代の菩提所で盛時には堂塔伽藍が完備して居たが、今は昔に比すべくもない小さなものになつて居る。文久年間幕政を惡む餘り勤王の志士が當寺に來り、逆臣の巨魁なりとて尊氏以下三代の木像の首を取り出し三條河原に梟首したのは有名な話である。

等持院繪圖一幅は國寶である。

衣笠山

當寺の後方の山で、山容の美しいので名高く、古來和歌の題材となつたことが幾度もある。

くれなゐの衣笠山の岩つつじ　日影さしてぞ色まさりけり（夫木集）　爲秀

神まつる衣笠岡の岩手松　ひさしくたてよときはかきはに（同　）　隆房

龍安寺　嵐山電車龍安寺道北三百米

——宗派、臨濟宗妙心寺派——本尊、釋迦牟尼如來——

太平記原本のある細川勝元の寺

妙心寺派十刹の一である。衣笠左大臣實能が其別業の傍に德大寺を營んで佛を祀り、之を家名として居たが、公有の時に細川勝元が之を讓り受けて妙心寺派に屬し義天禪師を聘して之を禪刹とした。

寛永九年の火災で諸堂燒失し、現在の建物は何れも其後の建築である。唯方丈のみは塔頭西源院（タッチュウサイゲン）の方丈を移したもので、もと勝元の亭榭であつた。前庭は樹木を植ゑず白砂を布き、五六箇の奇岩を配列し、其一つの岩に又小岩を添へてある。其樣子が虎の兒を率ゐて溪を涉るに似て、何所から見ても小岩一つだけは見えなくなると云ふ不思議な庭で、之を虎の子渡しの庭といつてをる。藝術家相阿彌の作であると傳へられ、現

今日本作庭の標本である。

數ある寶物の中で塔頭西源院に藏する太平記四十一卷十三册は、德川光圀が參考太平記を造る時に參考にし、書中に光圀の加筆のある貴重な國寶である。

鏡容池

鴛鴦（フシドリ）の名所で、泉石の布置、周圍の櫻・楓、四邊の幽邃で靜寂なこと、眞に仙境である。

眞田幸村の墓

大阪陣の大立者、眞田幸村の墓は中珠院にある。

附近の御陵

後朱雀（ゴスザク）天皇（第六十九代）**圓乘寺陵**

後冷泉（ゴレイゼイ）天皇（第七十代）**圓敎寺陵**　葛野郡花園村大字宇多野、龍安寺境內

後三條天皇（第七十一代）**圓宗寺陵**

御遺骨は御三方とも仁和寺の山に納め奉つたので、陵は何れも圓墳で一つの兆域內にある。御鳥居は三方別々にあるが、御拜所の門は一つになつてゐる。

後朱雀天皇は一條天皇の第三皇子、頗る叡明にして英志あれども、藤原頼通關白として勢をほしいま

まにし、手をこまぬいて成すがままにまかせらるるほかはない有様であつた。御在位九年、壽三十七。

後冷泉天皇は後朱雀天皇の第一皇子、御在位二十三年、壽四十四。

後三條天皇は後朱雀天皇の第二皇子、治暦四年御即位、御年三十五。天皇太子のくらゐにゐたまふこと二十餘年、常に藤原氏の擅權を見て御不平であつたのみならず、屢々事によつて賴通をうらみ給ふ、即位せらるるに及んでいたく其權をおさへ政柄をうばはんとし給ふた。よつて賴通は宇治に隱退し、天皇の威嚴をはばかつて關白の員に備はるのみであつた、延久五年崩御、壽四十。

一條天皇（第六十六代）**圓融寺北陵**　葛野郡花園村大字谷口、龍安寺の北東二百米

堀河天皇（第七十三代）**後圓敎寺陵**

陵は御二方とも圓墳で、一つの兆域（テウヰキ）に嚴重な石垣をめぐらしたもので御拜所も一つになつてをる。

一條天皇は圓融天皇の第一皇子、永延元年（約九百五十年前）御即位、御年七歲。外祖父藤原兼家の薨後、其子伊周（コレチカ）と弟道兼・道長等の間に權力の爭をおこし、朝紀の紊亂はなはだしく、皇居の炎上も四度に及んだ。在位二十年にして御崩御、壽三十二。北山の長坂の野に火葬し奉り、圓成寺に奉安すること九年の後、ここに葬り奉つた。

堀河天皇は嘉承二年（凡八百二十年前）崩御、香隆寺の南西の野に火葬し奉り、御遺骨は香隆寺に奉安すること六年の後ここに埋め奉つた。其後三重の石塔を立て其内に法華經、陀羅尼等を安置した。

天皇は白河天皇の第二皇子で、御即位後も白河天皇が院中にあつて政を決し給ひ、天皇は僅かに其位

に備はり給ふに過ぎなかつた。會々陸奥の豪族清原清衡（キヨヒラ）、同族武衡。家衡と相爭ひ、陸奥守源義家、清衡を助けて武衡を討ち、三年に平定した。御在位二十一年。

宇多天皇（第五十九代）**大内山陵**　葛野郡花園村大字宇多野、龍安寺の北西凡そ一粁。

遺詔によつて御火葬に關する諸種の儀式を止めさせ給ふた。大内山の陵に火葬し奉つた。陵は今御塚もなく、小さな空隍（カラホリ）をめぐらせるのみである。

天皇は光孝天皇の第七皇子、嘗て遁世の御志があつたが藤原基經の推戴に因つて天位に昇られたので深く基經を愛せられ關白内覽の制を始められたが、藤原氏の我儘は朝恩に慣れて益々甚しくなり、遂に阿衡（アカウ）事件を引起した。基經の死後時平出づるにおよび、天皇は其權力を押へんと思召し菅原道眞を重用された。寛平元年（約一千四十年前）即位、承平元年崩御、在位十年、壽六十五。

仁和寺　葛野郡花園村、嵐山電車、御室停留場北百米

——宗派、眞言宗御室派大本山——本尊、阿彌陀如來——

御室御所

大内山仁和寺又は御室御所とも言つて、門跡寺院中の首位に在つた。光孝天皇の勅願により工を起し、工なかばにして崩御。宇多天皇其御遺志を繼がせられ、仁和四年（約一千四十年前）に竣工。天皇御讓位の後は當寺を法務の御所とせられ、眞言大阿闍梨と稱せられた。以後明治初年純仁（スミヒト）親王（小松宮彰仁親王）が勅

命に因つて復飾(フクショク)せらるゝまで一千年間代々法親王をもつて法統をつがせられた。應仁・文明の亂後一旦衰微したが、寛永年間德川氏が巨費を投じて復舊し、皇室からも南殿・清涼殿を賜はつて諸堂昔のおもかげを見るに至つた。明治二十五年の火災で又々堂宇を失ひ、現在金堂・祖師堂・五重塔を殘してゐる。

今の金堂は下賜の紫宸殿を改造したもの、御影堂は下賜の清涼殿を改造したもので弘法大師の像を安置し共に保護建造物である。

國寶

傳張思恭筆孔雀明王像、御室相承記六卷を始め數多あるが、空海・逸勢(ハヤナリ)兩人の書寫した三十帖策子は二十七帙まで弘法大師の書で、眞に天下の絕品である。

御室の櫻

昔から名高いお室の櫻は當寺境内の櫻を言ふので、樹幹は餘り大きくないが地上二三十糎までたれ下つた梢には無數の花を附けて、嵐山の山櫻とは又かはつた趣がある。

附近の御陵

光孝天皇（第五十八代）**後田邑陵**(ノチノタムラノミサヽギ)　葛野郡花園村、御室仁和寺の南西

仁明天皇の第三皇子で天長七年御誕生　陽成天皇の崩御後攝政基經の推戴に因つて天位に昇られたのが、五十五歲の御時で、六月詔して「百官の事を奏する先づ太政大臣基經に諮禀(シリン)して而して後奏聞せ

よ」と。我國で關白なるものが出來たのはこれが初めである。御在位四年、五十八歲にて崩御。陵は今圓墳である。

圓融天皇（第六十四代）**後村上陵**　葛野郡花園村、仁和寺の西約三百米

村上天皇の第五皇子、十一歲にて御卽位。攝政藤原氏一門中に權力の爭甚しく、伊尹(コレタダ)の薨後弟兼通・兼家が火花をちらして爭つてをる中、群盜都市を横行し、掠奪(リヤクダツ)、放火しきりに行はれ、多數の家屋を灰にしてしまひ、皇居の炎上も再度に及んだ。御在位十五年にして崩御、壽三十二。圓融寺の北の野原に火葬し奉り、御遺骨をこの山陵に置き奉つた。陵は小圓墳。

村上天皇（第六十二代）**村上陵**　葛野郡花園村、仁和寺の北西一粁强

醍醐天皇の第十四皇子、天慶九年四月（約九百九十年前）御卽位。天資明敏にましまし學問を好ませられ政事に勵ませたまふと共に民を愛せられた。地方の制度はかなり亂れてゐたが、京畿の地は太平無事でよく治まつたから世に御治世を「天曆の治」とたたへ奉る。御在位二十二年、康保四年崩御。壽三十二。

文德天皇（第五十五代）**田邑陵**(タムラノミサヽギ)　葛野郡太秦(ウツマサ)村、仁和寺の西約二粁

天皇は仁明天皇の第一皇子、御卽位ののち政にはげみ遊獵を好み給はなかつたが、多病にして早世せられた。御在位八年、壽三十二。

妙心寺　葛野郡花園村、嵐山電車妙心寺停留場東百米

——宗派、臨濟宗妙心寺派本山——本尊、釋迦如來——

花園天皇の行宮寺

臨濟宗七千箇寺の過半數を末寺とする大寺で、十三派の中最も基礎の强固な寺である。花園上皇の勅願に依つて關山國師が開創した。應永年間足利義滿の怒に觸れて寺領を沒收せられ、一旦衰微したが、日峰和尙に依つて中興され、應仁の亂に火災を蒙つて諸堂燒失し、雪江和尙また之を再興した。元和以後寺運益々榮え現在四十餘の子院を有し、禪宗伽藍の最も完備したものは獨り當寺あるのみである。

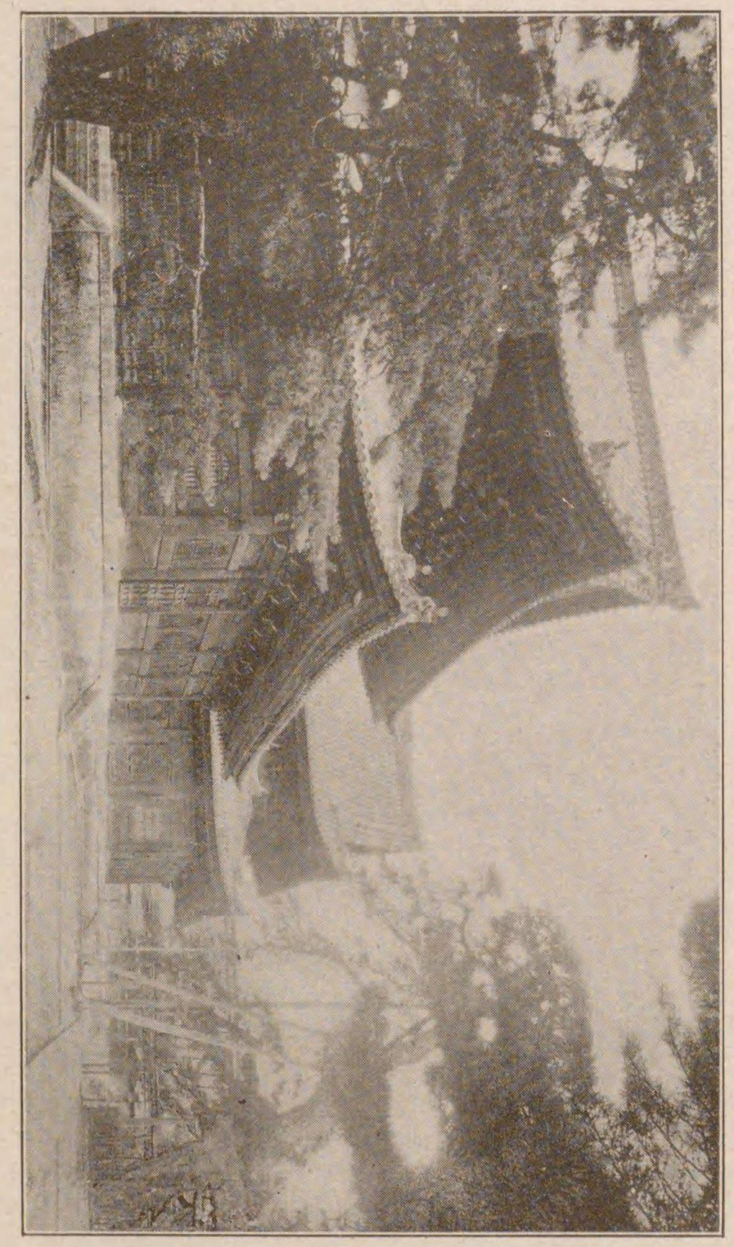
特別保護建造物

佛殿・法堂（天井の畫は狩野探幽の大筆である）何れも上層は禪宗持色の扇垂木を用ひてゐる。方丈・小方丈・庫裡・三門・勅使門・經藏・鐘樓、總てが江戸時代前期の代表作品である。

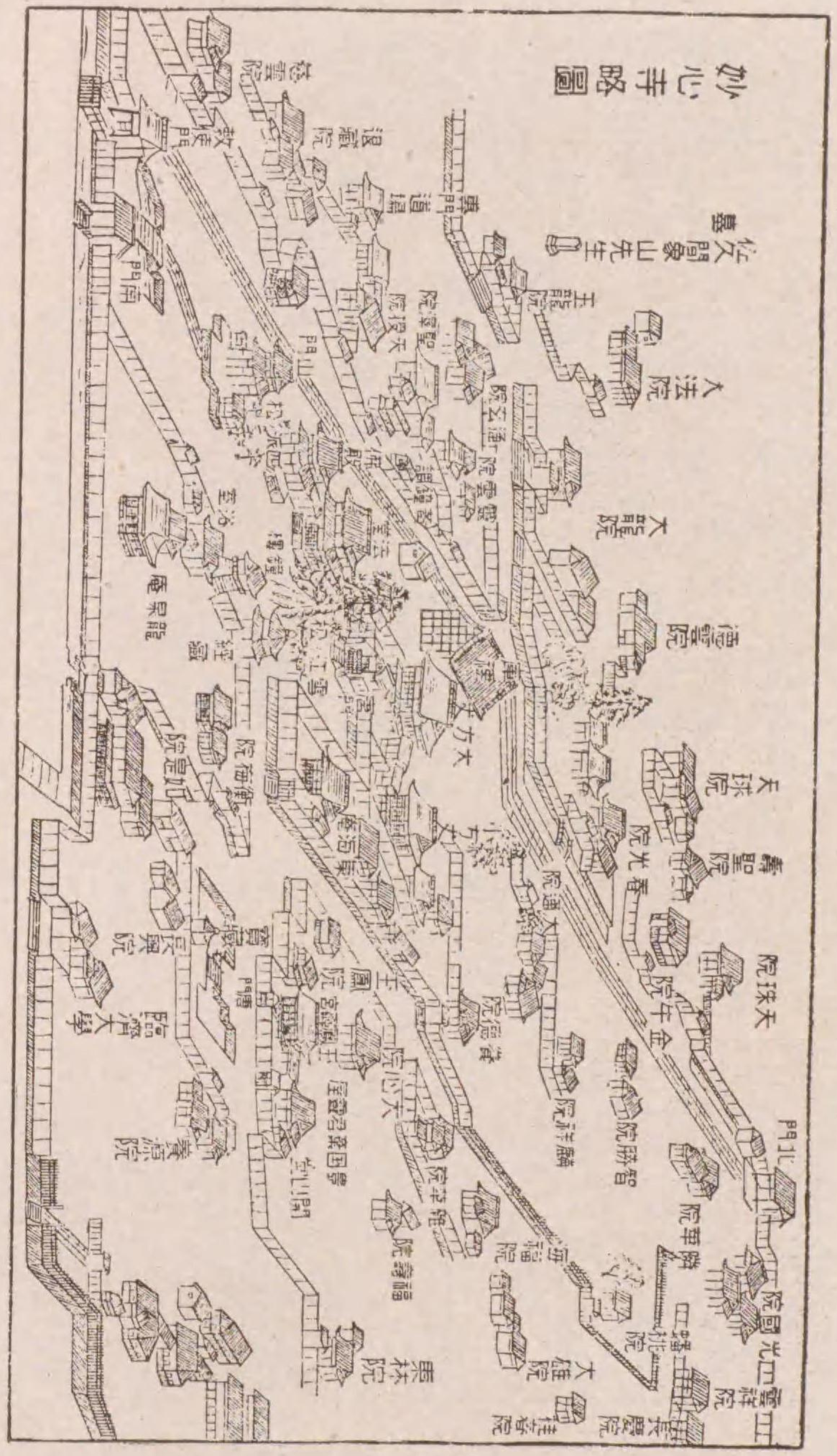
寶　物

塔頭及本寺の方を合すれば殆んど無數と云つて良い程で、本寺の海北友松筆の襖畫、天球院の狩野山樂筆の襖畫は殊に名高い。

鐘樓の鐘は文武天皇二年の鑄造と傳へ千二百餘年を經てゐる。春光院の西洋鐘は傳來は詳でないが、



——禪宗伽藍の典型——妙心寺（江戸時代）



——聖女の微笑——廣隆寺彌勒（飛鳥時代）

織田信長が南蠻寺を建てる時に耶蘇教徒の持つて來たものであらうといはれ、羅馬字の外に1577の數字が表はれてゐる。何れも國寶である。

塔頭子院

玉鳳院　花園天皇の行在所で、有名な御宸寫水鏡の御影は當院に保存せられて、僧形の御姿である。

靈雲院　後奈良天皇の屢々御臨幸遊ばされた所で、其書院を御幸の間と云ひ天文二年に建つた。特別保護建造物である。

開山堂　本堂を微笑庵と云ひ、開祖關山國師の塔所である。堂前の唐門とともに特別保護建造物。

大法院　幕末の志士として名高い佐久間象山の墓がある。

豐臣棄丸の廟　夭折した長男棄丸のために秀吉の造つた小堂で、中に市松人形のやうな像があり、其下の石棺に遺骸が納められてゐる。桃山時代の廟建築を語る一つの遺物である。

棄丸の玩具、約四米ばかりの船の中に偶像を安じ、精巧なる武具・馬具類がのせられてゐる。其中の金裝刀は、蒲生氏郷の寄進したものと傳へられる。

秀吉が池中に此の船を浮べ棄丸に見させて、其歡心を買つたもので、今國寶である。

廣隆寺　葛野郡太秦村、嵐山電車太子前停留場

——宗派、眞言宗御室派別格本山——本尊、藥師如來——

山城第一の古刹

推古天皇の御宇、今から一千三百五十年前、三韓から奉つた佛像を聖德太子が秦川勝（ハタノカワカツ）に賜はつたので、川勝は已が領地太秦（ウヅマサ）に一宇を建立して之を祀つたのが當寺の起りで、實に平安第一の古刹（コサツ）である。峰岡寺・太秦寺・葛野秦寺等と稱するのは此の寺のことである。弘仁・承和・久安の三度火災に逢つて今の講堂は保元年間（七百七十前）藤原信頼の再建したもので、他は其以後の建造である。

特別保護建造物

講堂　五間四面、單層屋根四柱造本瓦葺で、藤原末期の溫雅な風があり、丹堊がぬつてあるので俗に赤堂といはれてゐる。本尊及脇侍虛空藏菩薩（コクゾウボサツ）・地藏菩薩三體は弘仁時代不空羂索觀音（フクウケンサクカンノン）立像は天平時代、十二神像は藤原時代の傑作で何れも國寶である。

桂宮院　境内の西にある八稜形の御堂で鎌倉末期の建造、堂内に聖德太子の御像が祀つてある。

太子殿

上宮王院とも云ふ、聖德太子が三十三歲の時、等身の御像を刻まれたのを安置したと傳へられる。歷代の天皇は大禮に御用ひあらせられた御衣冠を御寄附遊ばされ、太子の御像は之を御着用遊ばされてゐる。明治三年明治天皇より御寄進の御衣は寶物館に陳列され、今は今上天皇の御寄進の御衣を召されてゐる。

寶物館

寶物館に陳列されてゐる數多の國寶の中で特に著名なものは、百濟傳來の如意輪觀音像、新羅傳來彌勒佛像、隋傳來阿彌陀像・藥師如來木像・毘沙門天木像等で、其の他に寶器古文書が數知れぬ程ある。

其他

十月に行はれる太秦の牛祭は京都名物の一つで、太秦形燈籠は石燈籠の別名である。

境内にある呉織（クレハ）・漢織（アヤハ）の神を祀つた呉服神社は織物の神であり、寺の附近にある蠶の神社は養蠶の神で其社内の水の涌き出る所に日本一の三脚鳥居がある。

秦氏

應神・仁德の御代に、秦（シン）の始皇帝の裔といふ弓月君（ユヅキノキミ）が遺民百二十七縣の人をつれて歸化し秦氏といつた。世々知巧を以てあらはれ我が工藝の術を進めた。殊に機織（ハタ）をよくしたのでハタ氏と稱せられた。養蠶の業を興した秦酒君（サケノキミ）は弓月君の孫であり、こゝの秦川勝も其の一統である。

五、鞍馬山

順路

鞍馬電鐵鞍馬停留場——鞍馬寺——貴船神社——貴船口停留場——（行程約六粁）

金剛壽院　鞍馬電鐵鞍馬停留場

——宗派、天臺宗——本尊、毘沙門天——

鞍馬寺

洛北の名山鞍馬山は標高六七〇米、全山秩父古生層からなり、半腹には藤原伊勢人が建立した鞍馬寺がある。寺はもと法相宗を奉じて居たが、天永年中延暦寺の僧忠尋の時に天臺宗に屬することになつた。上代から公家・武家の尊崇厚く、白河・後白河兩天皇の臨幸あり、源頼朝は劔一振を當寺に納めて武運長久を祈つた。本尊及脇侍は共に國寶である。

創立以來隆盛を續け壽永の行幸以來は一山の上下に諸堂が列つて各輪奐の美を極めて居たが、幾度かの火災に逢ひ、明治の寺祿沒收に逢つて昔の俤は全く見られなくなつてしまつた。枕草紙に「ちかくて遠きもの は鞍馬のつゞらをれ、親子はらからのなか」とあるのは火祭り（十月二十二日）で名高い由岐（ユキ）神社から（拜

殿は豐臣秀頼の再建で特別保護建造物）地藏堂を經て本堂に達する坂道のことだ。

僧正谷牛若丸の修業所

壽永の昔（凡そ七百五十年前）源義朝の子牛若丸は、亡父の修羅妄執を拂ひ、源家復興の志を其の小さい頭に宿して、本堂を進む坂道一粁餘、老杉・古松鬱々とし晝猶暗き僧正谷に入つて劔を學んだと傳へられる。今この森林中に魔王堂がある。奇岩怪石が四方に散點し、盛夏でも此處ばかりは身の毛立つ程の冷氣を覺える。

「鞍馬天狗」は物語りとして世に知られ、鞍馬山中には義經に關する傳說を持つ幾つもの名所がある。正月の寅の日と六月二十日の竹切の緣日には、一山人をもつて滿される程雜沓する。

貴船神社　鞍馬寺より北西約二粁、奥の院より下り坂約七百米（貴船口へ約二粁、乘合自動車もある）

——社格、官幣中社——祭神、伊弉諾命の御子高龍（タカオカミノカミ）神——

雨乞ひの神

創立の年代は分らない。吉野朝時代鞍馬人と賀茂人とが、當社の神寶爭奪をやつて社殿を破壞したため、一時賀茂神社に移つた。寛永八年德川家光の時今の處に移し祀つた。歷代天皇が雨を祈らんがために當社に奉幣せられたことは史上に散見する事實である。

社殿は貴船山の中腹にあり、貴船川は其麓を流れ、古松、老杉生ひ茂り、楓葉のながめは殊によい。本社の奥およそ六百米のところに奥宮がある。

社の附近に雨乞瀧・鼓ケ淵・龍王淵などがある。雨乞瀧は奥宮の附近にあるが、神に雨を祈る時は必ずこゝで式が行はれるとのこと。

六、八瀬大原

順路

叡山電鐵八瀬停留場——三千院——寂光院——八瀬停留場——(行程約十七粁)

八瀬　愛宕郡八瀬村、叡山電車八瀬停留場より約二粁

八瀬童子

比叡山の西ふもとで、高野川の北、八瀬川の流るゝところにある。

建武二年足利尊氏が叛旗をひるがへして京都を犯し、御醍醐天皇は難を避けて叡山に遷幸遊ばされた時車駕を奉じて御供申上げたのは當村民であつた。之等の功に因つて維新前は租税を免ぜられてゐたが、今日では

は宮内省から地税を下賜せられ、宮中に大事ある時は八瀬童子(ヤセドウジ)とよばれ駕輿丁(ガヨテウ)として召出されることになつてゐる。

三千院　愛宕郡大原村、電車八瀬停留場より北東七粁

——宗派、天台宗——本尊、阿彌陀如來——

聲明(ショウミヤウ)で名高い三千院

一名圓融院とも云ふ。天台宗山門派三門跡の一で、貞觀年中僧承雲の開基である。鳥羽天皇の御代尊快法親王の御入寺より、皇族世襲の門跡寺となつた。後世この寺を梨本門跡又は梶井門跡とも云つて居る。今の梨本宮殿下は當山第五十世の門主で昌仁法親王と仰せられたが、維新の際復飾(フクシヨク)遊ばされた。

寺はもと舟岡山にあつたものを應仁の兵亂後此地に移したもので、殿舍は慶長年間の造營である。

往生極樂院(三千院の本堂)

花山天皇の勅願で寛和元年(約九五〇年前)惠心僧都の建立と稱せられ僧都の母安養尼の住寺と傳へる。

堂宇は常行三昧堂の古式に因つたもので破風造・單層入母屋・柿葺(コケラブキ)である。

舟底天井で天井としての別の構造がなく、垂木(タルキ)を延長して上部を覆ふてゐる。欄間の二十五菩薩の圖は惠

心の作と傳へ、今特別保護建造物となつてゐる。

本尊及脇侍の觀音、勢至二菩薩も亦惠心の作と傳へ何れも國寶である。脇侍の二菩薩が膝を屈して居られるのは多くの佛像中稀に見るものである。不動明王立像・紙本墨書の古書五種と共に國寶である。

聲　明

佛教禮讃の聲で、一種の佛教聲樂である。當寺は古來其の音律聲明の法を宣傳し、宮中の御懺法講を專掌するの光榮を有して居た。

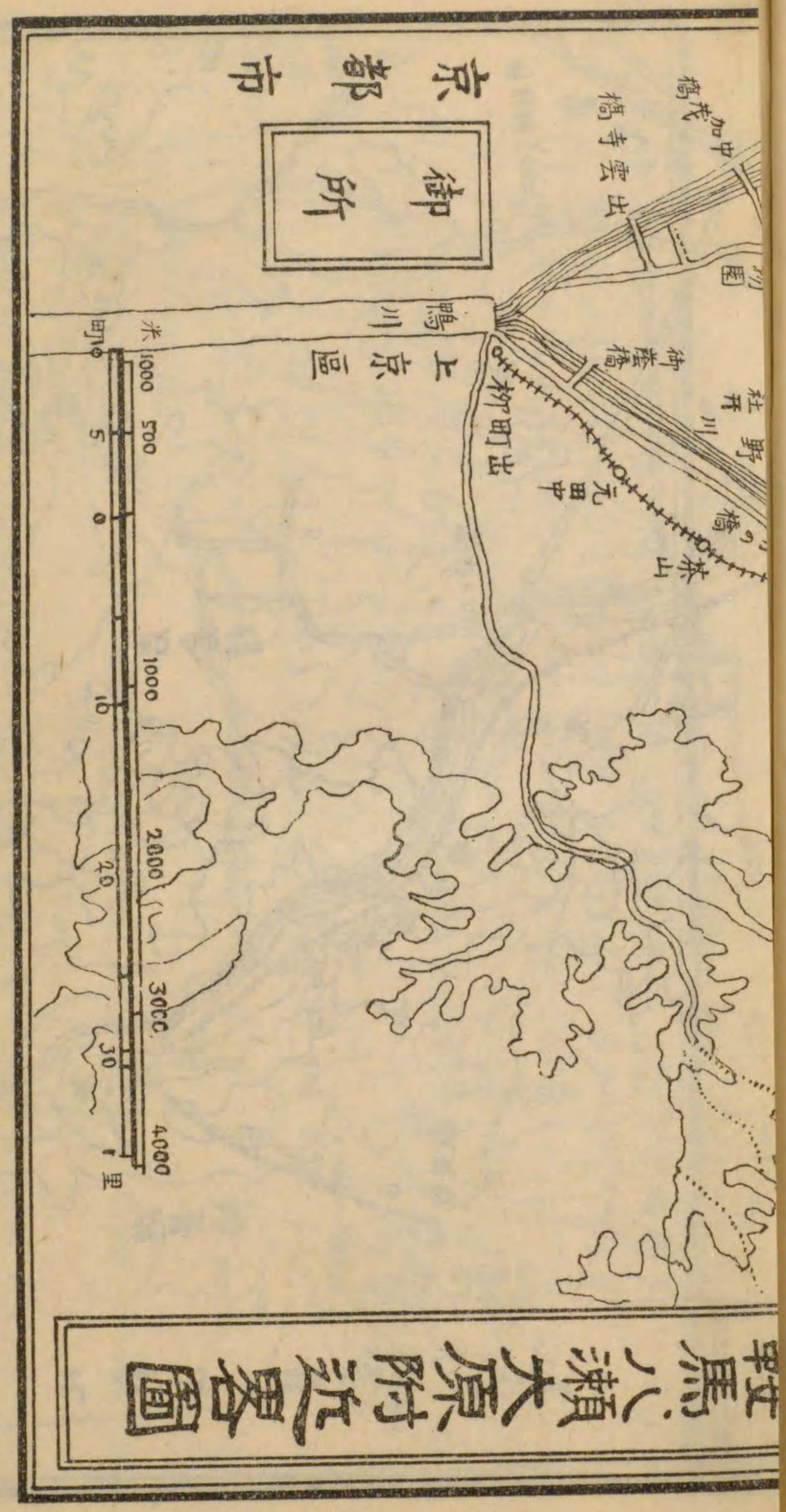
呂川・律川と諸堂

聲明や支那の音樂、天台山の地名等に因んで、寺の左右の溪流を呂川・律川と呼んでゐる。參詣者は先づ呂川を渡つて、古歌に名高い清歌井の清水を眺めながらお寺にはいる。楓葉に包まれた羅漢橋を渡ると淨蓮華院・來迎院と續く。來迎院の中尊藥師如來左右の釋迦如來・阿彌陀如來何れも惠心作と傳へて國寶である。二三百米の向ふには靜かに響く音無の瀧が淨土の便りをもたらすかのやうに下界をのぞいてゐる。

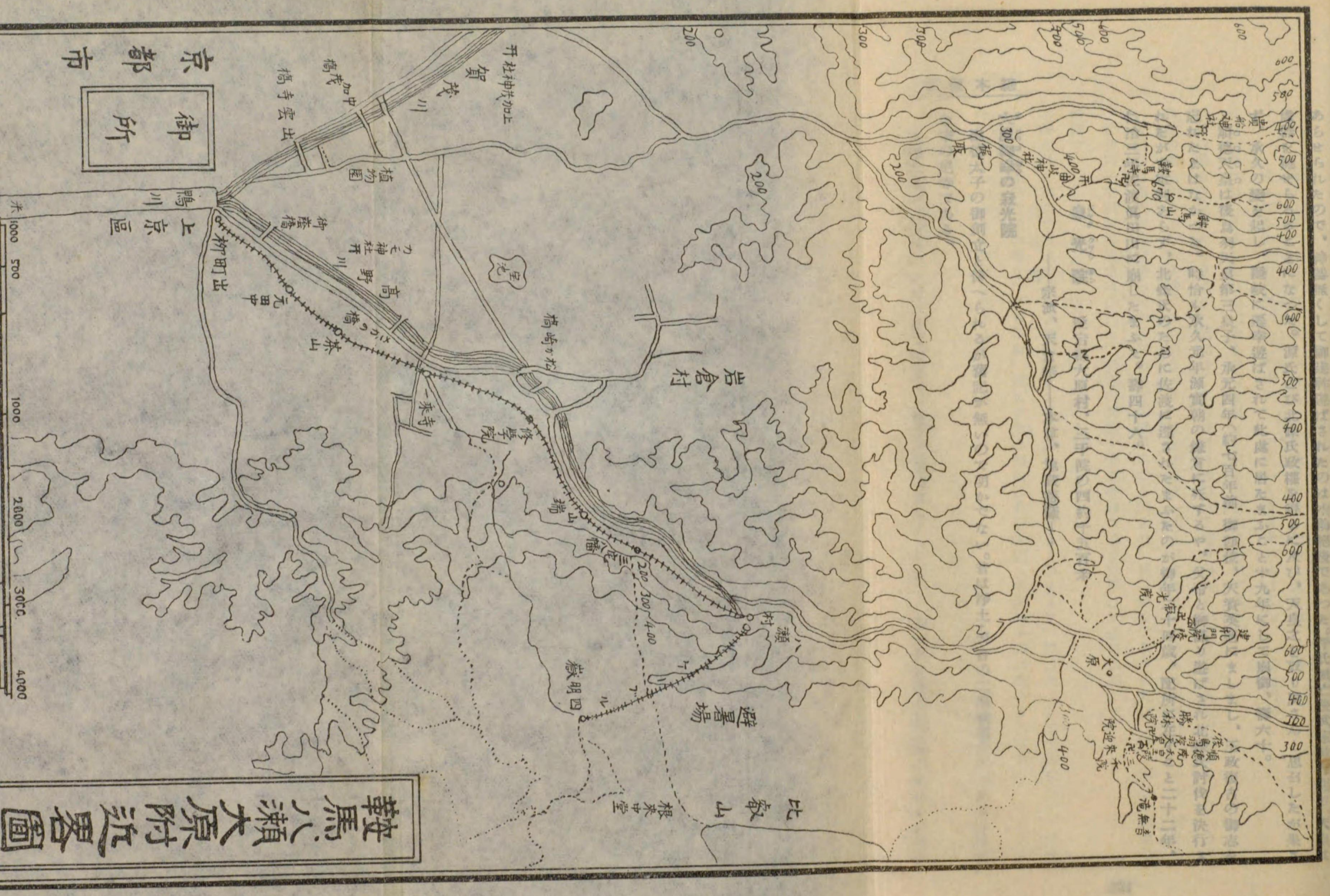
後鳥羽天皇（第八十二代）

順德天皇（第八十四代）　**大原陵**　三千院の境內

後鳥羽天皇は高倉天皇の第四皇子元暦元年（約七百四十年前）御即位、當時神器は安德天皇と共に西國に

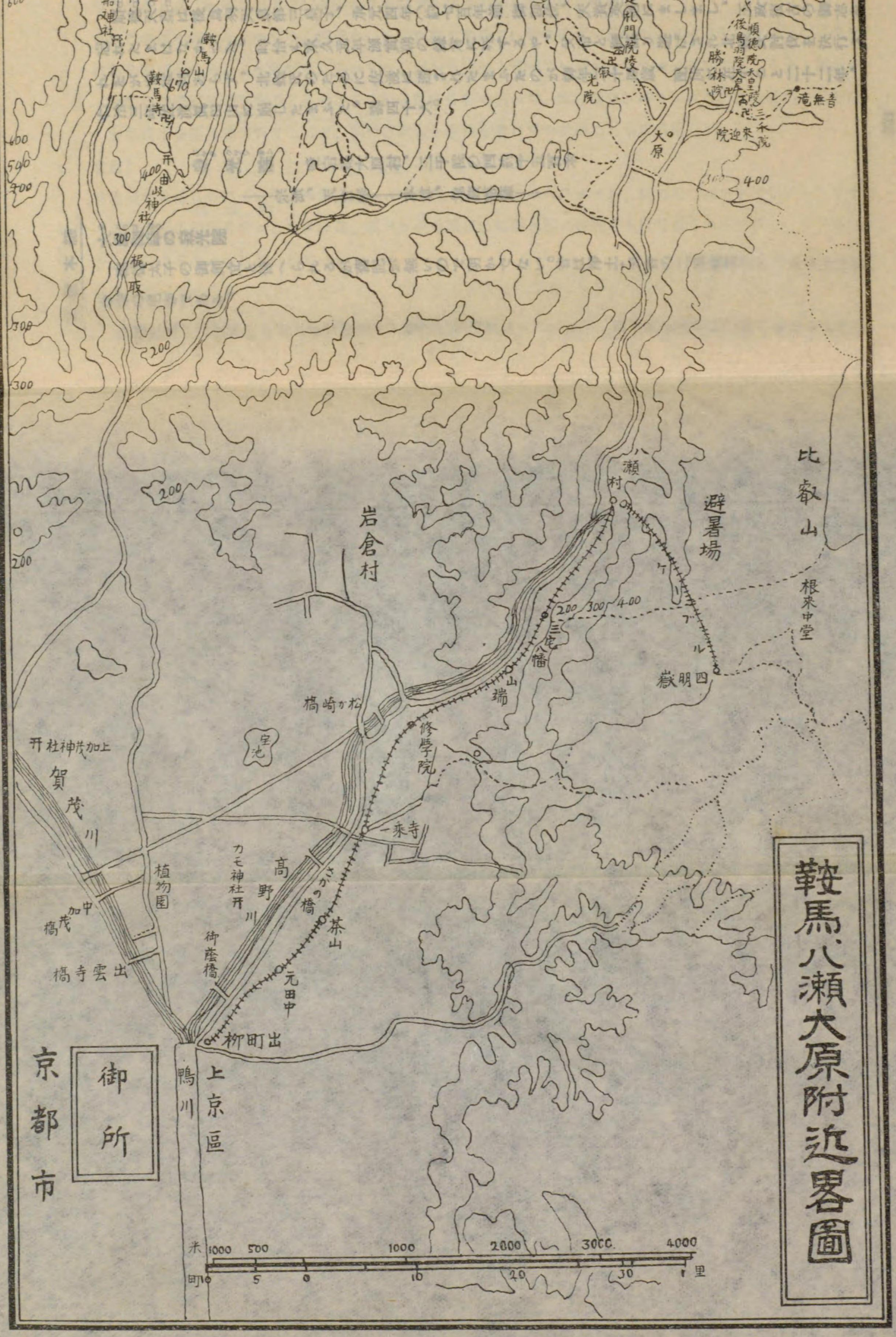


京都市附近



洛東洛北大原附近之圖

後鳥羽天皇は高倉天皇の第四皇子元暦元年（約七百四十年前）御即位、當時神器は安德天皇と共に西國に


鞍馬、八瀬大原附近略圖
比叡山
根來中堂
避暑場
八瀬村
大原
勝林院
光院
音無滝
三千院
迎來院
順德院
後鳥羽院
天皇陵
岩倉村
四明嶽
三宅八幡
山端
松ヶ崎橋
修學院
一乗寺
高野川
茶山
元田中
柳町出
植物園
賀茂川
上加茂神社
中加茂橋
出雲寺橋
御蔭橋
カモ神社
鴨川
上京區
京都市
御所
鞍馬山
鞍馬寺
由岐神社
梶原
米
町
里

あらせられたので、神器無くして御踐祚遊ばされたのは空前絶後であつた。平氏滅亡後武家政治起り、天皇は虚器を擁せらるることになつた。源氏亡び北條氏政權を得るに及び、天皇之を取り戻さんと思召したが果さず、承久の變を起し、隱岐に遷幸遊ばされて此處に居たまふこと十九年にして崩御、壽六十。

順德天皇は後鳥羽天皇第三皇子、承元四年(約七百年前)御即位、天資英邁にましまし、王政復古の御志を忘れたまはなかつた。時恰も承久元年源實朝の鎌倉に死するや、父帝と御謀り遊ばされ北條氏討伐を決行されたが官軍利あらず、北條氏のために佐渡に遷されたまふたのが御年二十四歲、配所に在すこと二十二年、仁治三年佐渡眞田山に崩じたまふた。壽四十六。

寂光院(ジヤククワウヰン)

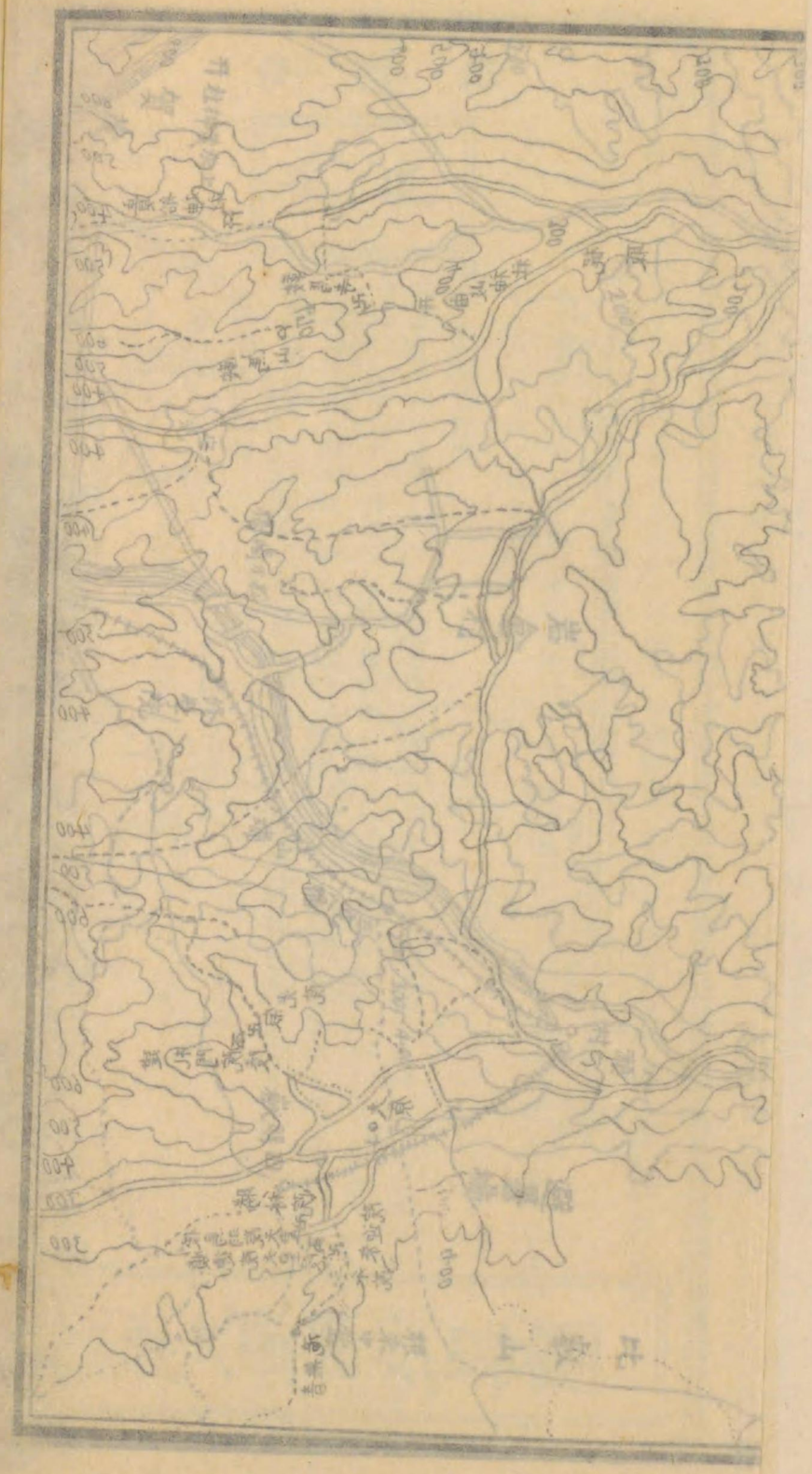
愛宕郡大原村、三千院の西約千五百米

——宗派、天台宗——本尊、地藏菩薩——

大原御幸(オハラゴカウ)の寂光院

聖德太子の御創立と傳へられるが舊記が無いので明かでない。昔は淨土・天台の二宗兼學であつたが今は天台宗の尼寺である。

安德天皇が二位尼にいだかれて西海より龍宮に御幸まし〳〵てから、御母公建禮門院の御心は日々打沈ま



せられ、世を果敢なみたまふの餘り、墨染の衣をおん身に着け、吉田の里から此の寺に入らせられ、一門の冥福を祈られたのが、文治元年のことで、同二年四月後白河法皇この寺に御幸し、門院を尋ねさせられたのが、世にいはゆる大原御幸である。

「或る女房の吉田に參りて申けるは、是より北小原山の奥寂光院と申所こそ靜に候へとぞ申ける。女院山里は物寂しき事こそあんなれども世の憂きよりは住みよかんなるものをとて、思しめし立たせ給ひけり」(平家物語)

當時は一草庵に過ぎなかつたが、淀君の發願で豐臣秀頼これを改築して今日に至つた。

寶物の建禮門院御繡髪(シウハツ)の六字名號は弘安七年甲申作と記され、其が珍奇であると共に、此の寂しい山里に高貴の御身分をもつて九年間も穩棲されて、五十七歳を一期として崩ぜられたことを思ひ浮べると一種言ひ知れぬ悲哀を感じさせられる。謠曲や、平家琵琶に歌はれて後世の人々が涙をそゝる「大原御幸」其は賑やかなみやこに、うらさびしい山奥をゑがき出して來る感傷的な戯曲である。

おもひきや深山(ミヤマ)の奥に住居して　雲井の月をよそに見むとは　建禮門院

かしかましおはらの里のくつは蟲　手綱(タツナ)ひかへて法(ノリ)のこゑきけ　同

七、琵琶湖のほとり

(一)琵琶湖(附)島廻り

(二)大津と石山

(三)宇治川ライン

(四)坂本と比叡山

(一)琵琶湖(附)島廻り

日本一の琵琶湖

滋賀縣の地に近江八景を初め景勝の地が多いのは實にこの琵琶湖あるがためであることは何人もうなづく所であらう。孝靈天皇の五年の大地震。一夜に地が裂けてこの湖が出來、關東では富士山がとび出したといふのは恐らく一つの傳説ではあらうが、しかし上代人がこの湖に對して或る驚きをもつてゐたことは想像で

きる。近江といふ名の起りもこの淡海（アハウミ）から轉じてアフミとなつたといふことである。

イ、廣さ　東西…最廣部……二十二粁　最狹部……二粁
　　南北……六十四粁
　　周圍……二百三十六粁
　　面積……六百七十四方粁（大阪府の約三分の一、日本第一の大湖）

ロ、最大深度……九十六米（竹生島の四方）

ハ、海拔……八十六米

ニ、成因及種類……陷落湖・淡水湖

ホ、人文に及ぼす影響

1　氣候をやはらげる…（彦根は京都より北にあるが京都に比して夏涼しく冬暖い）

　　二月　京都　二・七度　　八月　京都　二六・一度
　　彦根　三・〇度　　彦根　二五・五度

2　運輸・交通の便を與へる。

3　灌漑の益がある。（縣下米產年額百三十萬石……本縣ばかりでなく、瀨田川——淀川となつて流れるから京都・大阪府下までも其の益をうけてゐる。）

4　漁利が多い。（縣下水產年額凡五十萬圓—鯉・鮒・小香魚（コアユ）等多く就中鮒は源五郎鮒といつて名高い）

5　疏水運河の利用（疏水は三保ヶ崎から三井寺下を過ぎトンネルをぬいて京都蹴上げに出る大運河で延長凡十一粁、明治十八年に起工し五ヶ年の日子と二百萬圓の工費を費して出來た大工事で運輸・交通・發電・上水・灌漑等に利用されてゐる。第二疏水は略此の第一疏水に並行してゐる。）

（二五九頁疏水運河參照）

兩運河の總水量　毎秒八五〇立方尺
　　七五〇（立方尺）—發電用
　　五〇—上水及防火用
　　一一—防火用
　　一〇—御所用水
　　一九—山科地方灌漑用
　　其他—放水

近江八景

八景の元祖——近江八景——

湖がもつ色々の地形上の變化はそこの風景を引立てる。近江八景は今から凡四百年程前に近衞政家が支那の洞庭湖（ドウテイコ）の八景をまねて選んだと傳へられてゐるもので、我國八景の元祖であらう。

石山の秋月　瀨田の夕照　粟津の晴嵐　矢橋の歸帆
三井の晚鐘　唐崎の夜雨　堅田の落雁　比良の暮雪

何れ劣らぬよい景色、昔から詩や歌によまれたことも數知れぬ程である。湖の國、近江は惠まれた國、綺

麗な國である。

島廻り

湖の中には竹生・多景・沖・奥など景色のよい島が散在してをり、島廻りといつて琵琶湖周遊の汽船は毎日これらの島をはじめ沿岸形勝の地に客を送迎してゐる。鏡のやうな湖面を靜かに走る汽船、繪の様な沿岸の風物、花の春、紅葉の秋、觀光の客はたえない。今それらの主なるところについて記すと。

唐崎の松

近江八景の一、唐崎の夜雨で其の名を得た一つ松は唐崎港のすぐ傍にあつた。ここは大津宮時代の埠頭で、松も其の頃植ゑられたものとのこと。後天正十九年（約三百四十年前）新庄直頼を植繼いだものが榮えてゐたが近年非常に衰へ、大正十年には全く枯死してしまつた。

唐崎の松は花よりおぼろにて　芭蕉

新唐崎の松

下坂本村比叡の辻湖岸磯成神社境内にある。——坂本港からすぐ北方に見える。——幹の高さ十一米

唐崎の松の實生で、日吉神社の社家稅部行麿が植ゑたものと言ひ傳へてゐる。

堅田の浮御堂　滋賀郡堅田町

堅田港の湖中に突出した小閣で惠心の創設、その作千體の阿彌陀像を安置してゐる。堂は櫻町院の勅

旨により御能舞臺を御下賜になつたもので禪宗滿月寺が之れを守つてゐる。

附近に雁が下りて景を添へるので八景の一に數へられたものである。

長壽の神白髭神社　滋賀郡小松村鵜川

大溝港から南一粁、明神崎に鎭座、猿田彦命をまつる。長壽の神として聞え、近世皇室の御崇敬厚くやんごとなき御祈禱狀など數多く社寶になつてゐる。神域は山脚湖に迫つて、朱塗の大鳥居・高燈籠・桃山時代の社殿を湖上より拜する眺は如何にも神さびてゐる。

近江舞子——雄松崎——滋賀郡小松村

湖岸夏の遊覽地として隨一の雄松崎は白砂青松あつらへむきに出來てゐて、播州舞子の濱に髣髴たるにより、近江舞子の名によつて世に知られる樣になつた。一粁餘の沙嘴が內湖を抱へて、近く比良連山を背景に、楊梅(ヤマモ)瀧のみえがくれ、水泳に鮠(ハス)網に一日の清遊には飽くことを知らしめない。汽船はすぐそばの棧橋に着く。

竹生島

周圍約二粁、大津から湖上七十粁、急行船で約二時間半。島中竹をはじめ老杉古松鬱蒼として生い茂つた中に神社佛閣の隱見する樣は言語に絕してゐる。水深く紺碧にして鏡の如く謠曲「竹生島」で名高い「綠樹影沈んで魚木に登る景色あり」とはよくここの情景をうつしてゐる。主なる建物は皆棧橋の近くに集つてある。

一、辨財天堂、　僧行基の開基で、辨財天女を安置してゐる。江の島・嚴島とともに日本辨三財天として名高い。

二、觀音堂　本尊千手觀世音、西國三十三ヶ所第三十番の札所。

三、都久夫須麻神社　祭神淺井姫命、社殿は觀音堂と共に豐臣秀頼公が伏見桃山城の一部を寄進されたもので、關西における神社建築の最も華麗なものの一つである。

多景島

周圍一粁餘、大津から三七粁、彦根から三・七粁、島中に見塔寺あり、湖中の風景を獨占して立つてゐる。一大巨巖に法華題目が刻まれてあるのも船から目立つて見える。大正十五年明治天皇五ヶ條の御誓文を刻んだ「誓の御柱」が建設され燦然と光をはなつてゐる。

沖の白石

多景島の南西三・七粁、大小四個の奇巖湖中に屹立し一奇觀をなしてゐる。最も高いもので湖面を拔くこと十米。三上山・多景・竹生・沖・奥の諸島とともに陷沒浸蝕の殘壘である。

三十一番の札所長命寺　蒲生郡島村

——宗派、天臺宗山門派——本尊、千手觀音——

長命寺山の中腹にある。長命寺港からすぐ急峻な坂路一粁、八百八の石段を登りつめて境内に至る。

寺は西國巡禮三十一番の札所。寺傳によれば、聖德太子の開基、武内宿禰の長壽にちなんで寺號とし、天智天皇の御幸を忝うしたといはれてゐる。本堂は室町時代のもの、三重塔も亦湖山に配合よく建てられ、ともに特別保護建造物。

寺域は脚下に松ケ崎をひかへ、眼界の及ぶかぎり、湖山の風光皆双眸に映じ沿岸の勝地である。交通は汽船による外、八幡町から自動車、和船も仕立てられる。

やちとせや柳にながきいのち寺　はこぶあゆみのかざしなるらん

(二) 大津と石山

順路

一、京津線札ノ辻停留場——大津市——三井寺——琵琶湖電鐵三井寺下停留場——石山停留場——石山寺——瀨田橋——唐橋前停留場——(行程凡四粁)

二、省線大津驛——三井寺——大津驛——石山驛——石山寺——瀨田橋——石山驛——(徒歩行程凡五粁)

三、省線石山驛——石山寺——南鄕洗堰——岩間寺——瀨田橋——石山驛——(徒歩行程凡十二粁)

(附近)——建部神社、粟津ケ原、義仲寺。

大津市

湖國の中心——大津市

大津市は縣の南端、琵琶湖の排水口に位し、人口約三・五萬、滋賀縣廳、歩兵第九聯隊第三大隊（聯隊本部は伏見）等の所在地。陸上には東海道線を初め、京阪電鐵京津線・琵琶湖電鐵・江若鐵道などあり、湖上には琵琶湖・太湖の兩汽船會社が湖畔各地に航路を設け、水陸共に運輸・交通の便よく、古くより湖國の中心地として繁榮して今日に至つてゐる。

市の主要物産は麻織物で年額約二百六十萬圓に達してゐる。

大津名物——鮒すし・湖魚あめだき・走井餅・大津繪。

膳所（ゼゼ）町は市の南東部に細長く接續し事實上の大大津市を形成してゐる。

天智天皇の滋賀宮址

明治二十八年に、舊來の地誌が多くここを大津朝廷の址としたから碑をたてた。思ふに天智天皇六年に政治の革新、人心の作興、東國との交渉等の必要上大和の飛鳥からここに都を遷されたが、間もなく崩御になり、つづいて壬申の亂おこり、都たりしこと僅に五年其の上宮殿も天皇崩御の前月に燒けたのだから、其壽命は頗る短かつた。荒れ果てた舊都を眺めてそぞろに昔をしのんだのは歌人のみではなかつたらう。

今の碑のある所は京城の南端で皇居はこれから北方に當る滋賀の里小字宮の内邊であつたであらうとの說もある。

さゝなみやしがの都はあれにしを　昔ながらの山櫻かな　平忠度

三井寺（園城寺）　大津市別所

——宗派、天台宗——本尊、彌勒佛——

寺門派の本山

弘文天皇の皇子が天皇の菩提を弔ふために其の舊御所に寺をおこされたのが基であつた。清和天皇の時（約一千七十年前）弘法大師の甥に當る僧圓珍（智證大師）が留唐八年、歸朝後こゝに入つてから盛になつた。その境内にある、天智・天武・持統三帝の御産湯の井戸を御井（ミヰ）とよんだのがもとゝなつて、三井寺となつたといふ俗稱がある。圓珍は博學多識、稀に見る高僧で上下の尊信篤く遂に延曆寺から獨立して之と並び立つの勢を得た。しかしこれが爲めに延曆寺との衝突絶えず、相爭ふこと數百年に亘り、寺坊の炎上すること十一回（内三回は兵火）皆山門僧徒の放火であつたといふ。德川氏に及んで伽藍を再興して今日に至つた。境内櫻・楓多く展望の美を兼ね、四時遊覽の客を迎へてゐる。

主なる建物

三井寺觀音（正法寺）には如意輪觀音像をまつる。後三條天皇の御願で出來たもので西國巡禮第十四番の札所である。

いでいるやなみまの月は三井寺の　鐘の響にあくるみづうみ

境内觀月堂は市街や湖面を瞰下するによく、殊にそこから湖水をへだてゝ遙かに近江富士（三上山）に對し、轉じて比叡・比良・伊吹等の諸峯を遠望する眺は實に絶佳である。前の茶店の辨慶の力餅はおいしい土産である。

金　堂（奥の院）境内の中央にある七間四面の建物。豐臣北政所の再建、特別保護建造物となつてゐる。内陣に三常燈がある。

三井晩鐘（新鐘樓）金堂の正面東側にある。近江八景の一、三井の晩鐘として美しい鐘聲で知られてゐるのはこれである。

因に音は三井寺、形は鳳凰堂（宇治）銘は神護寺（高雄）と並べて日本三名鐘といはれてゐる。

七景は霧にかくれて三井の鐘　芭蕉

古鐘樓（破鐘堂）金堂の西側一段高いところにある。鐘の高さ五尺五寸、田原藤太の寄進せるものと傳へ別に辨慶の引摺（ヒキズリ）鐘ともいひ面白い傳説がある。百足退治の傳説（神社考低書）

或時藤原秀郷（田原藤太）は一人で瀬田橋の上を通つた。ところが橋の上に兩眼は銀の玉の樣にきらきらとかがやき、するどい二本の角をさかだて鐵の樣な牙をむき出した口からは焰のやうな息を吐き出して、大蛇が横はつてゐた。秀郷は平氣の平左で、その大蛇をまたいで通つた。少し行きすぎると、ひよつこり一人の男がやつて來て、秀郷の前に立つて言つた。「私は瀬田の橋の下に二千年もすんでゐますが、まだあなたの樣な剛勇な人は見たことがありません。私のために敵をうつて下さるならば、其の御恩は一生忘れません」と　秀郷は其の頼みを聞いて橋にかへり下から湖にはいり二三里程進むと一つの門に來た。はいつて見るときれいな砂をしきつめた道の奥には金の柱に銀のてすり、赤や紫のきれいな色を塗り玉の瓦をふいた御殿があり、其の立派さはとても繪にもかけず、口でも話すことが出來ない程であつた。秀郷は案内されて奥まつた大座敷に通ると、さきの男はきれいな着物をきかへて出て來て、皆のもの差圖して山海の珍味を運ばせてもてなした。

やがて夜は更けた。皆の者は惡者の來るのを恐れた。秀郷が弓矢をとつて待つてゐると俄かに暴風雨が起り雷電さへも加はつて來た。頭をあげて見ると、大たい松を二千もともしたらうかと思はれる樣な光が二つ並んで三上山の上から來た。秀郷は大百足（オホムカデ）だなと思つて近づいて來たのを射た。矢はあやまたずあたつたがこつんと音を立てゝはね返した。再び矢をはなつたがやはりはね返つた。秀郷は不思議に思つてこんどは矢じりにつばをつけて射た。矢はみけんに中つてのどの下まで突ぬけた。それと同時におそろしい光も消えたかと思ふと、どすんと山が倒れる樣な音がした。行つて見ると三上山を七卷半も

するほどの大百足であつた。

今迄どうなるかと思つて見てゐた男はやれ〳〵と太いためいきをついて胸をなでおろして言つた。「此所は龍宮です。私共はあの大百足のために何度もひどい目にあひました。今あなたに退治してもらつて安心しました。お粗末ですがお禮のしるしにこれを差上げます」と。いつて、絹一卷・鎧一領・米俵一俵・釣鐘一個を呉れた。秀郷は男に送られて出た。しばらく目をつむつて波の音が聞えるかと思ふともう瀬田橋についてゐた。

家へ歸つた秀郷は絹をたつて着物を作つたが、いくら切つても其の絹はつきなかつた。俵の米も出しても〳〵いつも一ぱいあつたので俵藤太といはれる樣になつた。鐘は三井寺に寄進した。後叡山からの燒打の時辨慶が引摺つて歸つたが一向鳴らない。山法師共は腹を立てゝ大きな撞木でつくとほへる樣な氣持の惡い聲でなつたので怒つて無動寺の谷へなげすてた。破れた鐘を拾つて三井寺にもつてかへると或日小さな蛇が來て、しつぽでぽて〳〵とたたくかと思ふときづもなほつたと言ひ傳へてゐる。

阿伽井屋　金堂の西側にあり、豐臣北政所の再建である。

天智・天武・持統三天皇御誕生の際の御產湯を汲みし井、三井の名のおこりはこれからであると。併し三天皇とも大和の京で御生長になつたのであるから、この滋賀に御降誕の浴井がある筈はないとの說もある。

釋迦堂　清涼殿の材を賜つて建てた食堂で、堂內に辨慶が使つたといふ大鍋がある。阿伽井屋と共に特別保護建造物である

圓滿院　寛和三年（約九四〇年前）の創立で、村上天皇第三皇子悟圓親王を開基とし爾來皇族相繼いで御在住あらせられた。現在の宸殿は明正天皇の御書院及御文庫を賜はり正保四年（約二八〇年前）に移遷せられたもので、殿舍林泉共にすぐれたものであつたが、明治初年此の院に縣廳を置かれた間に結構壯麗を極めた堂舍も荒廢してしまつた。縣廳舍の移轉と共に修理せられ爾來皇族殿下の御成相ついだ。最近は大正十一年に國母陛下が行啓あらせられた。今特別保護建造物に指定されてゐる。

院庫にある寶物數百點何れも優秀品ばかりであるが就中圓山應擧の七難七福の圖は特に名高い。

法明律院　承應二年（約二八〇年前）に園城寺の別院として創立されたもので、その林泉は所謂十景を具へ、山中幽邃で風光を樂しむによい。庭後墓地の中にある樣式の異つた五輪塔は、明治日本畫界の大恩人フェノロサの墓で明治四十一年遺言によつてロンドンから遺骨を送つてこの淨域に葬つたものである。

弘文天皇（第三十九代）**長等山前陵**（ナガラノヤマサキノミサヽキ）　大津市別所（三井寺の北、九聯隊兵營の西側）

大日本史、御歴代に加ふ

天皇は天智天皇の御長子、大友皇子と申し上げた。天智天皇御病重らせられし折、皇太弟大海人（オホアマ）皇子を召して後事を托された。ところが皇太弟は天皇の御意が大友皇子にあるのを察して病と稱し僧となつて吉野に入らせられた。よつて大友皇子を立てゝ皇太子となし、十二月天皇崩御、後をうけて即位せられた。

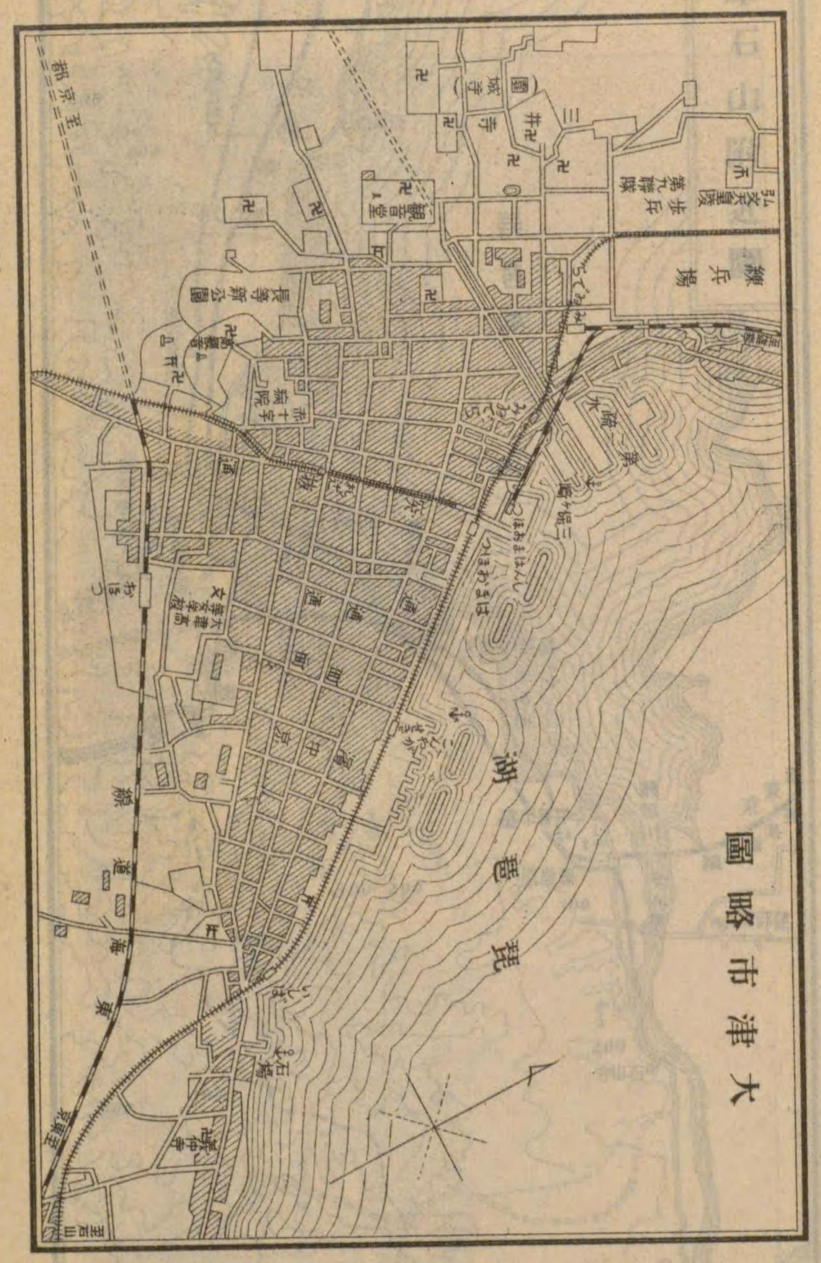
當時奏するものがあつて、大海人皇子の吉野に在るは虎を野に放つに近いものであると。そこで天智天皇の山陵を起すにかこつけて兵を召された。これをきいて大海人皇子も兵を起し兩軍瀬田に戰ふことになつた。天皇の軍利あらず、遂に長等の山前にのがれて自ら縊れ崩じ給ふた。御齡二十五。在位八ヶ月。

水戸光圀が大日本史に大友天皇本紀を作つて御歴代に數へるまでは、御歴代から除かれてあつた。明治三年明治天皇の勅によつて弘文天皇と、おくりなせられて確實に御歴代に數ふることゝなつた。

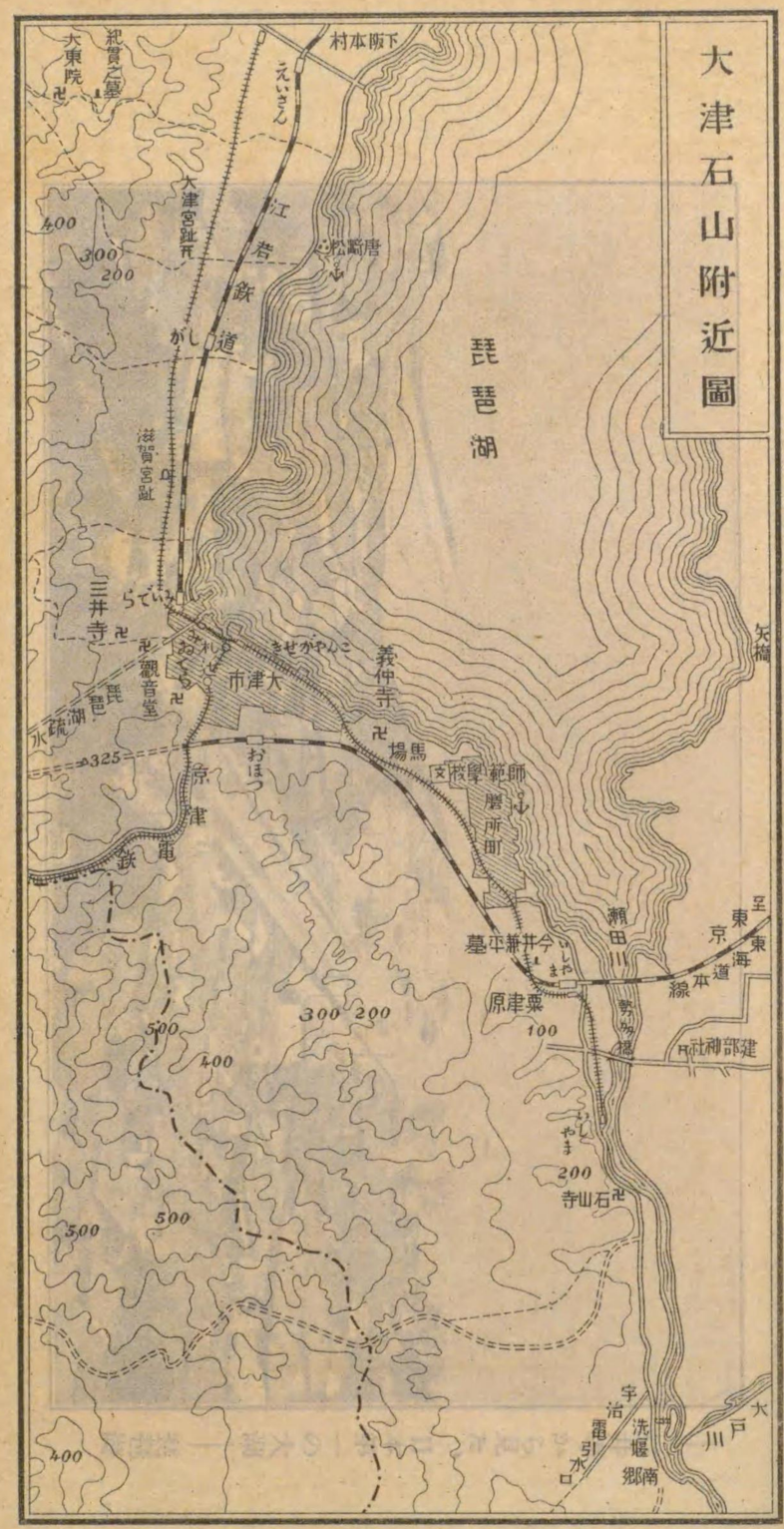
瀬田川

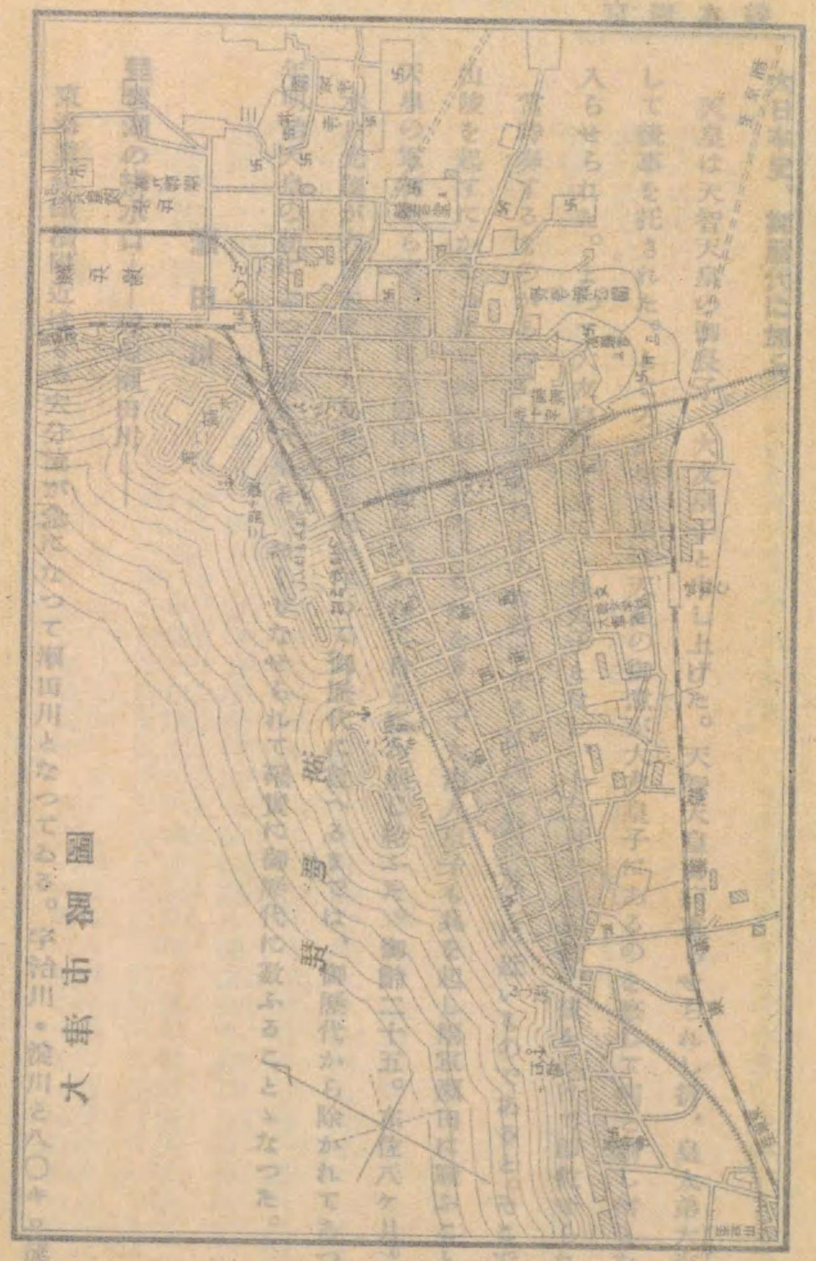
琵琶湖の排水口——蜆の瀬田川——

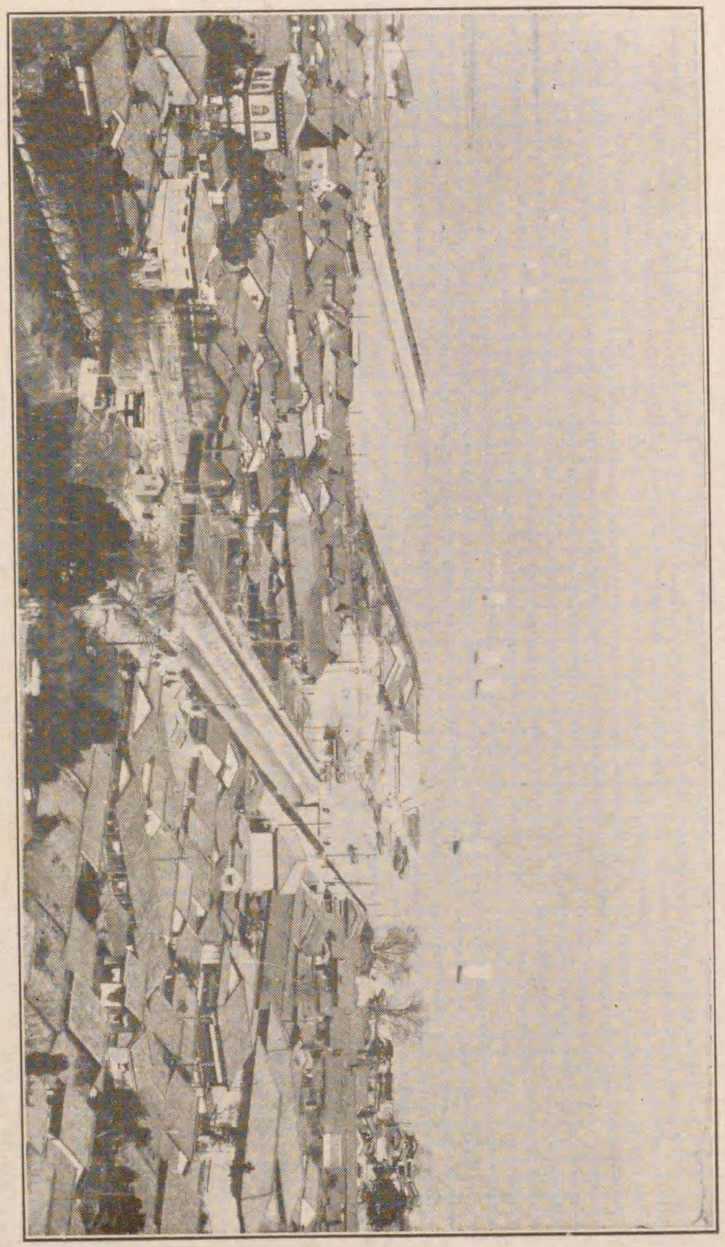
東海道線鐵橋附近はもう大分流が急になつて瀬田川となつてゐる。宇治川・淀川と八〇キロ流れて安治川



大津市略圖

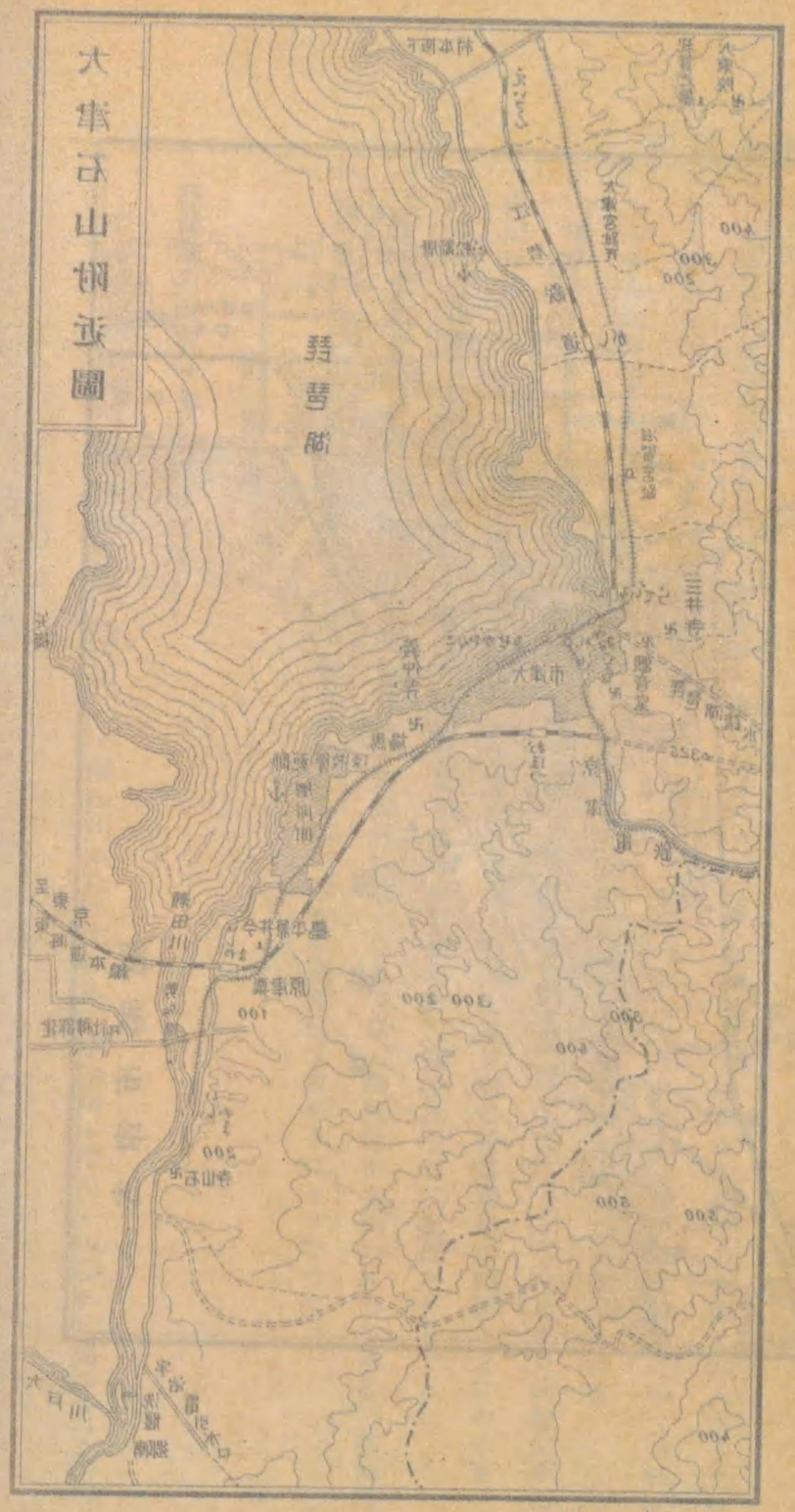

大津石山附近圖
琵琶湖
下阪本村
えいさん
紀貫之墓
大東院
大津宮址
江若鉄道
唐崎松
がし
滋賀宮址
三井寺
らでいし
観音堂
琵琶湖疏水
きせがやしこ
義仲寺
大津市
馬場
師範學校支廳所
325
京津電鉄
おほつ
今井兼平墓
瀬田川
東京道本線
至東海
粟津原
勢多橋
建部神社
石山寺
宇治電引水口
洗堰
南郷
大戸川
400
300
200
500
100

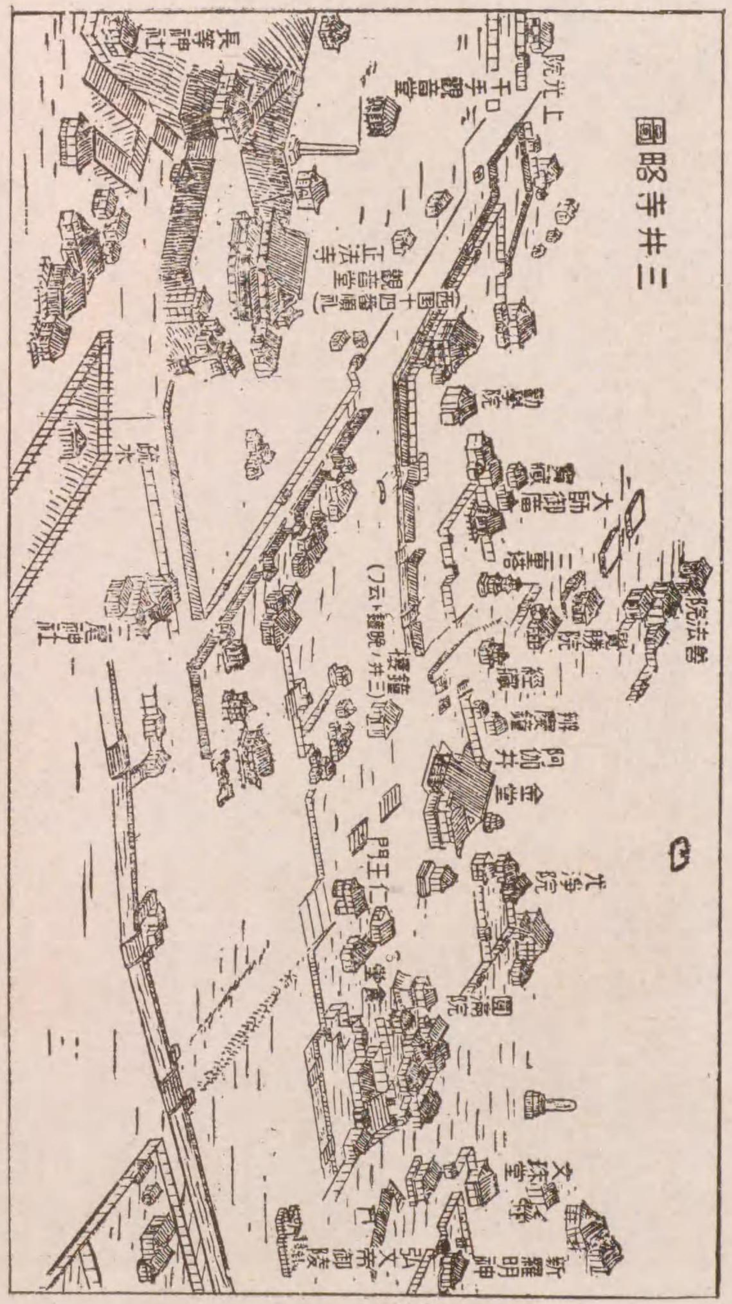

大津石山附近圖



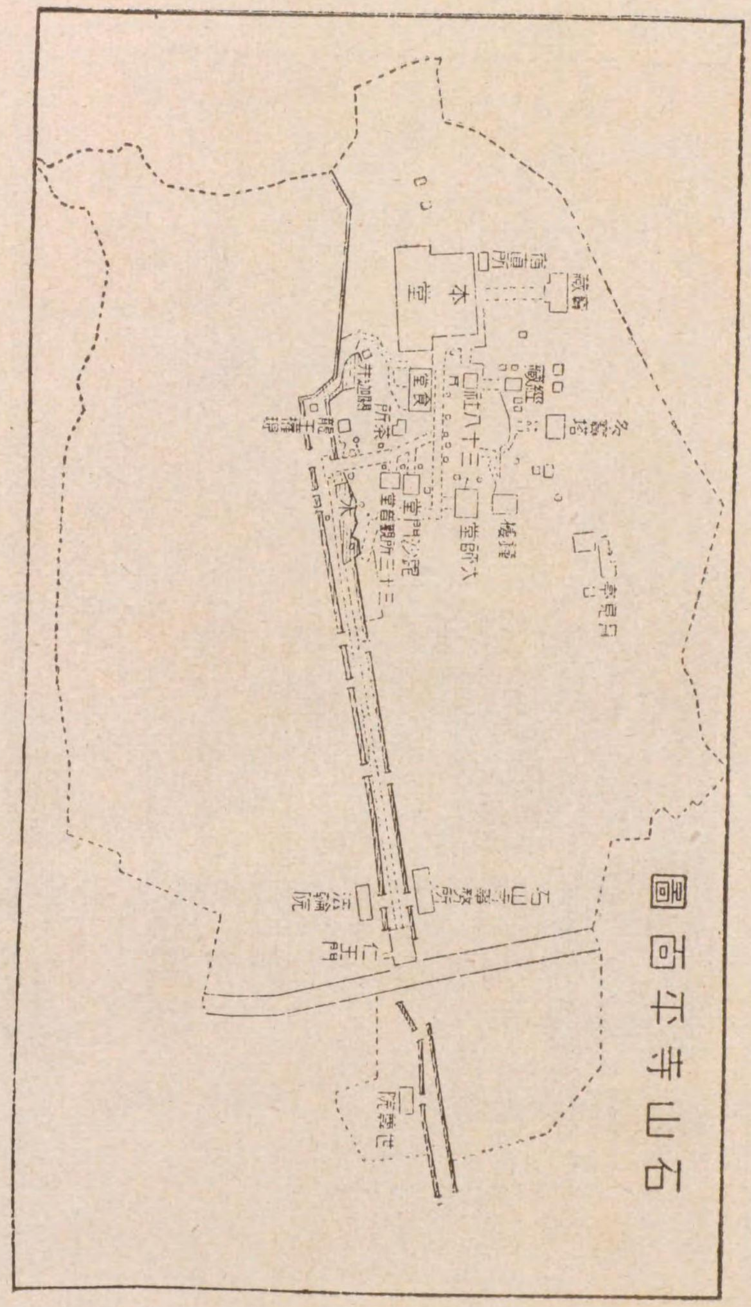
——三井寺から見た、日本第一の大湖——琵琶湖

大津石山附近圖





——最古の多寶塔——石山寺（鎌倉時代）



圖四十四石

口で大阪灣に注ぐ。途中、加茂・桂・木津の諸川を合せるから水量多く運輸・灌漑の利が極めて大である。瀨田橋附近の蜆は味のよいことを以て誇としてゐる。

瀨田橋

交通の要路、瀨田の唐橋

瀨田の唐橋唐金ぎぼし　水にうつるは膳所の城　（俗謠）

中島を挾んで大小二橋あり、大橋は一八〇米、小橋は五〇米、幅五米强、橋柱二十脚は鐵筋コンクリート造。大小三十四本の擬寶珠をつけた欄干、鐵筋の橋脚を覆ふた橋板等は古式に則つて外觀は依然として唐橋の風姿を示してゐる。八景の一、これ位人によく知られた橋も少からう。

交通機關の發達しない昔ではこの橋が東から京に入る唯一の交通路で軍事上の要地であつた。萬一の場合に戰略上この橋が落されると、宇治橋へまはるか今の南鄕洗堰の上流の淺瀨（供御の瀨といつて德川時代には軍事上の秘密にされてゐた）を渡るのであつた。德川氏が膳所の城主にいつも譜代の大名を置いたのも、こゝを守らせるためであつた。

壬申の亂を始め源平合戰、それに田原藤太の百足退治、橋の歴史は綿々として盡きない。

石山寺

滋賀郡石山村石山、琵琶湖電鐵モータボート終點南西凡そ二百米

——宗派、眞言宗——本尊、如意輪觀世音——

西國巡禮十三番の札所

のちのよを、ねがふ心はかろくとも　佛のちかひ重き石山

天平年間奈良の大佛を鑄る時に、僧良辨が佛の告げによつて、觀音菩薩を奉じてこゝへ來て大佛に塗る黃金を得んことを祈つた。間もなく陸奥から黃金を獻じて來たので御利益の大なるに感じ、丈六の像を刻み、先に奉じて來た觀音菩薩を其の中に收めて寺を興したのが石山寺の創まりである。其の後宇多天皇の御信仰厚く度々行幸され、爾來代々の天皇・皇后の行幸啓あり、貴賤上下の尊崇亦深かつた。源頼朝も其の一人で本寺が燒けた時などは舊觀に復するのみならず、多寶塔や毘沙門堂を建て增した。今の堂宇は皆淀君の修復したもので三百數十年を經、特別保護建造物である。古寫經・書畫・彫刻等の國寶ものも少くない。

石山の地は風光甚だよく、鏡のやうな湖水、瀨田の長橋はもとより、山頭の月見堂よりする觀月は絕勝といはれ、近江八景の一である。

境內の硅灰石（ケイクワイセキ）は寺傳には瑪瑙（メノウ）だと傳へてゐるが、これは此の地を構成する古生層の石灰岩が花崗岩の噴出に際して接觸作用を受けて粒狀に變形した接觸鑛物、卓石を多量に含む珍らしいもので天然記念物に指定さ

れてゐる。

本堂（觀音堂）　內陣は藤原時代の古式である。源氏の間は本堂の傍の一室で、東に向つて一つの窓がある。紫式部は月の湖水に映つるを見ながらこの室で古今の傑作源氏物語五十四帖を書き初めたと言ひ傳へてゐる。

多寶塔　鎌倉時代の遺物で我國の多寶塔中最も古く且つ整美したものである。鐘樓、東大門ともに特別保護建造物に指定されてをる。

附近

建部（タケベ）神社　栗太郡瀨田町字神領（シンレウ）

——社格、官幣大社——祭神、日本武尊——

瀨田橋の東凡そ五百米、大野山の綠につつまれたところに社殿がある。古來武神として武門の尊信厚く源頼朝の社頭に通夜したことは平家物語などに散見してゐる。

例祭は四月十五日で、八月七日には納涼祭がある。神輿を船にのせて瀨田川を下り、南鄕の濱、供御瀨に渡御する古式で、夜の還幸には篝火水面にうつゝて非常な壯觀を呈する。

史蹟を問ひたい粟津が原

膳所町南方の一帶の東海道筋には昔ながらの老松が蜿蜒と相つづいてゐる。このあたりを粟津が原と

いふ。近江八景の一つ栗津の晴嵐の地である。今は建ち並ぶ工場の烟突で昔のおもかげも少いが、元暦の昔（凡七百五十年前）木曾義仲が範頼・義經と戰つた古戰場で、義仲及其將今井兼平等はこゝで戰死した。義仲の墓はほど近い義仲寺にあり、兼平の墓は石山驛のすぐ北西のたんぼの中にある。

栗津が原の戰

義仲は兼平とわかれて只一騎にぐ……義仲忽ち馬を深田に乘り入れうてども〳〵動かばこそ、今井や續くとふと振向く途端、一矢とび來り、グザと額に中る。さしもの猛將も今は堪り得ず鞍に打ち伏す……兼平遙かにこの樣を見て心を決しサツトばかりに群がる敵中に突入し當るにまかせて蹴仆し薙倒せば敵兵皆恐れて逃げ走る。兼平今はこれまでとキツト敵を睨(ニラ)みて高く呼ばはる「日本一の剛の者の主の御供に自害するの狀を見習へや」と大刀の切先を口にくはへて馬より眞逆さまに落ちざまプツリと咽喉を突きぬ……まことに壯烈の最後なりけり。

義仲寺　大津市馬場町

木曾義仲の死後三百五十年、近江國司が石山寺に參る途中、將軍の墓が寒煙の中にあるのを悲しみ、一字を建てたのが即ち是である。佛堂に義仲及兼平の位牌がある。

寺は又芭蕉の舊跡で將軍の塚の傍にその墓がある。芭蕉は伊賀の人で俳諧中興の祖といはれてゐる。諸國を巡遊して秀吟多く人口に膾炙してゐる。元祿年間大阪で死んだが遺言によりこゝへ葬つた。

木曾殿とせなか合せの寒さかな　芭蕉

南鄕洗堰　滋賀郡石山村大字南鄕、湖南汽船南鄕終點

琵琶湖の水量調節

石山から下ること三キロ、航程十五分間、湖南汽船の終點に南鄕洗堰がある。琵琶湖と淀川沿岸との水量調節の大工事で全長約百七十米其間に三十二の閘門を有し一秒時一閘門からおよそ百七十立方米の排水をなし奔流飛瀑の壯觀を呈し、その下流は水深く魚肥え網船によい。

堰の東端にある鰻の上下する梯子(ハシゴ)はこの堰が出來てから琵琶湖の鰻が種切れになつて困つてゐた時、瑞西(スイス)水產局技師に敎へて貰つたといふ面白い歷史のあるものである。梯子の近くは禁漁區になつてゐる。堰の東方に別に舟航の爲めの閘門も設備されてある。洗堰の上流凡そ二百米の右岸に宇治電の引水口がある。

岩間寺　近江國滋賀郡石山村、石山寺から南西凡そ五粁（外畑より間道約二粁）

——宗派、古義眞言宗——本尊、千手觀世音——

西國靈場十二番の札所

みなかみはいづくなるらん岩間寺　きしうつなみは松風のおと。

寺傳によると養老六年（凡一千二百年前）元正天皇御不豫の事があつたので、泰澄和尙に勅して加持せし

められたところ、靈驗があつたので七堂伽藍を建立されたとのこと。本尊千手觀音は世に汗かきの觀音といはれてゐる。又此本尊は雷よけの觀音と呼ばれ、雷神が和尚に感じて清水を湧き出させたと傳へるところは雷の井戸といはれ今も神水を出してゐる。

芭蕉は當山を信じ法華經二十八品を一石に一字づゝ書くために子供達に菓子を與へて石を拾はせ、終に本願を果したので庵記の末に夏木立の句をよんだといはれ、今も寺の西方に一字一石塔とよばれる塔がある。

まづたのむ椎の木もあり夏木立　芭蕉

寺は岩間山の上にあり、南には瀨田川谷をへだてて鷲峯の遠望もよい。石山からの登山道は瀨田川の流水や、琵琶湖の風光が手にとる樣に見えて苦しさも忘れさせる。

十一番札所上醍醐から凡そ六粁。京阪宇治線六地藏停留場——下醍醐——上醍醐——岩間寺——石山寺——石山驛へ凡そ二十粁の旅行も健脚家には愉快な行程であらう。

立木觀音　滋賀郡石山村大字南郷

洗堰から南約二キロ、だら〳〵坂を上つた山腹にある。又大石街道からは上り五百米で堂の前に出る。俗に厄除け觀音といひ、本尊は弘法大師が四十二歳の時厄除け祈願のためこの山の立木に刻んだと傳へる「立木觀音」である。京阪神あたりから著しく信者の參拜がある。

米かし・鹿飛び（シヽト）

南郷洗堰の下流大石村に至る間、瀨田川の兩岸漸く迫つて奇巖怪石相重り、自然の嶮岨をなし、歩々變化して行く有樣應接に遑がない。關の津から少し下流、河幅廣く水勢の最も奔激してゐる所を米かしといひ、岩穴に急流がぶつつかつて白沫を飛ばしてゐる。

大石村に近い鹿飛橋の邊は鹿も飛びかふ程に巨岩相迫つて奔流は紺碧にたたへられてゐる。（岩と岩との間一〇米位）

堰堤

宇治川電氣の第二期工事で約一千萬圓の巨費を投じてつくられたもの、東洋に於ける大工事で、發電馬力は五萬キロ、落差凡そ三十米、餘の水三十米の瀑布、青天虹映の壯觀、もの凄いばかりの光景である。

（三）宇治川ライン

かくれた勝地、宇治・琵琶湖間

八百八川の水を集めた日本の大湖、琵琶湖の水は勢多川となり、大戸川を合せ立木山麓を流れ、田原川を

併せ宇治に下る。斷崖絶壁、奇岩怪石、曲水狂亂。隱れた一名勝地。西の耶馬、南紀の瀞、東の寢覺に比すべしなどといはれてゐる。

宇治電第二期工事としてこの間に千萬の巨費を投じて高さ三十米の堰堤をつくつた。山間八粁、滿々と湛えられた水の上も、安全に渡航せられるやうになつた。

琵琶湖より宇治へ、宇治より琵琶湖へ。……宇治川汽船會社のモータボートによつてこの水を過り、徒歩で宇治へ。宇治より徒歩、ボートで琵琶湖脚南郷へ出る、確に一日の行程として面白い。

宇治川ラインの名によつて近時宣傳せられてゐるのも、この交通路による一日の旅の知らせである。

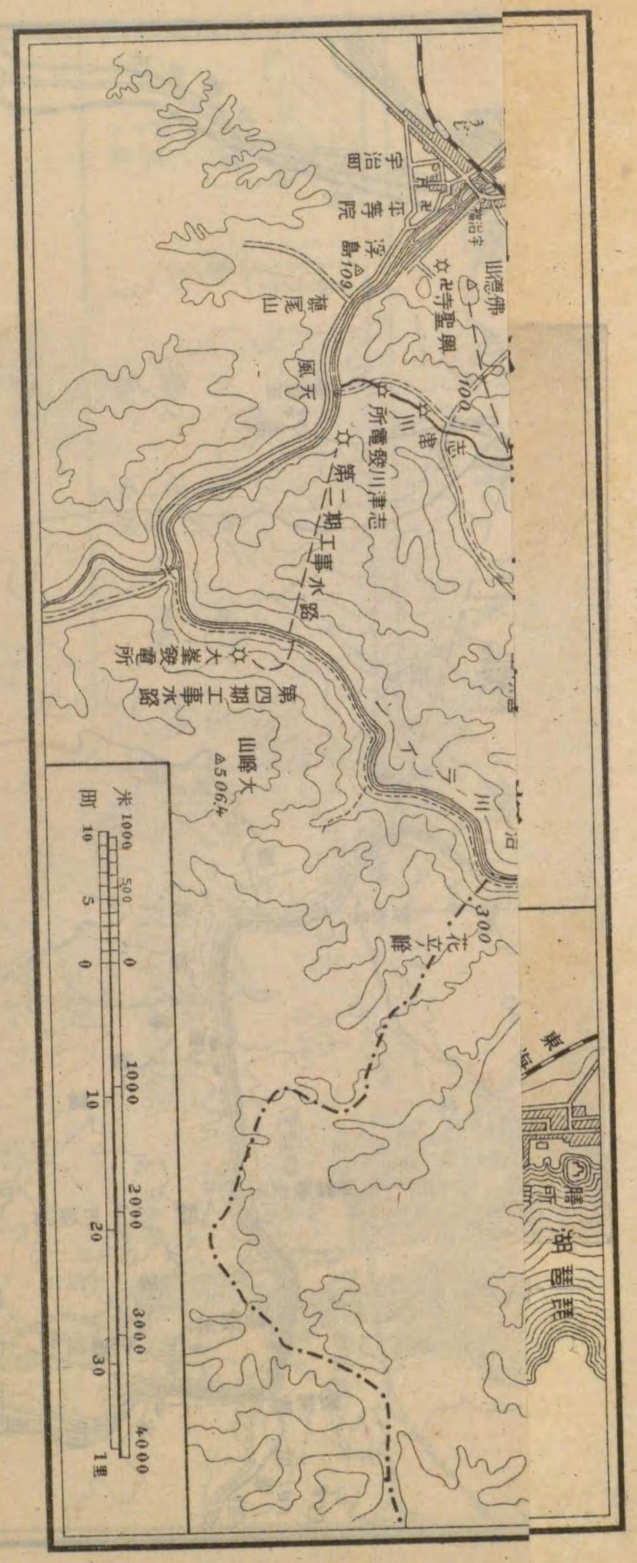
宇治川ライン探勝の順路

1　宇治——徒歩約四粁——堰堤——外畑（モーターボート）——南郷（自動車）
　　——石山寺（湖南汽船）——琵琶湖探勝

2　1の逆コース。

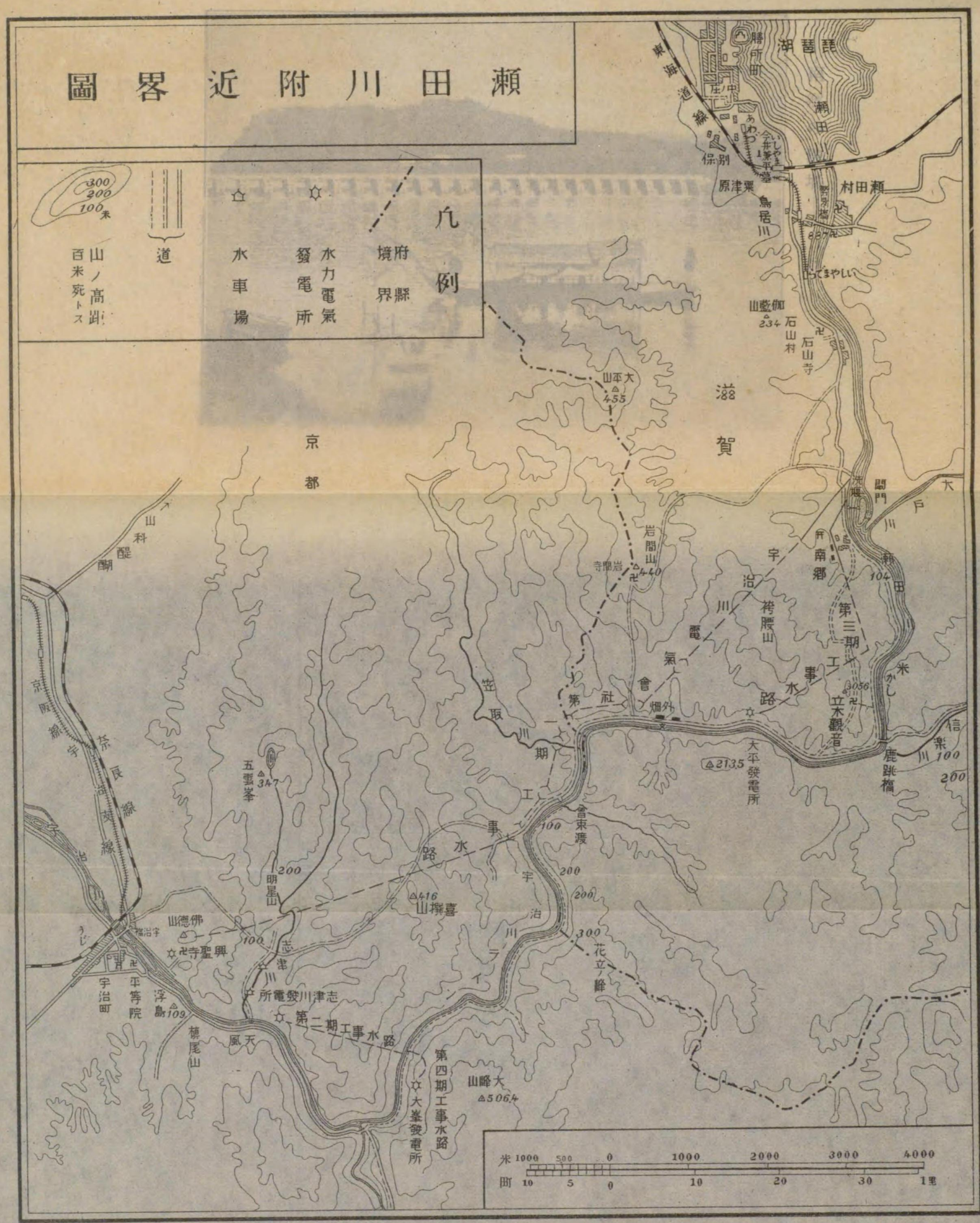
但しモーターボートは午後四時限であるからこの行程によると時間を束縛せられる憾みがあらう。

3　宇治より堰堤まで、宇治電社用のトロ線による便あるも、之は前以て、同社に交渉依頼しておかねばならぬ。



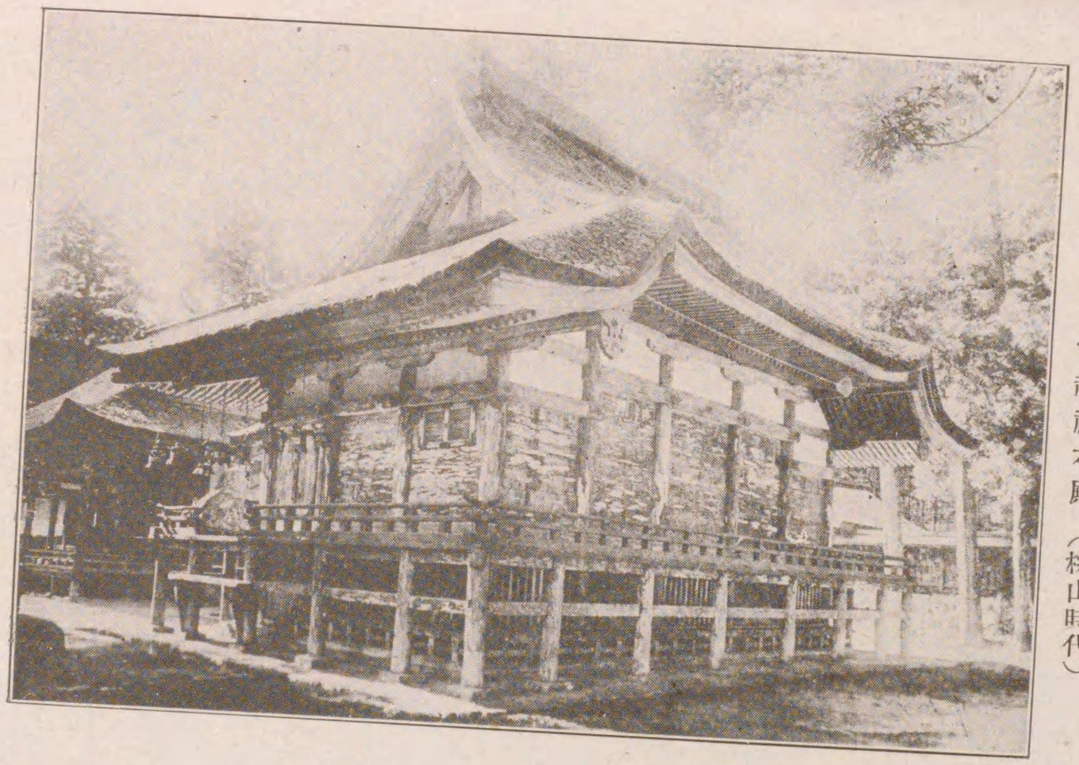
社に交渉依頼しておかねばならぬ。

宇治電社用のトロッコ線による便あるも、之は前以て、同

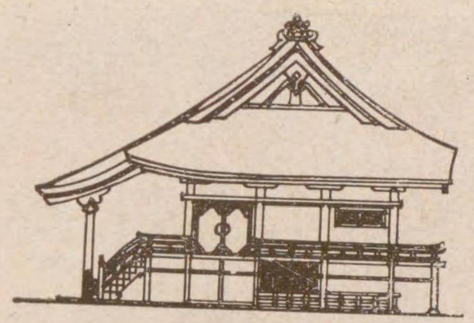


併せ字治に下る。斷崖絶壁、奇岩怪石、曲水狂亂。隱れた一名勝地。西の耶馬、南紀の瀞、東の寢覺に比す

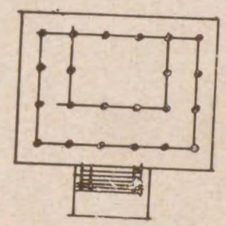
南郷の洗堰



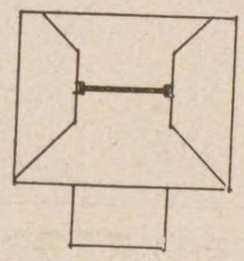
——日吉造——日吉神社本殿（桃山時代）



日吉造側面



日吉造平面



日吉造屋根伏

日吉造

一に聖帝（セイテイ）造ともいひ、神明造の正面と左右側に廂を加へ、四方に廻椽をめぐらしたもので、屋根は後方からみると、入母屋造を斷截した樣な奇拔な輪廓を描いてゐる。其の完成期は平安初期であるが、春日造等に比して餘程佛式趣味が濃厚である。

（四）坂本と比叡山

順路

一、京津電車大津終點——琵琶湖電鐵濱大津停留場——坂本停留場——日吉神社——延暦寺——比叡山——京都市電出町停留場（又は此逆）——（行程約十五粁）

二、京津電車濱大津終點——琵琶湖電鐵濱大津停留場——坂本停留場——來迎寺——西教寺——日吉神社——ケーブル——延暦寺——比叡山——ケーブル——八瀨停留場——出町柳停留場（又は其逆）——（徒步行程約十一粁）

來迎寺　滋賀郡下坂本村

戰國時代そのまゝの來迎寺

日吉馬場をずつと下ると、東方凡一キロばかりのところに白塀を廻した構が目立つて見える。昔ながらの來迎寺がそれで、諸堂も災火を免れて戰國時代の遺構を傳へてゐる。門は明智光秀の阪本城門、客殿は德川初期の傑作で、延暦寺の末寺である。

傳敎の開基、惠心の中興、水想觀を感ぜられた靈場と傳へ、數多い國寶中でも、巨勢弘高の十界圖、高階

隆兼の十二天像等は特に天下一品と稱せられ、例年八月中旬の虫干には拜觀者が多い。

西教寺　滋賀郡坂本村

豪壯を極めた西教寺

坂本の北二キロ、天台宗眞盛派の本山で聖德太子の開基にかゝり、山腹の臺地には本堂を始め豪壯を極めた、堂塔が相並んでゐる。その客殿は伏見桃山城の一部を移した。境内に明智光秀一黨の墓がある。

日吉神社　滋賀郡坂本村

——社格、官幣大社——祭神、大國主命(大宮)・大山咋の神(二ノ宮)——

延暦寺の鎭守、山王權現

本社は俗に山王權現といはれてゐる。舊書には素盞嗚尊の孫大山咋(オホヤマクヒ)の神が近江の日枝山に住したことがあるので、崇神天皇が勅した大山咋の神を山上に祀り鎭守の神となされたとある。

桓武天皇の時、僧最澄が佛教弘通を大三輪明神（大國主命）に祈つたことから、其の延暦寺を建てた時、大國主命を祭つて當寺の守護神とし、日吉大宮と稱し崇め、古來此山鎭座の大山咋神を二ノ宮と呼んだ。事

情此の如くで、日吉神社は久しく叡山延暦寺の鎭守であつたがため、天台僧徒の尊崇頗る厚く、社殿も初めは大宮・二ノ宮であつたが、七社となり、二十一社となり遂には百八社とも稱した。然し僧徒の私に設けた神が多いので古の明神ではない。思ふにこは延暦寺僧が純佛教の我國民性に合致せぬのを察し、例の時代思想たる本地垂跡(ホンヂスヰジヤクセツ)說によつて佛教の弘通を期したものであらう。明治維新に及び神佛混淆の禁で山王權現の號をとつて官幣大社に列した。

日吉行幸は後三條天皇に始まつたが以來屢々行幸啓のことがあつた。延元元年後醍醐天皇が坂本の行在所に居られた時、官軍の集らないのを憂へられて宸筆の御願文を大宮に奉られ、新田義貞も亦寶刀を納めて戰勝を祈つたことがある。

今の本殿は天正十四年（約三百五十年前）の建築で、本殿を日吉造・鳥居を破風鳥居（一名山王鳥居）といひ共に獨特の建築である。

本殿、攝社を合せて八棟は三橋と共に特別保護建造物になつてゐる。

本殿の南東數百米に末社、東照宮の一廓がある。その社殿は社前の權現橋と共に特別保護建造物である。

境内は東照宮を合せて凡三十五萬平方米、内約二十五萬平方米は古松老杉森々とした森で、綠したゝらんとする間に朱塗の殿樓が隱見し、溪流は淙々たる音を立てゝ流れ、夏尙涼しさを覺えしめる。

社前三橋附近は紅葉の名所として知られてゐる。

神輿振

鳥羽・崇德朝以後、延暦寺の僧徒が、やゝもすれば日吉の神輿を捨て去ることがあつた。これを神輿振といひ朝廷は唯神威をおそれて、共罪を正すことが出來ず、或は枉げて其の意に從ひ、或は之を慰めて神輿を還された。併し神輿振の横暴は織田信長が僧徒の兇暴を惡んで山寺を燒き大に殺戮(サツリク)を行つてからは全く止んだ。

延暦寺　滋賀郡坂本村

——宗派、天台宗本山——本尊、藥師如來——

王城の守護——三塔・十六谷の延暦寺

本寺は比叡山寺とも稱し、また園城寺が寺門といふに對して山門、南都の諸寺に對して北嶺といはれた。僧最澄延暦七年（約千百四十年前——最澄二十餘歳の時）こゝに上つて自ら藥師・阿彌陀等の像を刻み、堂を建てゝ安置した。これ今の根本中堂であつて延暦寺の創まりである。延暦二十三年最澄唐に赴き、天台宗を極めて翌年歸朝し、其の宗旨を永く此の寺に傳へた。これ實に我國に於ける天台宗の始である。最澄五十六歳で叡山に寂してからは、その弟子法燈をつぎ寺務をとり天台座主に補せられた。これが初代の天台座主で

ある。

山寺は歷代の尊崇頗る厚く自ら國家鎭護の靈場を以て任じ、所領多く財政豐かであり、平安時代には眞言宗と共に二大宗派として大勢力を有して居た。鎌倉時代に一宗派を立てた法然上人・日蓮上人・親鸞上人・榮西道元等の傑僧は皆ここで修業したもので、その宗界に於ける勢は推して察せられる。

僧兵は護法のためと稱して武士を養つたのが起りで、天台宗開基後凡そ二百年の時である。山法師が園城寺や南都などと屢々爭ひ、また上朝廷に對して意に滿たぬことがあると、日吉や祇園の神輿をかついで强訴した時代が一番勢力の盛な時で、三千餘坊と周圍六里餘の寺域とを持つてゐたといはれ、東山一帶の地もその勢力範圍であつた。かういふ鹽梅であつたから武家時代には一方の雄鎭として一巨侯の觀があつて、諸種の爭亂にあづかり、特に建武中興に際しては皇室の御爲つくす所が多かつた。卽ち元弘元年僧兵後醍醐天皇に味方して關東軍を防ぎ、延元元年正月には天皇の行幸あり、同年五月楠木正成湊川に戰死し足利尊氏京都を侵した時に天皇は再びここに行幸された。皇子護良（尊雲法親王）宗良（尊澄法親王）兩親王が天台座主に補せられ給ひしことを見ても此の間の消息がうかがはれる。又護良親王が大塔宮と稱せられたのもここの大塔にゐられたからである。

織田信長が京畿に勢を張つた時、僧兵は淺井、朝倉二氏にくみして信長をたふさんとしたので元龜二年に

信長が怒つて兵數千を分けて比叡山を攻め、滿山の堂塔を燒きはらひ、僧徒は長幼の別なく殺してしまつた。（約三千人）信長がこの一大靈場にかくまでの處置に出たのは、單に讐敵といふ以外に當時の俗惡腐敗の僧徒を憎む情から出たといはねばならぬ。これ今から約三百五十年前で、延曆寺の古刹・舊院は悉く盡き、古文書類も燒け、山門の勢力は失せてしまつた。

豐臣秀吉が立つてから之が再興に志し天正十七年に山門始めて復興した。德川家康父子もその志をついだが、家光の寛永七年（約三〇〇年前）に諸堂宇悉くなつてやゝ舊觀に復した。今の根本中堂・釋迦堂以下は皆これで特別保護建造物になつてゐる。

全山を東塔・五谷・西塔五谷・横川六谷の三塔十六谷に分ち、東塔はその中心で根本中堂が本堂である。

東　塔

根本中堂　當山最初の建立で、最澄等身の藥師像を本尊としてゐる。寶前の常燈は最澄が手づから燧をきり點じ今に滅せないと。こゝの建築を見るに外陣の床がやゝ高くて板を敷き、內陣は一段低めて石敷になつてゐる。これは講堂と同じ形式で密教建築の特長である。その石敷の奥まつた所へ須彌壇（シユミダン）をおき其の前に護摩壇を具へ左右の壁に兩界曼荼羅をかけてゐる。

堂前には南北に竹臺がある。これは開祖が天台山から持ち歸つた篠を植ゑたものであると。

大講堂　根本中堂の南西につゞく、小高い所にある。もと嵯峨上皇の御願で建てられたもので、

本尊は大日如來、一山事ある時に使つた大集會場である。

戒壇院　大講堂の西一段高い所にあり、本尊は釋迦・文殊・彌勒である。僧徒にして大乘の妙戒を受けるものは皆この壇に昇つたのである。弘仁年間僧圓頓の戒を受けたのがそのはじめである。

明王堂　無動寺谷の本堂で根本中堂から南一キロ餘にある。相應和尙、滋賀郡葛川の瀧に浴して生身の不動を拜し抱き奉れば一本の靈木であつた。卽これを以て不動明王を刻みここに安置したものであるといふ。

大乘院　明王堂の南東百米、眞宗の祖親鸞上人が慈鎭和尙を師として修學した寺で名高いそば喰木像がある。

紀貫之の墓　大乘院から谷を隔てて西數百米に裳立（モタテ）山がある。此處に歌聖貫之朝臣の墓がある。今から二十年ばかり前初めて發見せられたもので、爾來參詣の人も出來、楓樹など植込み手を加へて今日の體裁を見るに至つた。

貫之は平安朝時代の文學者で書をよくし、また最も和歌に長じ、古今和歌集の撰者として知られてゐる。醍醐・朱雀兩帝に仕へ土佐の守となつたことがある。かの國文學上に名高い土佐日記は承平四年任滿ちて京に歸る時の航路紀行である。

人はいさ心もしらず故郷は　花ぞむかしの香ににほひける　貫之

辨慶水　戒壇院から西塔へ行へ途中に辨慶水がある。武藏坊辨慶が千手堂に參籠の際每日ここの

水を汲んだといふので此の名がある。縦六〇糎、横二米許の石の船を設け、山ぎはから出る水を湛へたもので、此の水船の上の屋形内の彫物は左甚五郎の作であるといはれてゐる。

西塔

釋迦堂　西塔の本堂で一名轉法輪堂ともいひ釋迦の像を安置してゐる。最澄の弟子、第二代座主圓澄の建立、特別保護建造物である。

浄土院　傳教大師の御廟所。

になひ堂　法華堂と常行堂とは渡廊下で相連つてゐるから此の名がある。

辨慶控堂　辨慶居住の址であるといふ。

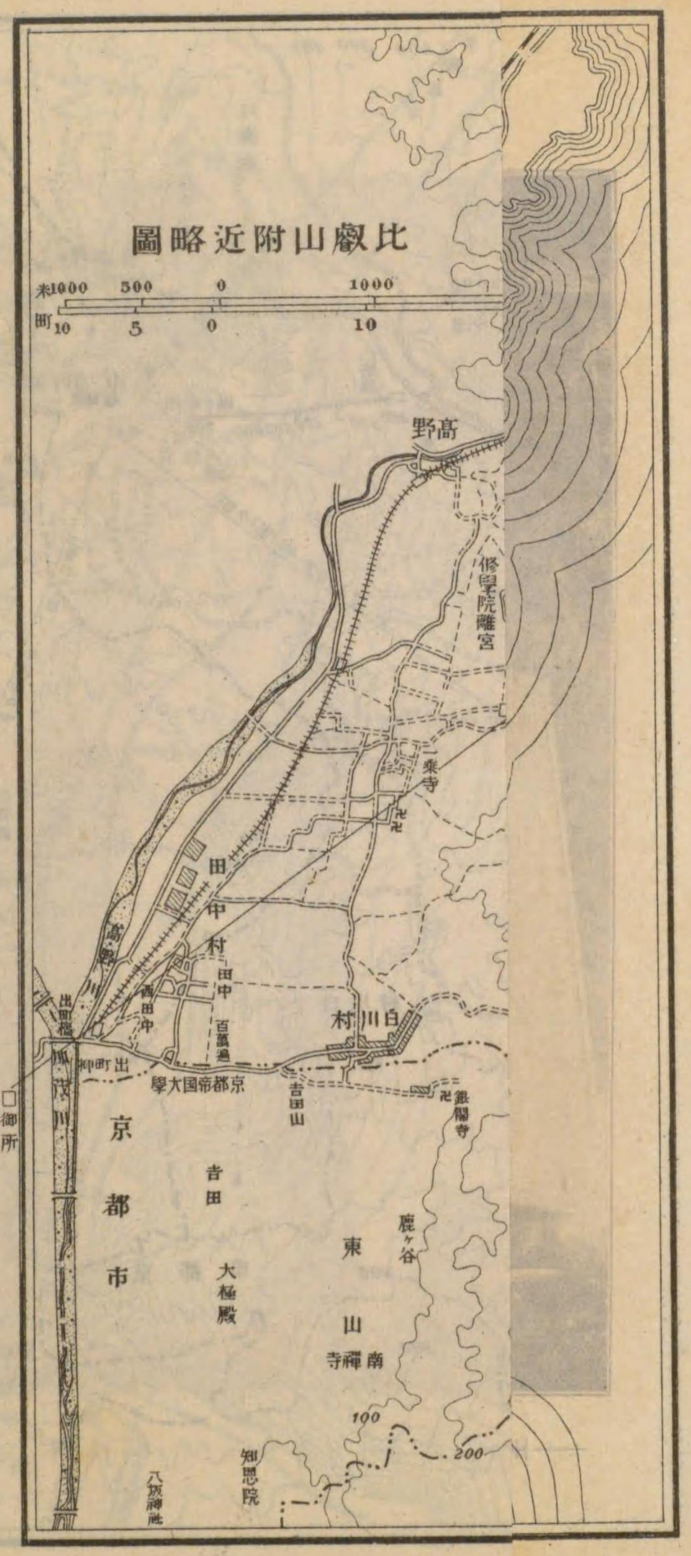
瑠璃堂　山中第一の古建築物。

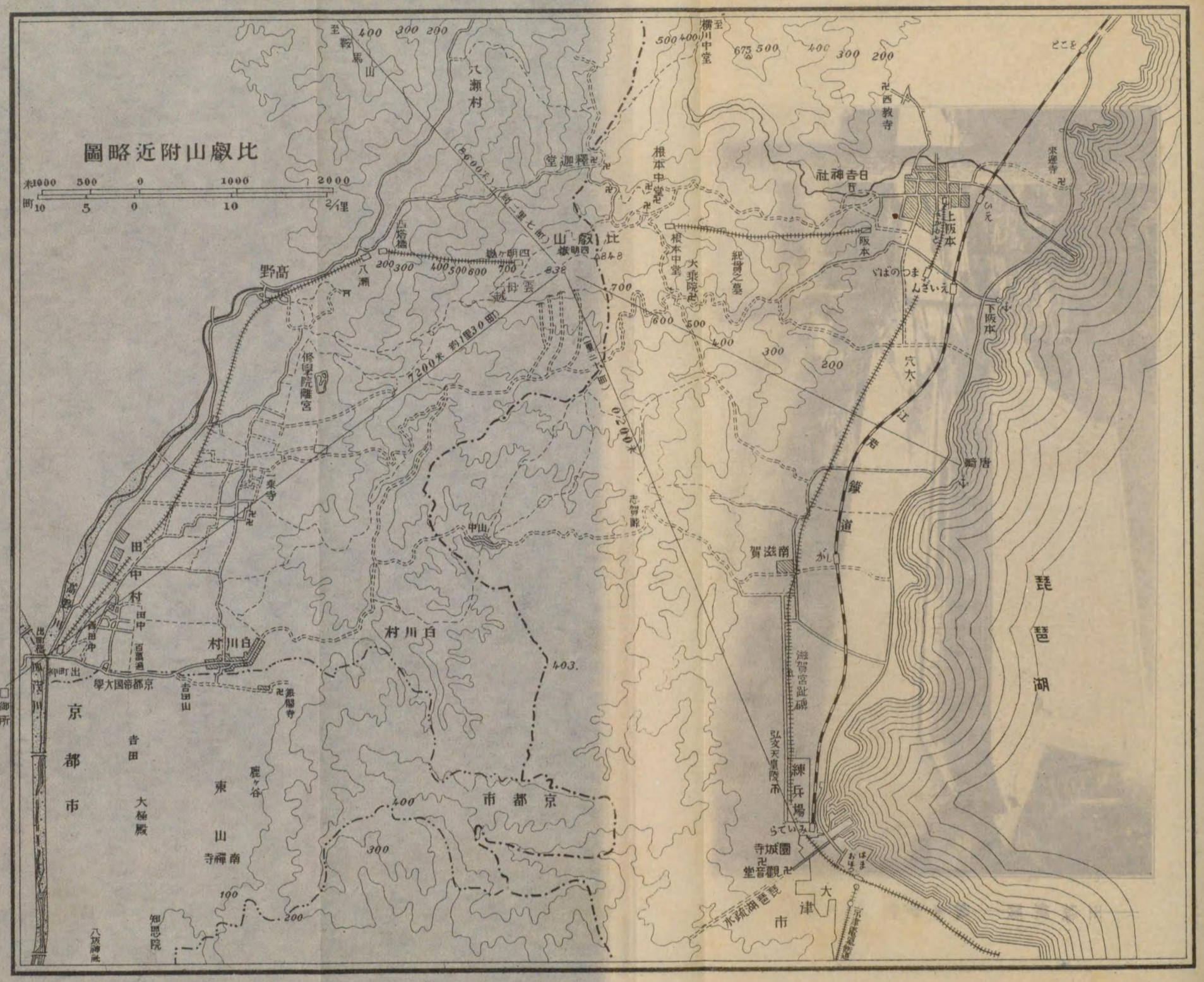
テント村　釋迦堂から大原へ下る途中にテント村といふのがある。夏時此所でテント生活をする人が多い。

横川（ヨカハ）

瑠璃堂から峯づたひに北西三キロで慈覺大師の開基になる横川中堂に至る。中堂に接して北に四季堂南に惠心院がある。横川は叡山としては僻在してゐるが慈惠・惠心の廟、道元・日蓮の舊蹟など修學冥想の高徳者が多く蹟を殘してゐる。

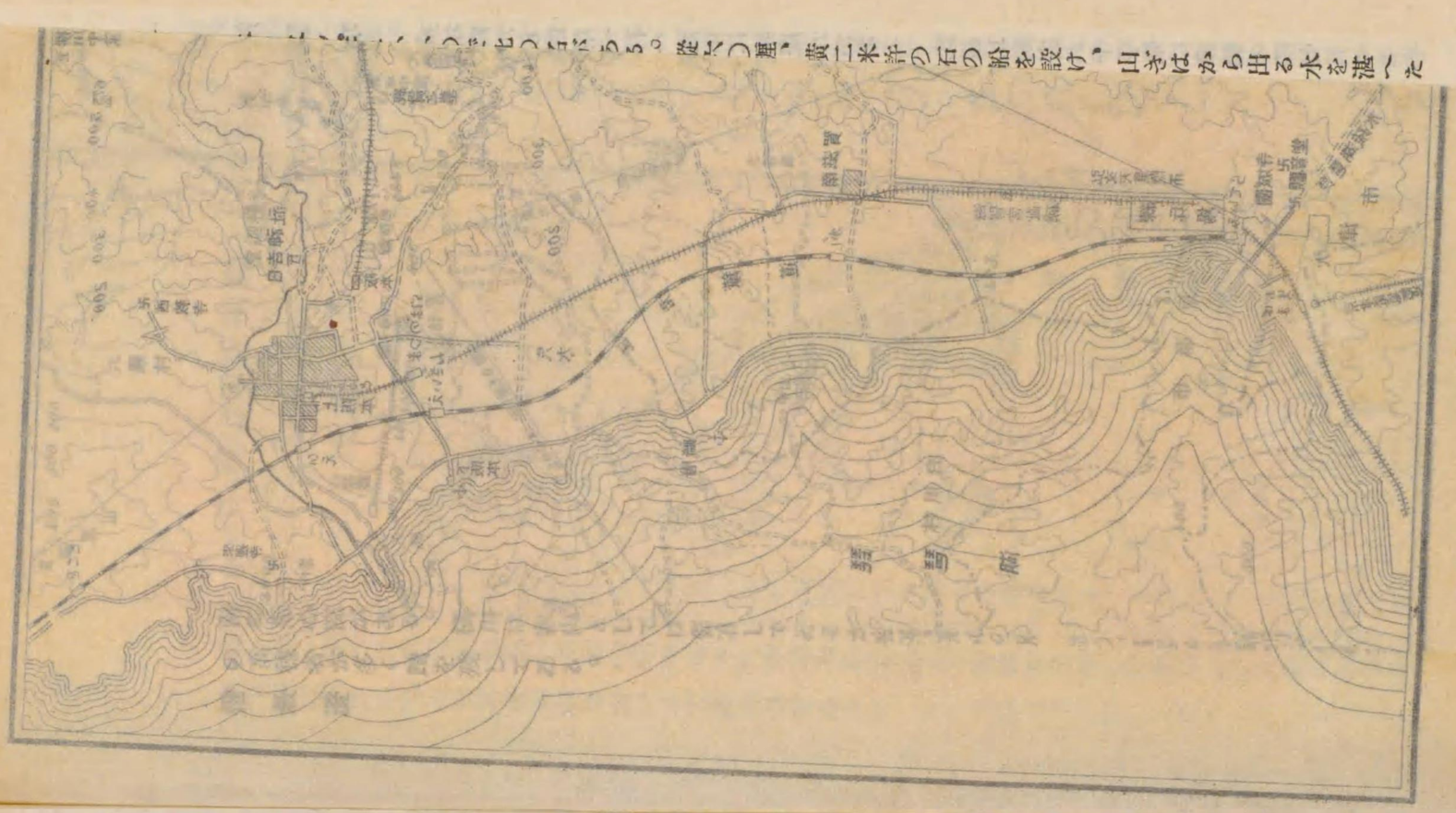
僧最澄



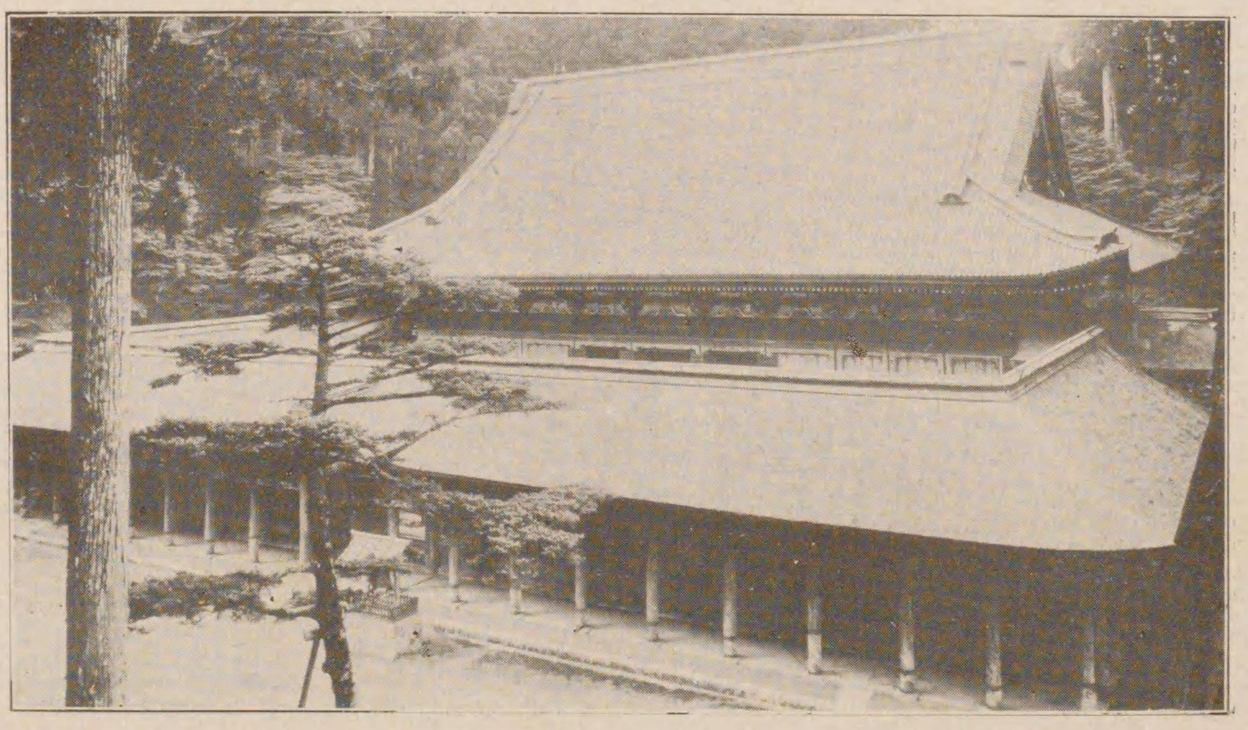


瑠璃堂から峯づたひに北西三キロで慈覺大師の開基になる横川中堂に至る。中堂に接して北に四季堂南に惠心院がある。横川は叡山としては僻在してゐるが慈惠・惠心の廟、道元・日蓮の舊蹟など修學冥想の高德者が多く蹟を殘してゐる。

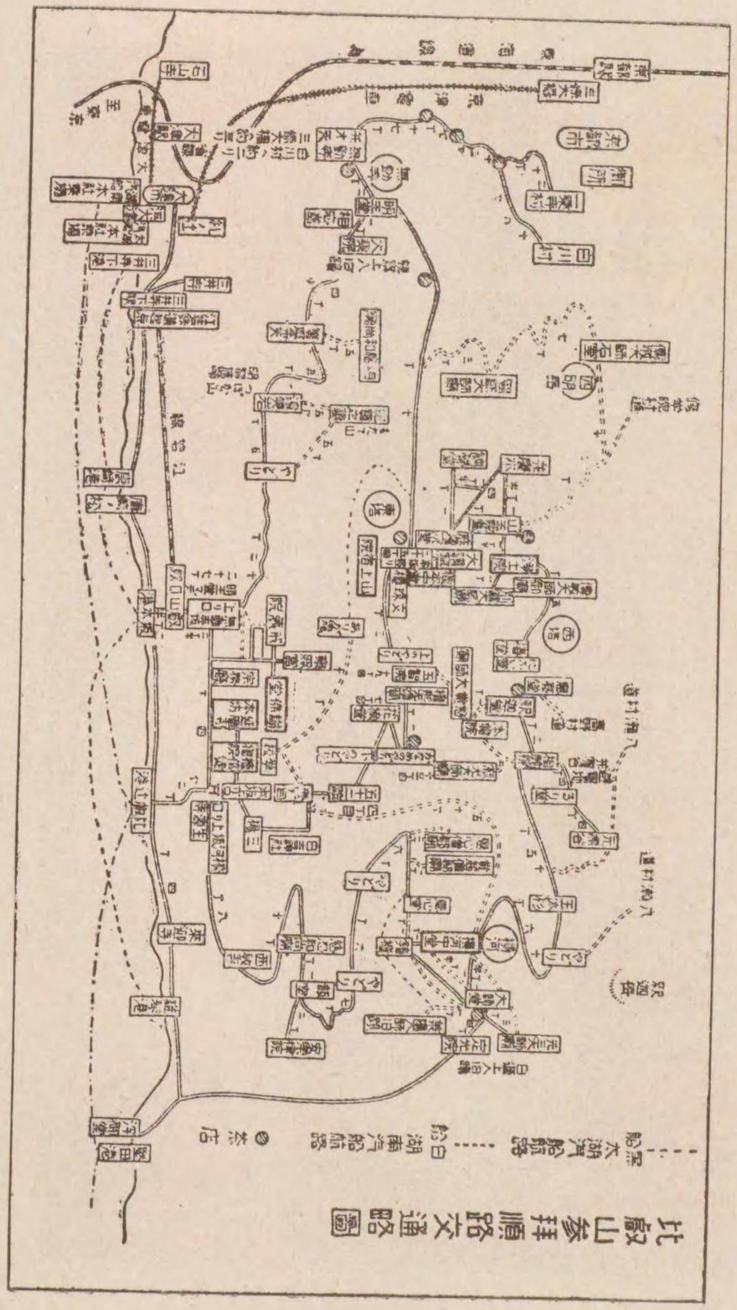
僧最澄



陸六つ屋、費二米許の石の船を設け、山ぎはから出る水を湛へた



——玉城鎭護——根本中堂（江戸時代）



姓は三津氏、神護景雲元年（約千百六十年前）滋賀郡阪本村、今の生源寺の地に生れた。父百枝に初め嗣がなかつたが比叡山の神に禱つて生れたのが最澄である。七歳から學を受け聰慧（ソウケイ）絶倫年十二で出家し、延暦寺に天台宗を開いたのは三十九歳の時であつた。弘仁十三年五十六歳を以て比叡山にて寂し、淨土院に葬つた。

比叡山　滋賀郡坂本村

八百四十八米——眺望絶佳の比叡山——

全山花崗岩で頂上に少しく古生層の岩石を冠つてゐる。頂上の四明岳は八四八米四望曠々として、京都市街・鴨川・琵琶湖・近江富士（三上山）など一々指される。稍西に下つた所に將門岩がある。平將門は嘗てこゝより平安京を見て逆意を起し、蒲生君平は江戸城の壯麗と京都御所の荒廢とを思ひくらべて「ひえの山、見おろす方ぞあはれなる、けふ九重の數したらねば」と詠んだのはよい對照である。山腹に延暦寺、ふもとに日吉神社がある。又山を北西に下る數百米にしてテント村と云ふ地域がある。盛夏の候外人の天幕生活をなすものが多い。

登山路

一、京都からするもの

1　吉田から白川越に出で北折して四明岳に至るもの。
2　田中一乘寺村をへて叡山の南西麓で白川からの登路にあふもの。
3　今出川から高野川に沿ひ修學院離宮傍から雲母坂をへて千手堂に出るもの。
4　高野・八瀬の諸村を經、西塔橋を渡つて、西塔釋迦堂に至るもの。

以上の中1、2が最も近くて便である。

二、大津からするもの

1　大津の北八粁許に穴太村がある。ここから登山路につき岩角をふんで大乘院に至り、更に登ること二粁で根本中堂に達するもの。

2　坂本驛から日吉神社を右に見、峻しい坂を上ること二・八粁で根本中堂に出で、更に二・八粁で頂上につくもの。

近年兩方面共登山電車の開通を見た。一つは西塔橋を經て頂上近くまで行き、一つは日吉神社附近から根本中堂下までで尙この兩ケーブル間に架空索道も架設されてある。（ケーブルについては生駒ケーブルの項參照）

京阪宇治線

一、山科、醍醐
二、宇治の茶どころ
三、鷲峯山

一、山科、醍醐

順路

一、六地藏停留場——日野藥師——下醍醐——上醍醐——六地藏停留場——
（行程約十六粁）
二、六地藏停留場——日野藥師——下醍醐——朱雀帝陵——醍醐帝陵——隨心

院――勸修寺――毘沙門堂――大石良雄邸址――山科御坊――天智帝陵
――京津線みさゝぎ停留場――（行程約十三粁）

山科盆地

京都盆地中で東山の東麓に別に六地藏附近から北東に展がる醍醐山科一帶の地をいふ。山科川は此の地の水を聚めて桃山御陵下で宇治の本流と相合する。地は京洛の雜閙を離れて野趣滿ち史蹟の訪ふべきものが多い。

法界寺

六地藏停留所より北東二粁半

――宗派、眞言宗――本尊、阿彌陀如來――

日野の藥師

弘仁十三年（約千百年前）參議藤原家宗其所領日野に赴き、傳敎大師から贈られた七寸の藥師像及貝多羅葉藥師經を安んずるため、寺塔を創立したのが起りで、家宗の死後、藥師堂を建て觀音堂・五大堂を增建した。永承六年三月其繼嗣資業が日野の山莊を退いて、群書を渉獵（しょうれう）して法界寺文庫を殘した。織田信長の山門

を攻めた時に其餘波を受けて、阿彌陀堂を殘すの外諸堂は燒失してしまつた。其後藥師如來や十二神像は此の堂に安置された。

阿彌陀堂（特別保護建造物）

記年から見ると鳳凰堂に先立つ一年であるが、手法は少し後れて見える。何れにしても藤末時代の代表建築群の一に數へらるべきものである。內陣の折上組入格天井、外陣の化粧屋根裏、太い柱、三斗の組物、外部の赤塗に對し內部には布を卷いた柱に佛菩薩・寶相華（ほうさうげ）・唐草（からくさ）を描き內陣の天井にも寶相華を描き、小壁に天人・樂器を現はせるなど、此の時代の特長をよく表はし、平面の五間であること、內一間を內陣とし其間に區別を設けぬことは、阿彌陀堂建築の模範的のものである。檜皮葺四注屋根が勾配の緩やかで氣持の良いことも此の堂の特色である。

佛　像

本尊阿彌陀如來

佛師定朝の傑作で鳳凰堂の中尊とともに、此の時代の代表作と稱せられてゐる。

藥師堂（特別保護建造物）

元の御堂は天正年間に炎上した。現在の堂は大和の龍田から移建したものである。本尊は傳敎大師自作の藥師如來で、俗に乳守の藥師と稱し、其脇壇にある十二神將と共に國寶である。

親鸞上人產湯の井

眞宗の開山親鸞上人は日野有範の子で、境内に其產湯の井戸がある上、藥師堂の後方に別堂が建つてゐて上人誕生の地を記念すべく、阿彌陀如來の外に上人袴着の像が祀つてある。日野家累代の墓は其後の丘上にある。

醍醐寺　宇治郡醍醐村、京阪電車六地藏停留所北東三粁

――宗派、眞言宗醍醐派本山――本尊、藥師如來――

修驗道の醍醐山

貞觀十六年（約一〇六〇年前　理源大師聖寶の建立した寺で、古義眞言宗に屬し山上と山下とに堂宇があつて、上醍醐、下醍醐といはれて居る。昔は山上と山下とに宏壯な堂舍・僧坊が甍を列べて居たが、世の變遷に伴ふて次第に其數を減じた。

醍醐寺は一山の總稱で智恩院や、大德寺のやうに山内に之が本寺と云ふ特別の寺がある譯でない。三寶院・理性院・無量壽院・金剛王院・報恩院を醍醐の五門跡と稱して、高僧が出て本寺の座主を兼ね一山を統理した。室町以後になると三寶院から賢俊や滿濟のやうな幕府と特別の關係ある人が出て、座主の權を同院にて占め

他の寺院は自ら末寺の觀をなすやうになつた。隨つて開祖理源大師が役小角の意志を受けたと稱する修驗道山伏の管理も此の三寶院が引受けて、山上の大師堂に於て先達及び信者の人々を集めて修法を行つて居る。天台宗の聖護院と共に江戸時代以後斯道の道場である。

下の醍醐

三寶院

――本尊、彌勒菩薩――

當山第七世勝覺が座主であつた時建立した寺で、永久年間に落成した。三寶院とは義範・定賢・範俊の三師より密法を受けた恩誼を記念するため勝覺の名づけたものであつて、第九世定海は國家鎭護のために灌頂堂を院内に建てた。鳥羽天皇は本寺を勅願寺とされた。足利義滿は第二十五世滿濟を己が猶子とし醍醐寺の座主とした上、一山を檢校せしめ准三后に列した。之より三寶院が主として醍醐寺座主を兼ぬることゝなつた。文明の火災で燒失して以來一時衰運に向つたが、義演准后の時豐臣秀吉の信仰を得て諸堂宇は再び昔の形に復することが出來た。今の庭園及建物は其時代の遺物である。

諸堂　特別保護建造物

五重塔　天曆元年（約九百八十年前）の建立で方三間、瓦葺、藤原初期の斗拱（クミモノ）と壁畫の胎藏界曼陀羅・眞言祖師像は其巧緻と精妙なる點に於て當代一流の遺品たる價値を存して居る。

三寶院唐門　小規模ではあるが豪放なる秀吉を偲ばしむる浮彫の桐の大紋は、豐國神社の唐門にある

蛙又と共に桃山時代建築の双壁と稱せられる程、優秀なものである。太閤桐を最も明瞭に說明したものは單り此の門あるのみである。

三寶院殿堂　慶長三年座主義演に命じて八年の日子を費して竣工した建物で、書院造の典型である。併し西本願寺の書院と違つて幾分寢殿造の俤を止めて居る。玄關・葵の間・秋草の間・表書院・宸殿・大庫裡・純淨觀・本堂等より成り、前面には秀吉好みの庭園あり、內部襖の裝飾及室內の變化限りなき中に能く統一を保ちたる技巧は此の建築の最特色とする所である。

金堂　豐臣秀吉が紀州湯淺から移したもので、藥師如來を安置。單層入母屋造で鎌倉時代の特色をよく表はして居る。

國寶と古文書

彫像・佛畫・經文其他古文書類を合はせると四千餘點もあつて、いづれも藝術・史實の標本となるべき優秀なるものゝみである。古文書は凡六百の函中に藏せられ、東寺の百合文書、東山御文庫と共に最も貴重なものである。滿濟准后日記(マンザイジュゴウ)は室町時代を語り、義演准后日記は戰國時代を語る大日本史料の最上なものである。後奈良天皇の御下賜遊ばされた宸筆の御願文は、拜觀者の誰人をも感泣せしめる御仁慈の溢れである。

豐臣秀吉醍醐の花見

寺の境內及附近は老櫻繁茂して通路を覆ひ、庭上に錦を翳して居る。三百年前豐臣秀吉が催ふした豪

奢な醍醐の花見を偲ばしめるものは、雄大な大閤桐の幔幕と滿開の櫻樹が金箔の上へ浮き出して居る數雙屏風の書である。

上の醍醐　六地藏停留場から凡そ七粁强、下の醍醐からけはしい坂道、凡そ四千米で上醍醐につく。標高四百五十米の山上、鬱蒼たる全山の要所々々に古堂宇の建ち並ぶ靈域として名高い。

清瀧社　當山の鎭守、拜殿は桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺で、東山時代の宮室建築の好典型として特別保護建造物。

閼伽井　(清瀧社拜殿の東下にある)貞觀の昔、聖寶理源大師當山開創の折、白髮の老翁があらはれて溪底の水を飲んで「醍醐味なる哉」と嘆賞した遺跡と傳へ、爾來一千有餘年、滾々としてつきず、病者此靈水を飲めば病忽ち癒ゆと傳へてゐる。

十一番の札所、准胝堂　本尊は准胝觀音(ジュンテイクワンノン)を安置、西國禮場として四時參詣者がたえない。こゝから第十二番の札所岩間寺迄は凡そ六粁ある。

ぎやくえんももらさですくふ願なれば　准胝堂はたのもしきかな。

藥師堂　單層、屋根入母屋造、檜皮葺、會理(エリ)作の藥師像を安置。藤原末期の建築で其蛙又は宇治神社のものとゝもに日本三蛙又と稱する逸品である。特別保護建造物。

經藏　桁行三間、梁間二間、單層、屋根四注造、柿葺、鎌倉時代(建久六年)俊乘坊重源の建立で、

天竺様と稱する奇巧の技術をもち、今特別保護建造物で、宋版一切經を安置してゐる。

五大堂　五間四面、單層入母屋造、本瓦葺、其五大尊、軍荼利（グンダリ）、大威德は會理の作で、他の古像、不動・降三世（コウサンゼ）・金剛夜叉は慶長中京都で燒失した。堂は桃山時代の建築（慶長十一年再建）で、秀吉が建てた京都の大佛殿の建築を想像される樣な大建築である。特別保護建造物。

如意輪堂　如意輪觀音及千手觀音像安置。

祖師堂　聖寶・空海・聖賢の像安置。

朱雀（スザク）天皇（第六十一代）醍醐陵　京都府宇治郡醍醐村、六地藏停留場北約四・五粁

陵上方一丈餘、石を以て之を築く、陵域三百六十坪。

第六十一代の天皇で御名は寛明、醍醐天皇第十一皇子であらせられる。御即位の當時は政綱既に弛み、京都と地方との氣勢通せず、加ふるに旱水風蝗の災害屢々いたつて群盜が横行した。殊に山陰・南海の地は海賊また多く、公私の船舶にして掠奪せられるものが少くない、また地方にあつては豪族漸く興起して政令四方に及ばず、遂に天慶年間に及んで平將門・藤原純友等の變となつた。天皇は兵を派して之を討たしめ、幾干もなくして亂は平定したけれども、世態全く一變せんとするのは兆は、實に茲に萠した。天慶九年四月位を村上天皇に讓つて朱雀院（京都三條の南、朱雀の西、方四町を占めた擴大なる境内であつたやうである）へ移

らせ給ふた。天皇は政治上にも非常に寛仁を尙ばれた。それが動ともすると寛に過ぎるの嘆もある程であつた。藤原忠平が密に之を諫め奉つた處が、天皇は「朕これを先帝に聞く、卿の先人嘗ていひしに政は琴を張るが如し大弦急なれば小弦絶えんと、朕若し嚴急にせば下民は堪へざるべきなり」と宣ふた。また御服御常膳を減じて下民に仁惠し給ふたことも屢々であつた。

醍醐天皇（第六十代）後山階陵（ノチノヤマシナノミサギ）　京都府宇治郡醍醐村

寒夜に御衣をぬがせらる

圓塚で樹木が多い。陵域周圍百四十四間九分。

第六十代の天皇で御名は敦仁（アツヒト）、宇多天皇の長子であらせられる。天皇は殊に聰明にましまし、勵精以て治を圖り、百姓をあはれみ、寒夜御衣を脱して民のうえことごゆる苦みをしのばれたことは普く人口に膾炙する所である。また常に群臣奏對する毎に顏を和げて之に接し、勉めて其言を容れやうとし給ふた。此の時に當り、畿外の地は國司政を失し、武門漸く興らんとする崩を生じ、騷亂が諸國に起つたけれども、京畿は無事太平を極め、庶民は其の堵に安んじ世これを延喜の治と稱する。かの左大臣藤原時平と右大臣菅原道眞との政爭から、道眞が太宰府に左遷されたのもこの朝の事件である。

隨心院　東海道線山科驛南東南七〇〇米

——宗派、眞言宗小野派大本山——本尊、如意輪觀音——

隨心院門跡

寛仁年間（約九百年前）仁海僧正の草創で曼荼羅寺と稱したが、應仁・文明の大亂に燒失し五世增俊阿闍梨に因つて改築され隨心院と改稱した。後堀河天皇の祈願所となつて以來、代々攝家より入寺し法燈を相續することになつた。

小野小町

當院は小野小町の宅址だと傳へられ、堂後の老松の下に小町の艷書を埋めたといふ文塚があり、藪の中に小町の化粧井、化粧橋がある、西の藪に深草少將の通路といふ所がある。昔此處は深草への通路であつたが、豐公伏見在城の時、願ひごとがあつて此の路を通つたものは一人も叶はなかつたといふので、緣起が惡いといつて廢道にしたとのことである。

着色、愛染曼陀羅圖・木造阿彌陀如來像は國寶である。

勸修寺（クワンジユジ）　京都府宇治郡山科町

——宗派、眞言宗——本尊、千手觀音——

勸修寺門跡

醍醐天皇母后の御本願によつて延喜四年に創建せられた眞言宗の名刹で龜甲山と號する、皇室及藤原氏の歸伏厚く堂塔伽藍壯麗を極めたが、應仁の兵火に罹つて燒亡し、加ふるに豐臣秀吉の旨に忤（サカラ）ふことがあつて大に寺領を削られ、寺門一時頗る衰退した。後德川氏になつて寺領を復し堂宇を再建し略舊觀に復した。

當寺は後伏見天皇の皇子寛胤法親王以來世々法親王の住院で、勸修寺門跡と稱し、維新の際には二品入道濟範親王が御在住遊ばされたが、勅して復飾の宣旨を賜ふた。即ち山階宮晃（アキラ）親王であらせられる。

庭園の池水は延喜式に載せられて居る栗栖野氷室（クルスノヒムロ）の池であつて、泉石の布置、亭樹の結構は其の當時海內無双と稱せられたものである。後秀吉の時著しく縮小せられたけれども、尙舊觀をうかがふことが出來る。

今の堂宇中、宸殿・書院は元祿の頃、明正院の舊殿を賜ふたもの。本堂は寛文の頃皇后の內侍所を賜ふたもので其の書院は特別保護建造物である。當寺の什寶中勸修寺曼陀羅は白鳳時代のもので中宮寺曼陀羅につぐ傑作、殿內土佐光起の襖繪とともに國寶に指定されて著名である。

大石良雄邸址　京都府宇治郡山科町

山科御坊の南西凡そ二粁、西野山にある邸は茶園となつて居たが、明治四十三年大石二百回忌の時に際し記念公園とした。此の地は伏見撞木町・京都東海道等の交通の要衝に當る。遠謀深慮の大石が江戸よりの注進其の他を考へ、苦心を重ねた閑居の地と思はれる。

花山元慶寺（グワンギヤウ）　宇治郡山科町字花山

――宗派、眞言宗――本尊、藥師如來――

花山天皇の御遁世所

一に花山寺ともいふ。陽成天皇降誕の際母后藤原高子の發願により草創、元慶元年堂宇竣成したので、其の元號を寺名として僧正遍照がこれに住した。

寛和元年花山天皇弘徽殿の女御（藤原忯子）を喪ひ給ふて痛く世をはかなみ給ひしをり、右大臣藤原兼家元慶寺の僧嚴久をして出離遁世のことを勸說せしめ、寛和二年六月二十三日の夜其の子道兼をして潛かに宮中より元慶寺に伴ひ奉らしめ、劍璽を兼家の女諟子女御の生み奉つた圓融天皇の皇子懷仁（カネ）親王に傳へ奉つたことは、史上に著明なる事蹟である。花山天皇の御諡號は實に此の寺號から出たのである。

本堂には本尊藥師佛（僧正遍照作）を安置し、脇壇に花山天皇の宸影を奉安してゐる。僧正遍照の墓は本堂の南二百米餘の處に在る。

山科御坊　山科町東野、山科驛の南一粁

――宗派、眞宗本派本願寺別院――本尊、阿彌陀如來――

本願寺發祥の地

文明年間（約四百五十年前）本願寺八世蓮如上人の開いた寺で、蓮如は祖師堂及阿彌陀堂を建てたが、一旦大阪に隱棲し再び此處に歸つて、明應八年三月二十五日示寂した。宗祖親鸞の開創した淨土眞宗は途中で衰微してしまつたが、蓮如の熱誠と雄辯に依つて頽勢を挽回し、其繼嗣實如・證如に至つて益々興隆し、五十三年間本山として宗務を統轄し、隱然大諸侯たるの富を得る基礎をかためた本願寺發祥の地である。天文以後天台宗と合はず、法華宗と反目するに至つて、彼等のために燒打に逢ひ、證如は本山を大阪に移し石山本願寺と稱し、其後久しく荒廢のままであつたが、享保十七年住如北山別院の舊堂を移して之を再興した。

蓮如上人の墓

明治十五年朝廷より慧燈大師の諡號を賜はつた蓮如上人の墓は、當寺の北西二五〇米の所にあつて丘狀をなし、周圍に八角形の石垣を繞らし前面に拜堂があり、丘上は老樹鬱蒼として居る。

出雲寺　山科驛前

——宗派、天台宗——本尊、毘沙門天——

毘沙門堂

寺名を知らない人はあるが毘沙門堂と云へば殆ど知らない人はない。傳敎大師の開基で其自作の像を安置して本尊とする。もと叡山の別院であつたが、家康の政治顧問として有名な天海が之に住することになつてから、大いに伽藍を修理し其法嗣公辨法親王の入寺以來、毘沙門堂門跡と稱し、當寺の住職は代々日光輪王寺の宮の兼ねらるることになつた。體のよい幕府の朝廷監視所兼秘密相談所であつた。

仁王門・本堂・中門・廻廊・方丈・御成門・經藏・寶藏・鐘樓等の宏壯な建物が備つて居る上に、景勝の地を占め隱れたる天國である。

優秀なる國寶極めて多く、其中でも洞院公定日記二卷は太平記の作者を說明する最有力な資料で、青磁鳳凰耳花瓶は我國の陶器を代表する逸品であり、豐公遺愛の夏茶碗は細川幽齋の卽詠に依つて小姓の死を救ひ得た歷史附のものである。

長福寺　山科町竹の鼻

——宗派、眞宗大谷派本願寺別院——本尊、阿彌陀如來——

東御坊

享保十七年眞如の時、蓮如の遺跡である此の土地へ、西本願寺の別院を建てることを許されたので、京都から其寺坊の長福寺を移して、元文二年三月落成した。後庭小丘上にある陽秋亭はもと蓮如の幽棲して居た南殿を移したと傳へられる。蓮如の遺趾は寺の東方五〇〇米の處にある。

寺の近くにある蓮如の墓は、寛文以來其所屬を爭つて居たが、今は兩本願寺の共有である。

天智天皇（第三十八代）山階陵（ヤマシナノミサヽキ）　京都府宇治郡山科町字御陵

大化の新政を布き給ふ

延喜式には陵域東西十四町南北また十四町とある。第三十八代の天皇で諱は中大兄皇子、初め葛城皇子と稱せられた。舒明天皇の嫡子であらせられる。

未だ皇子であらせられた時、蘇我入鹿の頗る專横なるを憎み、ひそかに藤原の鎌足と某つて之を除かんと

し、蘇我倉山田石川麿の女を納れて妃とし以て援とされた。會々皇極天皇の四年六月三韓進貢の事あり、天皇大極殿に御し、入鹿も亦朝服して入つた。これを機として鎌足と共に入鹿を正殿に誅し、その父蝦夷も尋で誅せられた。既にして天皇位を皇子に傳へんとの志があられたが皇子は辭して從ひ給はず、密奏して孝德天皇に傳へんことを請はれた。皇極天皇嘉納し給ひこゝに讓位せられた。そこで皇子は立つて太子となり天皇を補佐して改革の政を布かれた。所謂大化の改新は太子と鎌足との畫策せられた所である。既にして齊明天皇が再祚せらるゝに及びまたその太子となられたが、天皇の崩御後即位せられた。天皇御在位中意を治政に注がれいろ〳〵の御治績を擧げられたが一面この朝に神功皇后の征韓以來屬邦であつた朝鮮が全く我が國と離れてしまつて、唐の配下に屬してしまつたといふ事實もある。

追分　京都府宇治郡山科町字追分

西國の諸侯去就に苦む

東海道と奈良街道との分岐點であつて、德川時代に西國の諸侯が參覲交代の時、此處より直に西を指して京に入るべきか、南して伏見に出で淀川を下つて大阪に出づべきかと、去就進止を決するに苦心した所であつた。蓋し京に入つて謁を朝廷に請ふならば幕府の猜忌を免るゝ能はず、彼等は相率ゐて此處から馬首を南

に旋らし、以て其の身の安全を謀つたとの事である。

逢坂山

逢坂山は標高三百二十五米を有する坂路であつて東海道の要衝に位する。桓武天皇平安奠都の後此處に關所を設けて行人を監査した。始め伊勢の鈴鹿、美濃の不破、越前の愛發（アラチ）を三關といつたが、是に至つて不破を廢し鈴鹿、愛發、逢坂を稱して三關といつた。

逢坂の坂路を北に下ると左手の方に蟬丸神社がある。後選集に

逢坂の關に庵室を作りて住み侍りけるに行きかふ人を見て

これやこのゆくもかへるも別れては　知るも知らぬも逢坂の關　蟬丸

とあるのを見ると、蟬丸は此のあたりに閑居したものと思はれる。關の清水の址もこのあたりにある。

あふ坂の關の清水に影見えて　今や引くらんもち月のこま　紀貫之

二、宇治の茶どころ

順路

一、宇治停留場——宇治川——宇治橋——平等院——縣神社——浮島十三塔——橋寺——宇治神社——宇治川水力——興正寺——宇治停留場——（行程約四粁）

二、黄檗停留場——黄檗山——三室戸寺——以下第一と同樣——（行程約八粁）

（沿　線）——宇治木幡諸陵墓——稚郎子の墓

（「宇治川ライン」は三四三頁參照）

黄檗山萬福寺　京都府宇治郡宇治村五箇庄、黄檗停留場東凡二百米

——宗派、黄檗宗の大本山——本尊、釋迦牟尼佛——

居留地の如き別天地

寛文年間德川四代家綱の時、明の歸化僧隱元禪師の開基である。其の結構樣式一山の風儀慣例より、念經諷文に至るまですべて純然たる支那式で、皆明洲の黄檗山萬福寺に模して建立したものである。德川氏の初

世に當り宗風盛に行はれ、武家の歸信を得た。山主も代々支那僧法席を繼ぐことゝなり、言葉までが支那式で鎖國の時代にあつては一種の居留地の如き別天地となつてゐた。

山門を出れば日本の茶摘歌

寶曆六年始めて日本人が黄檗十四代の山主となつた。又十五代は支那僧で十六代から全く日本人を以て法席を繼ぐことゝなつた。

後水尾天皇の御宸筆を始めとして、佛像・書畫・古器物等の寶物が非常に多い。殊に一切經の原版（小學讀本卷十一、鐵眼和尚參照）は名高いものである。當寺の建築用材に多くのチークを用ひてあることは全國に其比を見ない特色で、殿舍は概ね特別保護建造物となつてゐる。

寺僧經營の普茶料理は黄檗宗獨特の名物精進料理である。

三室戸寺　京都府宇治郡宇治村菟道、御室戸停留場東凡一粁

——宗派、天台宗寺門派——本尊、千手觀音——

西國三十三所第十番の札所

夜もすがら月をみむろと分け行けば　宇治の川瀨に立つはしら波

第四十九代光仁天皇寶龜年間禁中に奇瑞あり、天皇右少辨犬養に勅して宇治郡菟道に至らしめたが、菟道山の奥志津川の水源岩淵に於て黄金の佛像を得叡感斜ならず、御室を此の地に移して伽藍を建立され僧行表開基し御室戸寺と稱した。其の後火災に罹つて燒失したが、寛平年間智證大師之を再興した。三條天皇・堀河天皇・後醍醐天皇より寺領若干を賜はつた。其の後亦、數回火災に罹り寺地を移すこと三度、文明年間（約四百五十年前）後土御門天皇の勅願により今の地に再興し今日に及んでゐる。

境内は千古の老杉天を摩し、實に閑雅清淨の仙境である。

宇　治　京都府久世郡

京都の南塞兵家必爭の地

京都を距ること十六粁、交通の要衝に當り歴史上著名の地である。此の地往昔は地域も廣く、京都の南東宇治川の兩岸に跨り、今の宇治町及び宇治村より田原・小倉・槇島・木幡・五ケ莊等を併せて菟道と稱へた。其の川東の地一帶を菟道の彼方郷と稱へ、稚郎子皇子は此の地に宮居して桐原日桁宮又は宇治宮と稱へた。後三十五代皇極天皇大和飛鳥宮より近江國比良宮に行幸の時、行宮を此所に作り一夜宿らせ給ふてから宇治の都と言ひ傳へた。降つて藤原氏の時に至り陽成・宇多・朱雀天皇相繼いで離宮し給ひ、王公縉紳爭ふて別業

を構へ伽藍を建造し、貴人隱士の幽栖せしものが多かつた。

此の地宇治川の急流を控へ、南都及び東國より京都に入る要害の地なるが故に、事ある毎に、必爭の地となつた。治承の役には源三位頼政以仁王を奉じて平家と此の地に戰つて遂に憤恨の哀史を止め、元暦年間には義經が義仲を攻めて佐々木・梶原の兩將が先陣の爭ひを演じ、又延元の亂には楠木正成足利勢を防がんがために火を民屋に放つて平等院まで延燒した。斯の如く屢々戰亂の巷となり兵火にかゝりしより、さしも隆盛を極めた名勝史蹟も今は空しく一個の仙郷となつた。近時宇治川の堤防に櫻・楓を植ゑてその清流に風致を添へ、四時遊覽の地となつた。製茶は古より名高く其の名内外に喧傳せられてゐる。

宇治は茶所

宇治は茶所として知られた名に背かず、宇治町一帶の丘陵地に茶の栽培が盛んである。産額は靜岡・三重に及ばないが玉露の産出は兩縣より遙かに多く、此の地獨特の名聲を博して居る。普通宇治茶と銘して販賣さるゝは、奈良・三重から煎茶を、神戸より紅茶を移入して此の宇治茶と混じたるものだといふ。

宇治茶の沿革

建久二年僧榮西、宋より歸朝の際江南の茶樹を齎し僧明惠其の種子を栂尾に栽植した。後永和四年足利義滿、大内義弘に命じて茶樹を宇治・醍醐・栂尾の三地に植ゑしめた。足利義政の時に至り茶道盛に

行はれ製茶の法も亦進歩した。此の時宇治郷に上林久重なるもの、創めて茶園に覆を施し精巧な碾茶を製した。玉露茶は天保六年江戸茶商山本嘉兵衛碾茶製造用の青芽を以て玉露と稱して諸侯に贈り賞讃を博したに初まる。煎茶は文久三年小谷茉、釜熬(カマイリ)に代つて蒸甑(セイロ)を用ひ初めて色澤美麗、馥郁たる香氣ある良品を製出したに始まるといふ。

主要なるものの販路を略述すると、

玉露――東京、名古屋、神戸、廣島。

煎茶――海外へ（神戸、靜岡より）内地は勿論新領土に迄及んでゐる。

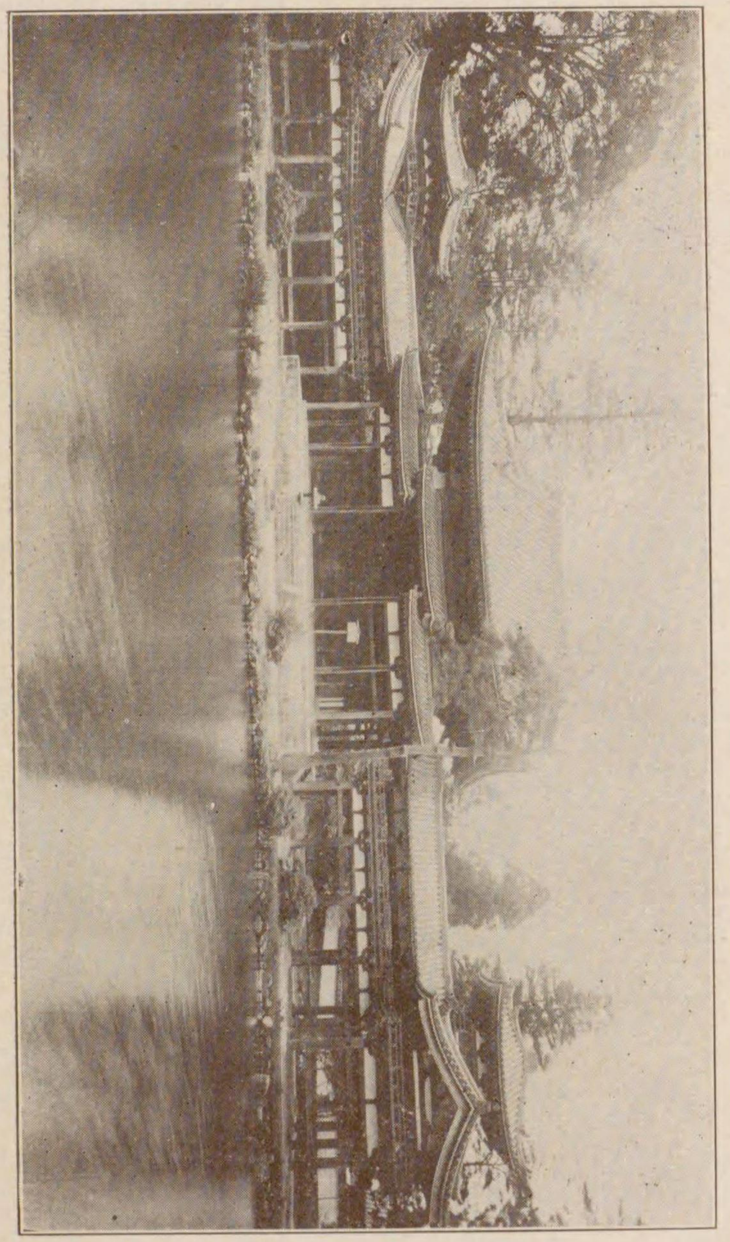
碾茶――愛知、新潟、鳥根、大阪。

宇治川（瀬多川）

源を琵琶湖に發して石山を過ぎ、南郷前で宇治川水力電氣の水路を分ち、洗堰及び閘門を起し、翠綠奇巖を縫ふて蜿蜒十七粁にして宇治に至る。川は鮎の漁獲多く昔は網代を張つてこれ等の魚を捕る業が盛であつた。百人一首の「あさぼらけ宇治の川霧たへ〳〵に、あらはれわたる瀬々の網代木」の歌は人のよく知る所である。

水勢急なため古來要害の地として京都を守る要害となつたことは一再でなかつた。

（「宇治川ライン」は三四三頁參照）



――藤原氏の榮華を語る――鳳凰堂

——優麗の限をつくせる——鳳凰堂の內部

宇治橋　宇治町

本邦最古の橋

八十四間の長橋で瀨田唐橋、錦帶橋とゝもに我が國三名橋の一である。上古は船渡であつたが、孝德天皇（約一千三百年前）大化二年南都元興寺（グワンゴウジ）の僧道登・道昭勅を奉じて架せしものが始で本邦最古の橋である。其の當時のものは橋の長さ八十三間四尺、幅三間であつた。其の後兵亂又は洪水等で屢々墜落した。源三位頼政が平家と戰つた時、この橋板を剝がしめた物語は有名なものである。天正六年織田信長、秀吉に命じて改造せしめた。又橋の三の間と言つて南の欄干を廣さ一間許り張出してあるのは、古昔此所に橋姫祠を鎭座したゝめである。秀吉の時に至り此の三の間から橋守通圓に茶の水を汲ませたと傳へてゐる。慶長四年に改造されたが舊觀を變ぜないやう、高欄には青銅（カラカネ）の擬寶珠二十三基を用ひ、三の間をも存してゐる。

忍熊（オシクマ）王の亂

應神天皇即位元年二月天皇は先帝の柩を奉じて京へお還りになつた。庶兄忍熊王兵を擧げて播磨に迎へうち、三月退いて宇治に陣した。神功皇后、武內宿禰等をしてこれを打たしめ給ふた。宿禰等は精兵を率ゐて河の北岸に陣した。宿禰、忍熊王を誘ひて曰く「願はくは共に弦（ツル）を斷ち兵をすて和を講ぜん。

君王天位に登り天機を制せよ」と乃ち軍師をして弦を斷ち兵を解いて川に投ぜしめた。忍熊王これを信じ亦弦を斷ち兵を解くに及び宿禰令を下して藏むるところの刀弦を出し河を渡つて打つた。王は遂に敗走された。

以仁王の擧兵

治承四年（凡七百五十年前）擧兵の謀があらはれた折、源頼政は其の子仲綱・兼綱等と王を奉じて三井寺にのがれたが、兵少くして久しく保ち難いことを思ひ遂に南都に走つた。途に軍をとゞめて宇治平等院に休んだ。平知盛等兵二萬餘騎を率ゐて攻めた。頼政は宇治橋を落してこれを待つた。東天白む頃深い霧に乘じて進んだ平軍は、橋上から墜死するもの數を知らぬ程であつた。これを見た足利忠綱は急流に馬を進めて押し渡つた。大軍之に從ひ大に平等院に戰ふた。以仁王南走し給ひ頼政もこれに從ふたが適々流矢が膝に中つた。頼政すなはち王と永訣し、くつわを廻して敵を射て之をしりぞけ、矢盡くるに及んで平等院の釣殿に入つて自刄した。（三八三頁扇の芝參照）

源義仲追討

壽永二年（凡七百五十年前）源義仲は京に入つて狼籍を極めたので、後白河法皇はひそかに義仲追討の院宣を頼朝に下された。頼朝は二弟範頼・義經をして兵六萬騎を率ゐて京都に向はしめた。義仲はこれを聞いて宇治・瀨多の二橋を落してふせぎ守つた。義經は伊賀から廻つて宇治橋に至つた。佐々木高綱、梶原景季先陣を爭ふて川を渡り、畠山重忠等亦岸に上つて大に戰ひ、義仲の軍を敗つた。

佐々木高綱宇治川の先陣　初め頼朝に生喰（イケヅキ）・磨墨（スルスミ）の二匹の名馬があり、就中生喰が優れてゐた。範頼及び景季之を得ようとしたが、頼朝は惜んで與へず磨墨の方を景季に賜はつた。諸將士が出發した翌日佐々木高綱が近江より來つて頼朝に謁した。頼朝は意外な面持をして「卿は直ちに京都へ向つたものと思つてゐた、圖らざりき、此の地に來られやうとは」と、そこで高綱は「凡そ戰陣に望むものは生きて還ることを望みませぬ、故に一度君に見えて訣別し、且つ指揮を受けやうと存じ馳せて三日漸く參りました。實は馬が疲れて用に立たず爲にかやうに後れました」と。頼朝曰く「卿我が爲に宇治川に先登するか」と、高綱曰く「誓つて先登いたしませう。臣は近江に住して其の河の深淺を知つて居ります」と。こゝに於て頼朝生喰を出して之に賜ひ誡めていふのには、「範頼、景季等が乞ふたけれども與へなかつたものである。今之を卿に與へる、其つもりせよ」と。高綱は感謝して「高綱苟くもまだ死なゝいで戰ふて居ると聞き給はゞ、則ち先登は高綱であると覺ぼし召せ」と拜舞して出た。

道を急いで晝夜兼行浮島原に至る頃本軍に追及んだ。これより先き梶原景季群馬の磨墨に及ぶものないのを誇つて、丘に上つて衆に示したのであつた。然るに今高綱が生喰を牽ゐて來るのを見て景季大に怒り、高綱を刺さんとして刀を叩いて路に要した。高綱は之を望見してうなづき溫言を以て慰めた。景季色解けて相共に西に向ひ、義經に從つて宇治に進んだ。

敵は橋板を撤して鹿角を立て、綱を水中に張つて拒いだから、東軍も急に渡ることが出來ない。時に衆に先んじて流を亂して渡つたものは卽ち高綱と景季であつた。平家物語によると、

矣（コヽ）に平等院の艮（ウシトラ）、橋の小島が崎（遺跡は明瞭でないが宇治橋の上流二百米の邊だと言はれてゐる）より

武者二騎引つかけ引つかけ出で來り、一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木四郎高綱なり。人目には何とも見えざりけれども、内々先きに心を懸けたるらん。梶原は佐々木に一段許りぞ進んだる。佐々木「如何に梶原殿、此の河は西國一の大河ぞや。腹帶の延びて見えさうぞ縮め給へ」といひければ、梶原「さもあるらん」とや思ひけん、手綱を馬のゆがみに捨て、左右の鐙を蹈み返し、腹帶を解いてぞ縮めたりける。佐々木其の間にそこをつと馳せ抜いて、河へ颯とぞ打ち入りたる。梶原「たばかられぬ」とや思ひけん、やがて續いて打ち入りたり。梶原「いかに佐々木殿高名せうとて不覺し給ふな。水の底には大綱あるらん心得給へ」といひければ、佐々木「さもあるらん」とや思ひけん、太刀を抜いて、馬の足にかかりける大綱どもを、ふつ〳〵と打ち切り〳〵、宇治川早しと雖も、生食といふ世一の馬（天下一の名馬）には乘つたりけり。一文字に颯と渡つて向ふの岸にぞ打ち上げたる。梶原が乘つたりける磨墨は、河中より篭繋形に押し流され、遙かの下より打ち上げたり。其の後佐々木、鐙蹈んばり立ち上がり、大音聲を揚げて「宇多天皇九代の後胤、近江の國の住人佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや」とぞ名乘つたる。

承久の變

承久三年、後鳥羽上皇は北條義時が專横で皇室を皇室とも思はない振舞をにくみ、義時を討つべき院宣を賜ふた。義時は其の子泰時及び叔父時房をして京師を犯さしめた。官軍は諸將を分遣してこれを宇治川の要害に防いだ。六月十三日、泰時は近江栗子山を越えて宇治に至り、十四日家屋を毀つて筏を作

り、宇治川を渡つて大に官軍を破り、火を民家に放つた。官軍は弓箭をすてゝ敗れ去つた。

足利尊氏の東上

建武二年十二月、足利尊氏は弟直義と、新田義貞の軍を箱根の竹下に破り、之を追ひうつて長驅宇治川に至つた。延元元年正月一日、川をはさんで官軍と戰つた。十日官軍遂にやぶれ尊氏は進んで京に入り、後醍醐天皇は叡山に行幸された。

平等院　宇治町

——宗派、天台・淨土の兩宗——本尊、阿彌陀如來——

河原左大臣源融公の別業であつたが、其の後、陽成天皇行宮を建てられ宇治院と稱へ、續いて宇多・朱雀兩天皇も離宮とされた。後六條左大臣雅信の有となつたが、長德年間藤原道長請ひて其の山莊となし、其の子關白頼通之を承け此の地で國政を執り、永承七年別業を改めて寺とした。此の時頼通入道して寂圓と號した。時に年八十二。天皇勅額を賜ひ平等院といつた。院内に明治天皇の玉座がある。

鳳凰堂

平等院の本堂で無量壽院と稱へ、永承八年宇治關白頼通公の建立。本殿は佛殿を以て鳳凰に象り破風

送り二重の瓦葺である。左右の廊閣は双翼る張るに擬し、堂後の廻廊は其の尾に象り、甍上の雌雄鳳凰は黄銅製で天風に從つて泛舞した。（今は動かなくなつた）因つて鳳凱堂と言つたのである。内部には定朝の作になる丈六阿彌陀如來を始め名作が多い。堂宇は特別保護建造物となつてゐる。八百七十餘年を經た古建築で、其の間幾回か兵火に遭ひ佛閣・寶藏等烏有に歸したが、幸に本堂のみ其の災を免がれ巍然として獨り存し、藤原時代優秀の建築を保ち、好古美術家の模範となつてゐるのみならず、觀光外人も嘖々として我が國古建築の美妙に驚嘆してゐる、堂前に阿字池がある、惠心僧都の作る所であるといふ。池邊の石燈籠は頼通好み平等院形と稱し、我が國最古の石燈籠として名高いものである。

鳳凰堂の建築其の他

鳳凰堂は建築として藤原の初期時代を代表するばかりでなく、其の壁畫裝飾及び本尊と小佛の彫刻など相並んで代表的に重要なものである。

其の平面と立面とを見るに、變化極めて多く、これを左右均齊の法則で統一し、しかも各所の釣合はよく保たれてゐる。先づ其の平面が中央の本殿を置き、左右と後部に翼を作つた如き、上世の日本建築としては他に例なき變化を示し、立面に於て最著しい點は、屋根が本殿の入母屋造、翼廊の切妻造、樓閣の寶形と、殆んど日本建築の屋根の主なる種類を盡し、更に裳層の屋根の中央を破つて一段高めたるが如き變化を求め、尚、細部にわたつては柱に圓柱、角柱、組物に三手先、一手先（出組）三斗と、驚くべき變化を作り、しかも各所の調和は極めてよく、全體は左右均齊を以て括られ、實に一分の隙もな

く一絲整然と亂れざる概がある。

飜つて内部に入れば、床は板張で、中央一間を佛壇とし、上に丈六の阿彌陀座像を安置し、天井は折上組入天井で支輪の曲線は最も巧妙に、小壁には五十二佛を懸け列ねてある。而して外部は柱、壁とも丹塗にし、垂木、尾垂木の鼻には透彫、唐草模様の金具を附けてあるのみだが、内部に於ては柱には寶相花及び菩薩像を彩色で描き、組入天井も皆寶相花の模様を描き、四方の壁及扉には淨土曼荼羅、九品往生等を描き、乳金物をつけ、八双には毛彫を施してある。又、佛壇には格狭間を作り、貫東其の他は一面に螺鈿を施したのであるが今は悉く剝落し、格狭間内の銅板も後世のものが篏めてある。

（日本美術史講話）

釣殿

池を隔てゝ鳳凰堂の北にある。

釣殿は一に觀音堂といひ本尊は十一面佛で釣殿觀音と言つてゐる。鳳凰堂の北にある瓦屋で東に向つて居る。河原左大臣が釣を垂れて樂しんだ跡で、昔は其の邊に河水を引いたといふ。八百餘年を經た古建造物で、今は特別保護建造物となつて居る。始めの釣殿は扇の芝の邊にあつたと言はれてゐる「頼政卿親子平等院釣殿に於て自害し訖る」（帝王編年記）とも見え、又「寛治二年十月宇治御幸（嵯峨上皇）平等院の釣殿に御舟よせておりさせ給ふ（增鏡）とある。

扇の芝

釣殿の北扇面形の芝生に柵を廻らし、中に自然石の一碑がある。治承年間源三位頼政平家と戰つて破

れ遂に此處に扇を打敷き自刄した遺跡だと傳へられてゐるが確でない。鎧掛松、駒繋松などは後に植ゑたものである。頼政最後の辭世に「埋木の花咲くこともなかりしに、みのなるはてぞあはれなりける」と言ひも果てず自害したといふ。

源頼政の墓　寂勝院境内

頼政扇の芝に自盡後茲に葬つたといふも是亦確かでない。

淨土院　鳳凰堂の後

——宗派、淨土宗——本尊、阿彌陀如來——

明應二年（約四百四十年前）榮久上人平等院の廢頽を憂ひ、近衞家に乞ふて修繕した際本院を建立したのである。通用門は羽柴秀吉の寄附で門内には融大臣遺愛の枝垂櫻がある。本堂前には賤が岳七本鎗の諸候が寄進した一對の石燈籠がある。本尊阿彌陀如來を始め古彫刻、古書畫、古器物等の寶物が多い。

鐘樓　鳳凰堂の南の小丘上にある

樓は六本柱より成つてゐる他に類なき建造物。鐘は鳳凰堂建築と同時代のものと推定、無銘ではあるが頗る雅致に富み、古來日本三名鐘（形は平等院、音は三井寺、銘は神護寺）の一といはれてゐる。

縣祭（アガタ）で名高い縣神社　宇治町（淨土院の西）

祭神、木華開耶媛（コノハナサクヤヒメ）、縣の森にある。媛は又の名吾田津媛（アガタツヒメ）と稱し、吾田と縣（アガタ）と國音相通ずるより縣神社

といふと。昔は平等院鎭守の神であつた。神德は商賣繁榮、思ひ事叶ふと古來言ひ傳へ賽客が多い。殊に毎年六月五日の大祭は「あがた祭」とよばれ幾萬といふ人が遠近より雲集する。

浮島十三繪の塔　浮島

浮島は平等院の前の川中にある一小島で、洪水の時も隱れることがないとて浮島と名づけたのである。弘安九年十月十六日思圓上人宇治橋のすたれたのを歎き、之が再建を計つたが、水流急激で工事を爲しがたきに因つて、網代禁止の官符を受けて殺生を禁じ、龍神の冥助を祈つて此處に高さ五丈八尺の石塔を建立し、網代禁止の官符を南面にほりつけたが寶曆六年九月に洪水のために壞落した。その後百七十餘年間空しく砂中に埋沒してゐたのを、明治四十年有志之を發掘して九段目の笠石を除く外全部掘り得たるにより、其の笠石と破損せる九輪とを新に造つて、翌年十月舊觀に復した。臺石は八角形で高さ八尺、其の中に日露役戰死者の英名を小石に淨書し、尙小石に經文を書して共に納め之を以て地盤に代へ、其の上に九尺四方の臺石を据え、水輪の角盤を量ね、其の臺上に十三重の笠石を積み重ね、九輪の塔尖がのせてある。高さ五十尺。

通圓茶屋　宇治橋北東詰東凡そ百米

宇治川の右岸橋寺の前にある。其の祖大敬庵（ダイギヤウアン）通圓風流韻事を好み、かの一休禪師と交りがあつた。子孫代

々古川通圓と稱して此處に住し、縉紳公卿遊覽の時茗を煑て之を呈した。家に尊朝親王の染筆に係る御茶屋の額、一休筆一服一錢の書、一休作の通圓木像、治承時代の茶釜、豐公の釣瓶等を藏し、今も茶及び茶器を賣つて居る。

通圓が頭巾につゝむ螢かな　超波

橋寺　宇治橋の北東詰東凡そ百米北側

宇治橋の斷碑

放生院常光寺と稱してゐる。道登、道昭架橋の時創建した寺である。今は寺宇一小堂のみ殘つてゐるが、境内には彼の名高い宇治橋の斷碑を藏して居る。

大化二年宇治橋を架し其の北岸に石銘を建つ（扶桑略記）と、あるのは卽ち之である。碑は早く埋沒して久しく顯はれずにゐたが、寛政三年四月石銘の上半を發掘した。尾張の人中村維禎、帝王編年記に載する全文によつて修補した。依つて斷碑と稱するやうになつた。斷碑の全文は三行に刻せられたもので、左記の字旁に批點を施したものは古碑の殘存する上半に刻せられた文字である。

洸々横流　其疾如矢　修々征人　停騎成市　欲赴重深　人馬亡命　從古至今　莫知抗輩

世有釋子　名曰道登　出自山尻　惠滿之家　大化二年　丙午之歲　構立此橋　濟度人畜

卽因微善　奚發大願　結因此橋　成果彼岸　法界衆生　普同此願　夢裡空中　導其苦緣

伊豫の道後の碑、上野多胡の碑等と共に我が國の古碑の一であつて、金石學上貴重なものである。

宇治神社　宇治町、宇治橋北東詰南東凡二百米

下の宮――社格、府社――祭神、稚郎子尊――

上の宮――社格、村社――祭神、應神天皇・仁德天皇・稚郎子尊――

延喜式に宇治神社二座とあるはこれである。此の地は稚郎子皇子の宮居し給ふた桐原日桁宮の舊地で、下の宮は宇治川の東畔老松古杉蓊鬱たる小高い所にある。仁德天皇卽位元年の草創で今の本殿は永承八年關白頼通公の造營である。

上の宮は下の宮の東背凡百米の桐原山の麓、老樹蓊鬱たる森林中にある祭神は中央に應神天皇、右に仁德天皇、左に稚郎子尊の三座を祀る。其の御背扉には大鷦鷯、稚郎子二皇子の御像の彩畫があるが剝落して見分け難い。拜殿は院の御所の殿舍を賜はつたものである。以上三殿は特別保護建造物となつてゐる。

最古の神社建築、上の宮

この社殿は、藤原の初期時代唯一の神社建築遺物で、又現存せる神社建築の最古のものである。一間社流造を三つ連結し、左右の二殿が大きくして高く、それに入母屋造の屋根を葺いて、中央の社殿は下に入つてゐる。向拜の柱は角柱で、大なる面をとり三斗を用ひ、前には勾欄がある。この柱、組物、勾欄はすべて鳳凰堂のものと似てゐる。左右社殿の正面に立派な本蟇股がある。其の曲線は甚だ美しい。

（日本美術史講話）

宇治川筋水力發電所

宇治川電氣株式會社の經營にかかる宇治川筋の、宇治、志津川及び大峯なる三發電所は、其の川筋の地勢の高低差と四季渇水の憂なき豐富無限なる琵琶湖の水とを利用し、總計七萬六千「キロワット」の電力を發生し、之を京都、大阪及び其の附近の地に送り、照明、動力等の用に供給して居る。

宇治發電所　（第一期工事、起工明治四十一年十二月、竣工大正二年七月）

この發電所は京都府久世郡宇治町大字宇治鄕なる宇治川の右岸にある。水量毎秒時二千二百立方尺を引用、有効落差二百四尺を利用し、三萬二千「キロワット」の電力を發生し、之を電壓五萬五千ボルトに遞昇して、架空電線路により京都及び大阪に送つて居る。所屬取水路は滋賀縣滋賀郡石山村大字南鄕

瀬多川洗堰の上流約四百米の地點を取入口とし、それより發電所の背部佛德山の中腹にある調整水槽に至るまで、水路の延長は二里二十九町、其の勾配は二千分の一、途中極めて短距離の開渠七個所の外はすべて隧道で、佛德山背後の開渠に至るまでは水路は一條であるが、同所よりは之を三條の隧道に分けて調整水槽（方形間口二十二間、奥行九間、深さ三間）に導き、更に六條の水壓鐵管（内徑八呎、各條平均長さ四百十四尺）を以て佛德山の山腹を下り、發電所水車に連絡せしめて居る。

志津川發電所　（第二期工事、起工大正九年九月、竣工大正十三年三月）

この發電所は京都府久世郡槇島村字槇尾山なる宇治川の右岸（宇治發電所の上流約千三百米の地點）にある。水量毎秒時二千八百立方尺を引用し、二萬八千「キロワット」の電力を發生し、之に大峯發電所から送電して來る電力を併せ、宇治發電所に於けると同じく、電壓を五萬五千「ヴォルト」に遞昇し、架空電線路により大阪に送つて居る。所屬取水路はこの發電所の上流約三粁の地點に於て堰堤を設け、其の上流約七粁の區域に亘りて水をたたへ、堰堤の少しく上流の右岸を取入口とし、それから山腹を一直線の隧道により貫くこと凡二粁、宇治村大字志津川字仙鄕谷の調整水槽に出で、それより三條の水壓鐵管（内徑十一呎、平均長さ六百十二尺）を以て發電所水車に連絡せしめて居る。

大峯發電所　（第四期工事、起工大正十三年八月、竣工大正十五年六月）

この發電所は宇治發電所の上流約五・五粁の地點、即ち第二期工事堰堤の直下にある。水量毎秒時三千

五百立方尺を引用、有効落差七十尺を利用し、一萬六千「キロワット」の電力を發生せしめ、これを一度志津川發電所に送り、大阪方面に供給して居る。所屬取水路は延長僅に九十一間、即ち堰堤の少しく上流の左岸、志津川發電所取入口と相對してその水門を設け、堰堤直下に於て直に發電所水車に連絡せしめて居る。

大平發電所　（第三期工事）

この發電所は未だ工事に着手してゐないが、南郷宇治發電所取入口の下流約五十間の箇所に於て、瀬多川右岸を開鑿し取入口を設け、それより蓋渠隊道及び開渠より成る全長約四粁餘の導水路を穿ち、石山村大字外畑字大平地先（大峯發電所上流約八粁の箇所）に至り、瀬多川右岸に發電所を設け、水量毎秒時一千八百立方尺を引用し、五千四百「キロワット」の電力を發生せしめる豫定である。

興聖寺　宇治町（朝日山の半腹）宇治停留場南東凡そ一粁

――宗派、曹洞宗――本尊、釋迦牟尼佛――

曹洞宗最初の靈刹

佛德山と號し日本に於ける曹洞宗最初の靈刹で、五十餘の末寺を有し曹洞宗一派の中本山である。始め深

草の極樂寺舊址に伽藍を建立し、宋國から歸朝せる道元禪師に請ふて開山したものであるが、四世嚴寒和尚に到つて廢絶した。後三百餘年を經て慶安二年淀城主永井尚政、名刹の頽廢を惜んで地を今の處にトして堂塔伽藍を再建し萬安和尚を請じて中興の開祖とした。今の堂宇が之である。鐘樓は慶安四年（凡そ二百八十年前）の建立で林道春撰書の銘になる鐘がある。

門前の二百米ほどの坂道を琴坂といひ、兩側は楓樹枝を交へて幽邃である。境内清淨でつゝじが多い。

道元禪師

道元禪師は曹洞宗の開祖で宋に渡り天童如淨禪師に學び、歸朝して越前に永平寺を創立し、大いに大乘佛敎、不立文字の法を弘め、寂後承陽大師と諡號された。

沿　線

一、宇治木幡諸陵墓　京都府宇治郡宇治村、小幡停留場東凡そ二百米

木幡の關址は伏見の東、今の六地藏堂の北西にあたる。木幡には藤原冬嗣以下藤原氏歷代の諸墓並に皇妃・皇子の陵墓が多い。延喜式に宇治の墓と言ふのは皆是である。中古以來祭展のこと絶え蕩然荒廢に歸し甲乙殆んど辨識し難い。

後宇治墓　太政大臣正一位藤原冬嗣

次宇治墓　太政大臣正一位藤原基經

又宇治墓　太政大臣正一位藤原時平

宇治陵　醍醐帝後の中宮藤原穩子（朱雀・村上二天皇の母）

中宇治陵　村上帝皇后藤原安子（冷泉・圓融二天皇の母）

今宇治陵　後三條帝皇后藤原茂子（白河帝の母）

後宇治陵　堀河帝の皇后藤原茨子（鳥羽帝の母）

其他　藤原溫子（宇多帝の中宮）、懷子（光孝帝の母后）、超子（三條帝の母后）、詮子（一條帝の母后）、彰子（後一條帝の母后）、妍子（三條帝の中宮）、威子（後一條帝の中宮）、嬉子（後冷泉帝母后）、敦實親王（宇多帝の皇子）、敦道親王（冷泉帝皇子）、藤原道隆・道長・頼通・忠通の諸陵墓があるが一々詳にしがたい。

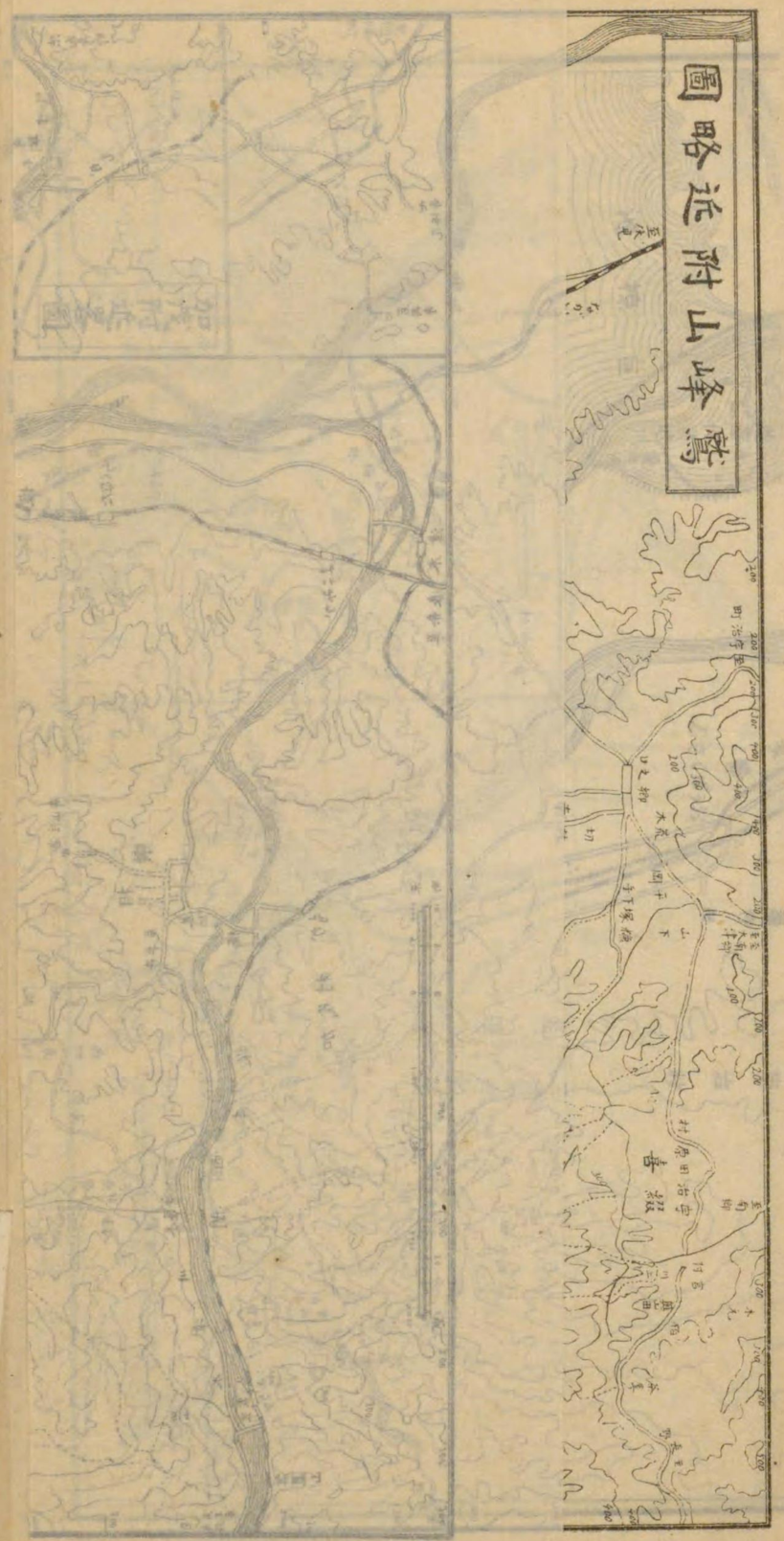
木幡山六地藏の北西にある亘幡の墓（今は金塚と呼ぶ）は桓武帝の皇子伊豫親王の陵である。

二、稚郎子皇子（ワカイラツコワウジ）の墓　宇治町

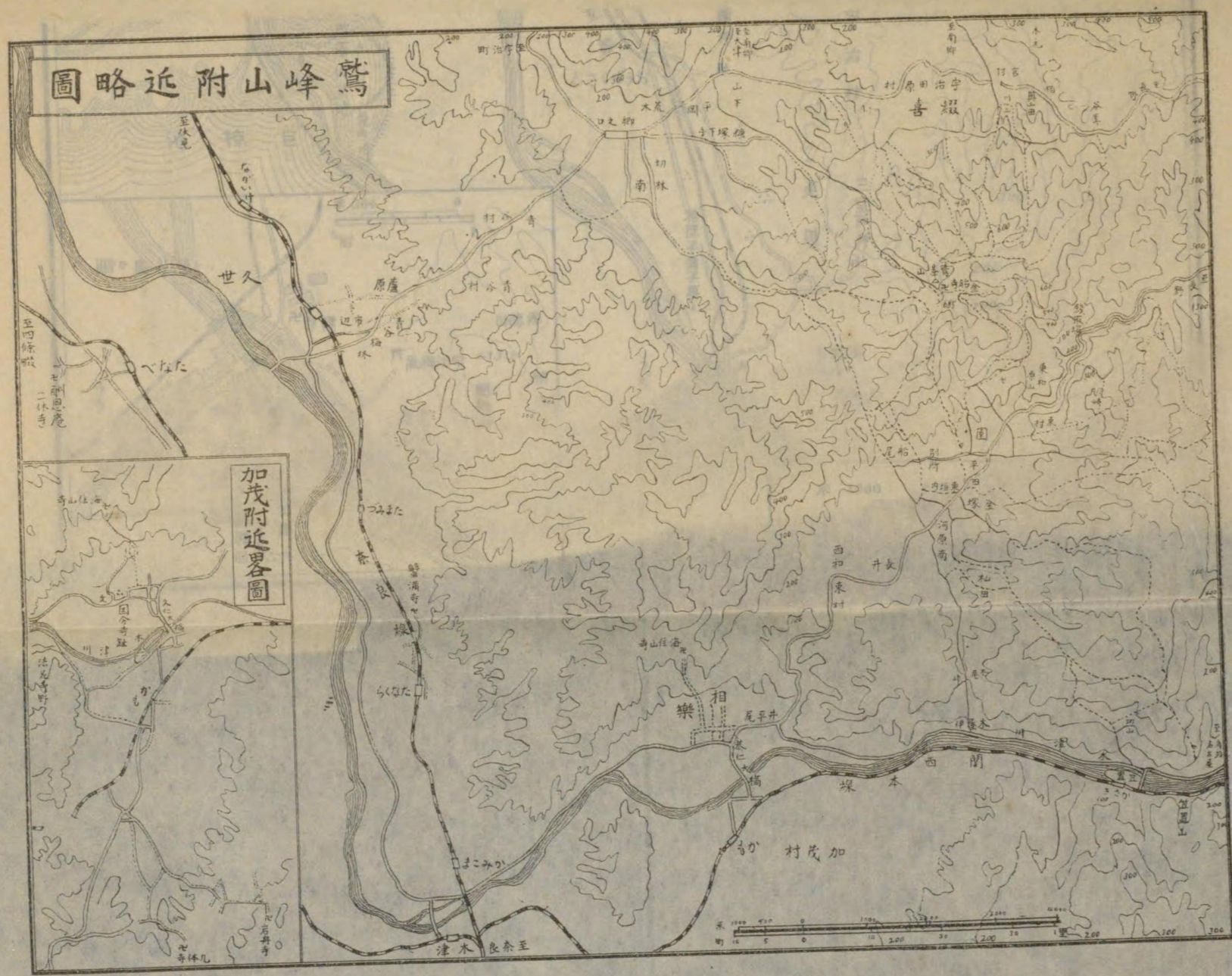
宇治橋北東詰京街道を北西へ三百米許の松林の中にある。此の地は古から丸山と稱へた地で、今は尊の御墓所として玉垣を廻らし塋域森嚴である。

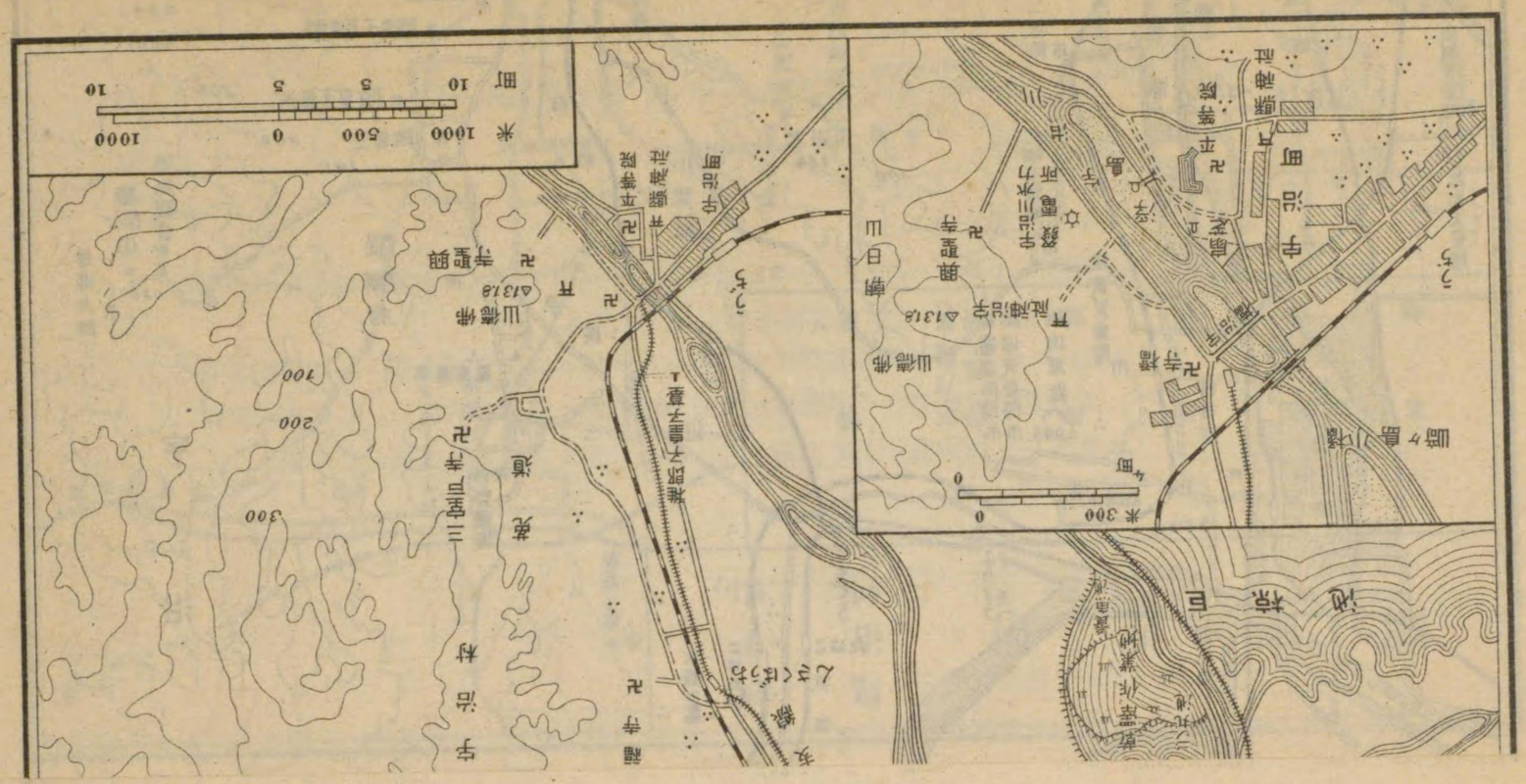
皇子稚郎子の薨去

應神天皇稚郎子皇子を愛し、立てゝ皇太子となし給ふたが、帝の崩後皇太子稚郎子皇子は兄大鷦鷯（オホサヽキ）皇



應神天皇稚郎子皇子を愛し、立て、皇太子となし給ふたが、帝の崩後皇太子稚郎子皇子は兄大鷦鷯皇

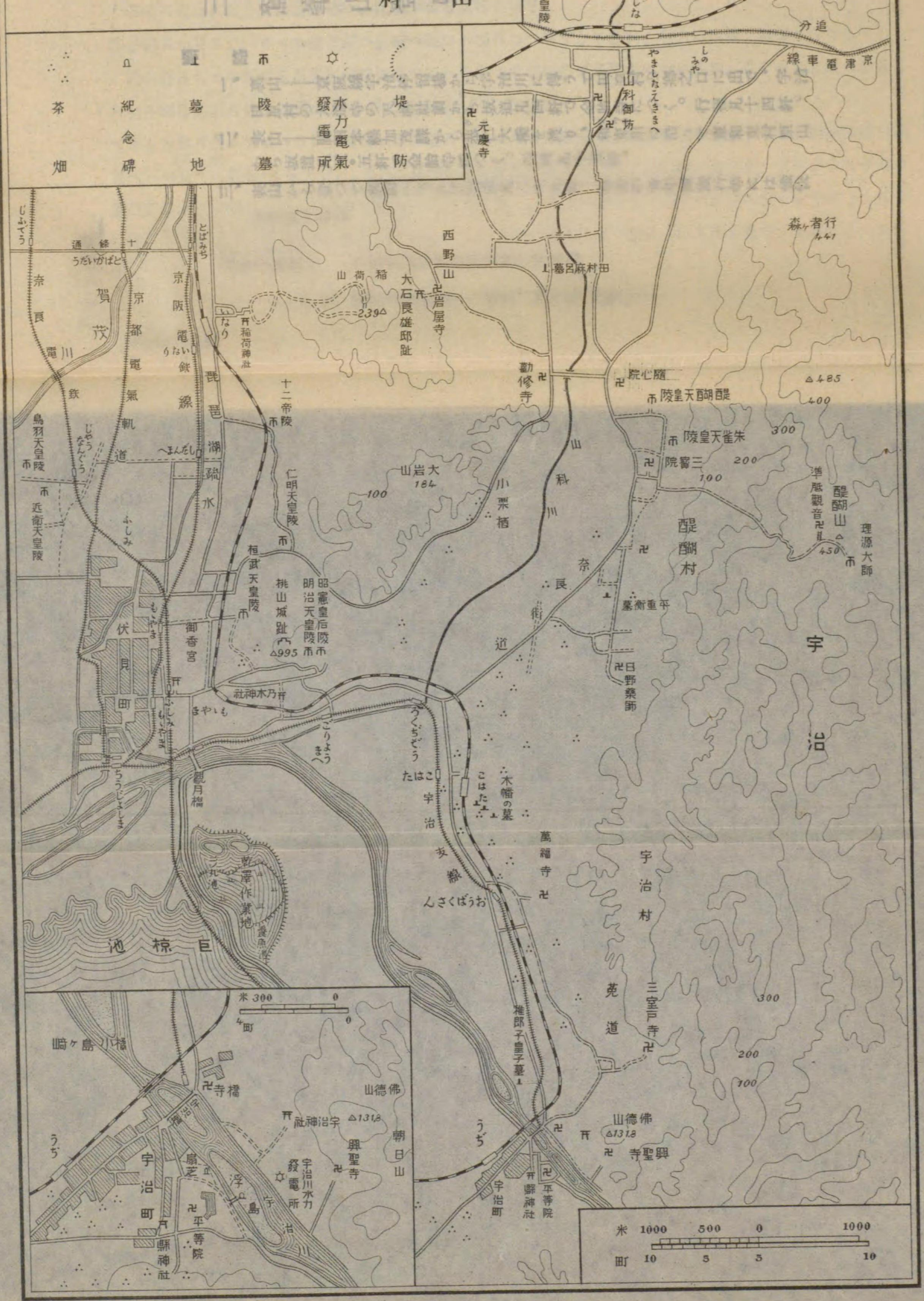



池袋丘
東京府北豊島郡
巣鴨小学校
豊島ヶ島川橋
卍寺橋
山徳佛
△138
興聖寺
中沿町
卍平等院
卍
米300 0
ヶ町 0
宇治村
三宝寺
卍
長道
300
200
100
山徳佛
△138
卍 寺聖興
開
卍
卍平等院
北海線
卍
町沿中
ノ
ノ
東京駅
ムさくはらお
卍
福寺
米 1000 500 0 1000
町 10 5 5 10

伏見宇治山科附近略圖

堤防
水力電氣發電所
墓地
陵墓
紀念碑
茶畑

天智天皇陵
やましな
山科御坊
しのみや
やましなえきまへ
元慶寺
追分
京津電車線
逢坂山トンネル
西野山
大石良雄邸趾
岩屋寺
稲荷山
239
田村麻呂墓
森ヶ者行
441
勸修寺
醍醐天皇陵
朱雀天皇陵
三寶院
醍醐村
準胝觀音
醍醐山
450
理源大師
山科川
奈良街道
重衡墓
日野桑師
宇治
宇治村
萬福寺
木幡の墓
宇治支線
うぢぐちぞう
たはこ
こはた
ごりょうまへ
社神木乃
桃山城趾
995
昭憲皇后陵
明治天皇陵
桓武天皇陵
御香宮
伏見町
ふしみ
もやま
まやいも
觀月樓
乾澤作業地
巨椋池
養魚場
京阪電鉄線
京都電氣軌道
奈良電鉄
賀茂川
うだいがはと
じふぞう
とばみち
なり
琵琶湖疏水
稲荷神社
十二帝陵
仁明天皇陵
近衛天皇陵
鳥羽天皇陵
へんぢし
じゃうなんぐう
崎ヶ島小橋
寺橋
宇治神社
興聖寺
佛徳山
朝日山
扇芝
宇治川
宇治橋
宇治支線
うぢ
宇治支線
雄郎子皇子墓
三室戸寺
菟道
米 300 0
4町 0


茶畑
紀念碑
上墓地
陵墓
水力電氣發電所
堤防
追分
京津電車線
山科御坊
元慶寺
西野山
上墓呂麻村田
大石良雄邸跡
稲荷山
239
稲荷神社
醍醐天皇陵
朱雀天皇陵
三宮院
醍醐村
醍醐山
理源大師
準胝觀音
450
485
400
300
200
100
森ヶ者行
441
勸修寺
十二帝陵
仁明天皇陵
桓武天皇陵
桃山城跡
995
昭憲皇后陵
明治天皇陵
御香宮
伏見町
社神木乃
觀月樓
乾漆作業地
巨椋池
琵琶湖疏水
京都電氣軌道
京阪電鉄線
奈良電鉄
賀茂川
鳥羽天皇陵
近衛天皇陵
酒造
大石
184
小栗栖
山科川
奈良街道
墓衛重平
日野桑師
宇治
木幡の墓
萬福寺
宇治支線
宇治村
菟道
三室戸寺
椎郎子皇子墓
佛徳山
興聖寺
宇治町
縣神社
平等院
宇治川水力發電所
宇治神社
朝日山
興聖寺
扇芝
浮島
崎ヶ島
橋
寺橋
米 300 0
町 4 0
米 1000 500 0 1000
町 10 5 5 10

子に位を讓り給ひ、皇位爲に空しきこと三年、太子は遂に自殺したまふた。大鷦鷯皇子慟哭し後皇位に登らせ給ふた。仁德天皇が即ち之である。

三、鷲峯山登り

順路

一、裏山——京阪線宇治停留場から宇治川に傳うて田原村の郷之口に出で、宇治田原村の大道寺の天神社前から坂道凡四粁で金胎寺につく。行程凡十四粁。

二、表山——關西本線加茂驛から恭仁大橋を渡り、和束川に沿うて東和束村原山から坂道凡三・五粁で金胎寺につく。行程凡十五粁。

三、表山から登つて裏山へ下れば行程凡二十九粁。春先の青年團旅行等には愉快な登山である

鷲峯山金胎寺（ジユブセンコンタイジ）　京都府相樂郡東和東村大字原山

——宗派、眞言宗高野派——本尊、彌勒佛（國寶）——

北の山上ケ嶽

寺は天武天皇の白鳳四年（約一三〇〇年前）役の小角が開いたもので、天竺の靈鷲山に模したものと傳へ古來修驗道の道場として知られ行基・鑑眞・空海・最澄等の高僧も登山修行したが、今は荒れはてゝ昔の面影もない。

山は大峯山と同じ様に全部秩父古生層で、奈良盆地から遠望すると黑々と横たはる剛壯な姿は南はるかに烟の様な大峯と對して北の山上の名にふさはしい。堅い秩父古生層の岩が水蝕を受けて崖や瀧が多い、これに人工を加えて露佛・石像を立て、或は岩窟をうがち尊嚴を加へてゐる。其行場も鳴川や、犬鳴山の元山上とちがつて實に堂々たるもので大峯山上の行場に比べることが出來る。其絕頂を空鉢峯と云ひ、寶篋印塔を建て北斗星の拜所になつてゐを。（寺に行場めぐりの案内人あり）

延元元年八月廿四日後醍醐天皇は京都を出でさせられ奈良の東南院へ入らせ給ひ、ついで廿六日この山に行幸遊ばされたが、こゝも亦山深く、里も遠くて思はしくなかつたので、廿七日笠置へ御移りになつた。

山内に伏見天皇の行宮址がある、其處を虛空藏岳と云ふ。

多寶塔は特別保護建造物で鎌倉末期の手法を表現した優秀な建物である。錢弘俶八萬四千塔一基は國寶である。

片町線

一、四條畷と野崎まゐり

二、田邊の一休寺まで

一、四條畷と野崎まゐり

順路

一、四條畷驛——四條畷神社——飯盛山——和田賢秀墓——小楠公墓——四條畷驛——（行程約五粁）

二、四條畷驛——四條畷神社——和田賢秀墓——小楠公墓——四條畷驛——（行程約三粁）

三、野崎驛——野崎觀音——四條畷神社——和田賢秀墓——小楠公墓——四條畷驛——（行程約六粁）

四條畷神社　北河内郡甲可村大字南野、四條畷驛東凡六百米

——社格、別格官幣社——祭神、楠木正行——例祭、二月十二日——

楠木正行を祀る四條畷神社

社は楠木正行を主神とし、弟正時及和田賢秀等二十四人を合祀し別格官幣社に列してゐる。明治二十二年の創建にかゝり境内櫻多く、社殿は飯盛山の麓勝景の地を占め、眼下に畷の古戰場を瞰下し、そゞろに六百年の昔をしのばせるものがある。

四條畷　大軌線瓢簞山の南東およそ五百米

枚岡南村に四條といふ部落がある。四條畷はこの四條の野をいつたものであるが、明治二十二年正行戰歿の地に靈祠を創建、飯盛山下の北條を改めて四條村としてから、もとの四條畷は忘れられてしまつた。

四條畷の戰

正平二年正行二十二歳にして父の機略をつぎ藤井寺・住吉・天王寺の戰に連戰大勝し勢望日に高し。尊氏之を聞き心おだやかならず。之を絶滅すべしとて高師直・弟師泰を大將とし四國・中國・東海・東山二十餘ヶ國の諸大名を差遣す。その勢六萬騎と稱す。正行之を迎へ討つべく吉野の行宮に御暇乞をなし、如意輪堂に辭世の歌をのこして河内に進む。

敵のそなへを見るに翌三年正月二日師泰(モロヤス)泉州堺に出で、師直は正面より河内の四條畷に進む。山手には諸大名陣し、來らば横合より駈落さんと構へ、平地には前衞として千餘騎控へ、二十町ばかり引下りて總大將師直二萬騎の大勢にて圍まれて居たり。たとひ正行項羽(コウウ)が山を拔く勢ありとも、この中に馳入りて戰ふべしとは見えず。

一方吉野の官軍は正月五日四條隆資(タカスケ)二萬餘人を引具し山手の敵に向ひこれをひきつけ正行をして四條畷へ寄せさせん計略なり。

案の如くなりしかば正行三千餘騎を率ゐまつしぐらに四條畷に押寄す。縣下(アガタ)野守出でゝ進路を遮りしも勇氣勃々(ボツ〳〵)たる勢にもろくも下野守深手を負ひ兵三百餘騎を失ふ。次に武田伊豆守の七百騎と懸合ふ。

是れも殘少なに討ちしも楠勢も大半創を蒙る。これを見たる佐々木道譽の三千餘騎一度に鬨(トキ)を作つて來り戰ふ。正行力戰せしも三百騎を殘すのみ。一時支へ得ずして南をさして引退き又犇々と打寄せ只師直をと心懸け眞一文字に本陣にぞ迫る。賊の諸勇將之を見て我れ討取らんと五百騎・七百騎次々に擊つてかゝりしも盡く楠が爲に駈散されぬ。

この時楠勢百騎も討たれ馬も矢三四筋射立てられければ、皆馬を棄てゝ徒歩になり、田の畔を後ろに六萬の敵軍環視の中に心閑かに兵糧をぞ使ふ。敵軍も驚歎してかほどの兵を取籠めて討たんとせば身方の兵多く亡びぬべしとて圍みを解く。されど正行は心に期する所あれば一歩も退かず、攻め立てゝ本陣の目の前に迫り、すは楠が本望爰に遂げぬと見えたる時上山六郎左衞門、師直の前に馳寨がり大音聲に

「高武藏守師直これにあり」と名のりて討死しける間に師直は遙かに難を逃れぬ。正行其の首を手玉に取りて悦びしも斯くと知り大に立腹して、さらばと再び進みて師直を一町ばかりに追ひつめたれど、今朝より三十餘度の苦戰に體つかれ息喘ぎ、特に淺手・深手負はぬ者はなく心ばかり早りて騎馬武者を追詰む。敵は强弓を雨の如くに射る。正行も正時も急所を射らる「今は是れまでぞ敵の手に懸かるな」とて兄弟刺違へて同じ枕に臥しければ、相從ふ者三十餘人思ひ〳〵に自害す。正行が智勇才德父に讓らざるに奉公長からず、南朝の運之が爲に蹶まりしは深く惜むべし。(趣味の日本史)

飯盛山

北河內郡四條村大字北條、四條畷驛南東凡七百米

三百十八米の飯盛山

金剛山脈中の一連嶺である、地形花崗岩の突兀たる、その傾斜度は中腹四條畷神社より頂上に至る、平均三十度。登攀甚だ困難ではあるが、山頂は千疊敷と稱する平たい臺地を現はし、眼下に展開する攝河の平野を一望のものとに觀察し得らるゝ好適地で六甲山・生駒山・山崎・天王山と雄を競ふに足るほどである。山上には、飯盛城の殘壘斷礎獨り存してゐる。城は建武元年北條の餘黨の根據地であつた所、永祿年中には三好長慶が威を京畿に振ふた時の根據地ともなつてゐたが、長慶沒落と共に廢墟に歸し今日に及んでゐる。

山上よりの觀察

街道と聚落

東高野街道　山麓を南北に通じ、往時京都・八幡方面と河內南部及紀伊方面との唯一の交通路であつた。從つて聚落は之に沿ふて山麓に發達してゐる。

古堤街道　飯盛山の南麓車谷を通じて大阪と奈良とを連絡する交通路で、之に沿ふての聚落は現時片町線の通ぜる所。

淸瀧街道　飯盛山の北麓淸瀧を通じて奈良縣龍田と北河內守口方面とを連絡するもので、淀川邊で京街道と合致し大阪市天滿方面を通ずる。當山地と北攝の山地との中間低地を洋々と西南方に流れる淀川を瞰下する事を得る。淀川左岸に沿ふて京街道あり、京都・大阪間の主要交通路たりしもの、近時京阪電車の通じてより其交通的價値を奪はれた觀がある。

四條畷の地形　此地は西方一面干澤で往時深野池、草香江などがあつて大和川に連絡して居た。故に飯盛山麓のみは地形上唯一の要路たりしもので兵家必爭の地として表はれたものである。殊に小楠公奮戰の地として人口に膾炙せらるゝ所。

其他

(一)　飯盛山は金剛山脈に屬する花崗岩地で、南部の片麻岩帶と地質構造を異にし、六甲・摩耶及び笠置山の東北部に表はれてゐるものと同じ地質構造をもつてゐる。

(二)　地形上水源の涵養淺く、山麓一帶の平地には大河の水量を利用すること殆んど無いために、水

利灌漑には此地の谿水を利用せるものが多い。從つて丘陵地に挾まれた山谷を堰き止めて溜池を造り其灌漑用水源を涵養してゐるのを見られる。飯盛山北方の谷に於ける室池附近はこの一例である。

（三）飯盛山北方の甲可村、南方の車谷、辻子谷に至る一帶の傾斜地には谿谷の水力を利用して水車を廻轉し、小規模ながら精米、製粉等の事業を營めること多い。水力の一利用を說くに便。

蓋し斷層緣なる此傾斜地は谿水の流下從つて急で水力利用、殊に水車の施設には恰好の地形に依るからであらう。

（四）平地に於ける聚落の形式は所謂集村の狀態で近畿地方の特色を表はし、關東方面の散村と往々比較せられるものである。

和田賢秀墓　北河內郡甲可村大字南野、四條畷驛北凡そ五百米

畷を隔てゝ小楠公の墓と相對し草靑く松しげるところ、墳上一片の碑がある。天保二年、浪華の人永田友之の建てたもので、高さ五尺、碑面に「和田源秀戰死墓」と刻してある。賢秀（正行從弟）は四條畷の戰に於て猶一人傷きて生き、しきりに賊魁をもとめて深く敵陣にはいり、却つて反忠者湯淺某の爲に觀破せられて戰歿した。湯淺某、一旦の功に誇るとも、賢秀最後の一睨心魂を離れずして狂死したと傳へられてゐる。

碑背に句あり

むかし問へばすゝき尾花のあらし吹く。

楠木正行墓　北河內郡甲可村大字南野、四條畷驛西凡三百米

小楠公戰歿の地

蓊鬱たる老樟下の一大碑。題して「贈從三位楠木正行朝臣之墓」とある。大久保利通の筆。

正平三年正月五日逆賊大擧來襲。正行一族を率ゐて禁闕に訣辭し如意輪堂の扉に鏃もて「かへらじとかねて思へば梓弓」の詠を留め、進みて四條畷に小勢を以て六萬の賊に當り、兵を合すること三十餘合、賊將を寸歩に逸し、刀折れ身傷き兄弟相刺し南を拜して殪れた。年二十三。時の人塚上に一木を植え標石に「南無權現」とほりて忠魂を慰め、世々楠塚と稱し來つたのを、明治十年堺縣令稅所氏有志と圖り、域を修め、碑を建て以つて今日の盛觀をみるに至つた。

境內に楠公夫人の碑がある。亦後年夫人頌德の爲めの建碑。土俗に相傳ふ。小楠公殉難の日夫人其戰況を慮りひそかに戰地を距る二里許りの地に來り、はじめて愛兒の忠烈なる最期を聽かれたと。

野崎觀音　北河內郡四條村大字野崎、野崎驛より東五百米

——宗派、曹洞宗——本尊、十一面觀音——

野崎詣うでの野崎觀音

開基創建年代不詳、本尊は行基菩薩の手刻觀音と傳へられ著名の靈像である。

一旦荒廢に歸せしを一條院の御宇、江口の遊君參籠して病平癒してから再興の機緣となり、後元和年中に伽藍を修して現今のものとなつた。四時賽するもの多く特に春時五月一日より十日間、無緣經の修行の節には野崎詣といつて非常に賑ふ。

野崎詣

往時無緣經法會の際、大阪より參詣するに寢屋川の舟による者、堤防を步行する者相互にのゝしり合ひ打ち興じながら參詣した。これを野崎詣といつて樂しい春の年中行事に數へられてゐた。

二、田邊の一休寺まで

順路

一、星田驛――獅子窟寺――岩船神社――星田驛――（行程約十四粁）

二、田邊驛――一休寺――田邊驛――（行程約二粁）

三、星田驛――獅子窟寺――岩船神社――四條畷神社――四條畷驛――（行程約十七粁）

（沿　線）　王仁の墓

天の磐船（イハフネ）

私市（キサイチ）の南東は、山脈展列し峩々として其の一峽を爲せる所に、星田村より天の川落ち來りて通じ、緩急迂回して岩石變幻を極め、一大巖これに跨つて居る、謂ゆる磐船である。高さ十八米、長さ十五米、其形船の樣で之が本社の御神體である。傳にいふ饒速日尊の天津御祖の詔をうけて、十種の神寶を授かり、峰（タケル）峰に降り給ひし時に用ひられし、天の磐船であると。

春面に加藤肥後守の五字をほりつけてある。其緣由は詳でないが大阪築城のとき、清正は此石を輸送せんとして名字をほつたが、動かなかつたから終に其まゝになつたと傳へて居る。

岩船神社　北河内郡磐船村大字私市（キサイチ）（信電、私市驛南凡そ三粁　星田驛南凡そ六粁）

――社格、無格社――祭神、表筒男命・中筒男命・底筒男命・息長帶姬命――

獅子窟寺　北河内郡磐船村大字私市、（信電私市驛東凡そ一、五粁　星田驛東凡そ三、五粁）

――宗派、眞言宗――本尊、藥師如來――

行基の開基、獅子窟寺

本寺は大覺寺派山城國槇尾山西明寺末で、僧行基の開基である。寺傳に初め役小角金剛山より錫を飛ばして此の地に來り、藥師如來の淨土としたが、聖武天皇の御宇行基勅命を承り、自作の藥師佛を安置し堂塔の外僧房十二院を置き、壯嚴佳麗を極めた。後天長年中、弘法大師も此の地に壇を立てゝ、佛眼明妃の法を修したが、其後大いに衰へた。偶々龜山上皇靈天に感ぜられ臨幸祈願あらせられ、病御平癒になつたので、有司に命じて再興せしめられ、殿堂また煥然として復舊した。正平年間當寺の衆徒は津田城主中原範高に屬して、尊延寺衆徒津田寺衆徒及び交野三十九士と共に楠木正儀に扶持せられしといへば其衆徒は武人に伍し兵馬の巷に威を振つた事であらう。文祿・天正の頃より復衰微したとは云へ、南遊紀行に佛堂の美麗なりと見ゆれば、元祿の頃迄は尙昔の俤を殘せしものと思はれる。今は荒廢して凄燈低く迷へる樣である。

境內三千五百十六坪、本堂・方丈・鐘樓・經堂・仁王門を存し、本堂には、聖武天皇及ひ龜山院の尊牌を安置してゐる。

獅子窟は本堂の北側の石段上にあり、其狀獅子の口を開きて吼ゆるが如く、是れ此の名ある所以である。一に金剛大般若窟と呼び、窟內に弘法大師及び大日本如來の小石像を安置してゐる。奧の院は數百米を隔てたる山奧で、又龍岩窟とも稱し、不動尊の石像を安置してゐる。

寺域は高所にあるので東は京都、西は大阪を望み、平野に散在する大小の村落指呼の裡に入り、宛然繪の

如き風景。老松、奇石、淸泉、天の川は山下數百米の外を流れて趣を添へてゐる。

本尊藥師如來の座像壹軀は木造で、國寶になつてゐる。

百重原陵

仁王門の側より、北へ二百米字百重ヶ原に至る。鬱蒼たる老椎の下に拾貳坪許の坦地がある、一段高く前面に石垣を築き、背後は小丘を爲してゐる。裡に二基の石塔がある。是れ後龜山院の百重ヶ原御陵と言ひ傳へ、同院並に同皇后の御陵と云ふが、名所圖會の記せるが如く車駕を廻らせ給ひし時、御喜捨の御報恩のための塔であらう。

薪の一休寺（タキヾイッキウジ）（酬恩庵（シウオンアン））　綴喜郡田邊町薪、奈良電新田邊驛西約二粁、田邊驛の西約一粁

——宗派、臨濟宗大德寺派——本尊、釋迦牟尼佛——

一休和尙入寂の地

田邊驛下車、西へ凡そ一粁、町をぬけて藪のほとりをつたうて平坦な道、凡十五分で寺につく。

寺はもと京都紫野大德寺の大應國師によつて創建されて妙勝寺（メウショウ）といつた。康正年間（凡そ四百八十年前）一休和尙は遺跡がすたれるのを悲しみ、堂塔を再建して法祖の恩に酬ゆる意味で、酬恩庵と名づけた。和尙

は遂にこゝで入寂(ニウジヤク)した。

山門をはいると正面に凡そ三かゝへもある大杉が三本ある。一休和尚手植と傳へてゐる。

一休和尚の墓は三本杉から右へまはる角の塀の内にある。單層入母屋造、本瓦葺の小堂。墓域の周圍二十八間五分ある。

本堂、本尊釋迦牟尼佛、單層で桁行三間、梁間三間、屋根入母屋造、檜皮葺の特別保護建造物。

大應堂には大應國師の像を安置し、方丈には一休禪師の坐像（自作）を安置、今國寶になつてゐる。方丈の北から東へかけての庭園は石川丈山・松花堂・佐河田喜六三氏の合作といひ、十六羅漢遊行の圖に因んだものとして知られ、木石の配合極めて淡白の内に言ひ知れぬ氣高さがある。

後小松天皇の皇子一休和尚

名は宗純、後小松天皇の皇子で一休はその號である。出家して大德寺の華叟宗曇の弟子となり佛道を修業して知識高德となつた。つひに華叟についで大德寺四十七世の住僧となつた。性磊落(ライラク)、驕慢(ケウマン)であつたが人これを畏敬した。又書畫をよくし、とりわけ花鳥、山水、人物の如きは粗にして清趣があり、特に梅・岩・蘭に巧みであつた。又、洒脫(レヤダツ)な狂歌はよく人に知られてゐる。文明十三年（凡そ四百五十年前）入寂(ニウジヤク)年八十八。

文學の始祖、博士王仁の墓　北河内郡菅原村大字藤坂、長尾驛南凡一粁

博士王仁の墓は、字御墓谷にあり、もと壹百參坪の内に圓形なる自然石の碑があつて、其前面左右に石の花生筒並び其間に五十糎角位の囘向石と石の手水鉢一個を存し、里人はおにの塚と呼んで畏敬し齒痛及び瘧(オコリ)に罹つたものゝ之に祈れば靈驗ありと言つて、七五三(シメナハ)繩を以てその碑を縛して祈り、癒ゆれば其繩を解くを例として居た。其の碑が博士王仁の墓なることは殆んど知る人はなかつた。

享保年中、五畿内志編纂のために巡廻せる並川永氏は、此古墳を認めて其終に湮滅せんことを歎じ、領主久貝彌右衞門の許を得、高さ一米の石に博士王仁墓と刻して其後方に建てた。其後文政十年、招提村の人家村盈德、有栖川宮家の臣大石兵庫と謀りて、更に之を表彰したもの、臺石三重の上に建てた高さ一米の碑である。表面に刻せる博士王仁墳の五字は、有栖川宮殿下の御染筆で、其の碑は舊碑を距る數十歩の所に据えられた。碑は舊碑・新碑・新々碑三基となつた。當時家村盈德の家に王仁の舊記を所藏して居たが、有栖川宮家の儒臣綾井某なるもの之を聞き、大石兵庫と謀り家村盈德と議して、當墓石棚補修の資を募集せんが爲め、其古記を携へて播・丹に赴き、遂に踪跡を失して舊記も亦世に出でなくなつたのは惜むべきことである。

墓は此の兩碑成つて王仁の墓たること明になつたが、其墓城狹隘で荒廢のまゝであつたので、山中與三郎・寺島彦三郎の兩氏首唱者となつて、一は王仁の靈を地下に慰め一は文學の始祖たる其偉功を天下に